上野国府等範囲内容確認調査報告書Ⅲ

推定 上野国府

～平成25年度調査報告～

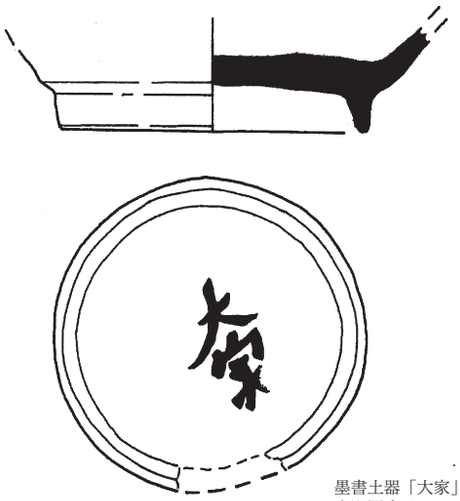
2015.3

前橋市教育委員会

上野国府等範囲内容確認調査報告書Ⅲ
推定 上野国府
～平成25年度調査報告～
前橋市教育委員会

推定上野国府

～平成25年度調査報告～



墨書土器「大家」
上野国府21aトレンチW―１号溝跡出土

2015．3

前橋市教育委員会

1　21ａトレンチ　W―１号溝跡　遺物出土状態（南から）

２　21ａトレンチ　W―１号溝跡　黒色土器出土状態（南から）

３　21ａトレンチ　W―１号溝跡　出土遺物

４　21ａトレンチ　W―１号溝跡出土　墨書土器「大家」

５　墨書土器「大家」　赤外線写真

6　21ａトレンチ　W―1号溝跡出土　墨書土器「本」

7　墨書土器「本」　赤外線写真

はじめに

前橋市の総社・元総社地区周辺は、宝塔山古墳や蛇穴山古墳をはじめ山王廃寺、国分僧寺、国分尼寺などの諸施設が立ち並ぶ古墳時代から律令期にかけての上野国の中枢地域と考えられ、上野国府もその一角にあったと推定されています。

国府とは、律令制の下、各国ごとに置かれた国司の役所で、特に上野国府は平安時代の中頃に起きた平将門の乱の舞台となるなど、記録にも度々その名前が登場します。しかしながら、その中心施設の国庁の位置や、国府域の範囲など、その内容については、詳しいことが分かっていません。

この問題を解決し、後世にわたり保存・活用するための基礎的な資料を得るために文化庁、群馬県教育委員会の指導を受けつつ、「上野国府等調査委員会」において、毎年検討会を開催しながら、平成23年度から５カ年計画で継続的な確認調査を行うことになりました。

今回、上梓する報告書は、その３ヵ年目の調査内容をまとめたものです。本年度は、国府関連施設が存在した可能性が高いと考えられる総社神社及び元総社小学校を中心に調査を行いました。ここでは国府に関係すると思われる遺物が多数出土し、特に重要な遺物については、その分野の第一人者に執筆を依頼し、玉稿をいただきました。これらの熟考も踏まえたうえで、今回の調査成果をまとめ、上野国府解明への道筋を再構成することを目指しました。

最後に、本事業の推進にあたり、国・県・市の関係各位のご理解とご協力に対して深く感謝する次第です。また、地元の元総社町各自治会をはじめ土地所有者の皆さんからも惜しみない協力をいただくことができました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

平成27年３月

前橋市教育委員会
教育長　佐　藤　博　之

例　　言

1．本報告書は、上野国府等範囲内容確認調査計に基づき、５ヵ年の調査計画（平成23～27年度）の３年次調査として、平成25年度に実施した発掘調査の報告書とともに過去の調査を総括した報告書である。

2．遺跡は群馬県前橋市元総社町一丁目31番地45号ほかに所在する。

3．発掘調査は、上野国府等調査委員会の指導のもと前橋市教育委員会が実施した。調査の要項は以下のとおりである。

①発掘調査期間　　平成25年７月１日～平成25年11月27日

②整理・報告書作成期間　　平成25年11月28日～平成26年３月31日

③調査組織（平成25年度）

上野国府等調査委員会

⑴　委員会

委員長　松島榮治（前橋市文化財調査委員）

副委員長　須田　勉（国士舘大学文学部教授）

委　　員　林部　均（国立歴史民俗博物館教授）、梅澤重昭（前橋市文化財調査委員）、井上唯雄（同）、右島和夫（群馬県文化財保護審議会委員）

幹　　事　高島英之（群馬県教育委員会文化材保護課文化財活用係主幹）、石田　真（同埋蔵文化財係指導主事）、中島　實（前橋市教育委員会管理部長）、角田文明（同総務課長）、能登　健（同文化財保護課文化財整備指導員）、松村親樹（同文化財保護課長）

顧　　問　佐藤博之（前橋市教育委員会教育長）

指　　導　文化庁文化財部記念物課文化財調査官、柿沼則久（群馬県教育委員会文化課保護課長）

⑵　調査部会

幹　　事　松田　猛（高崎市立西部小学校長）、田中広明（公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団主査）、出浦　崇（伊勢崎市教育部文化財保護課埋蔵文化財担当主査）

⑶　事務局（担当課　前橋市教育委員会文化財保護課）

課長（幹事）　松村親樹　　文化財整備指導員　能登　健

副参事　前原　豊（兼埋蔵文化財係長）

係　　員　岩丸展久、藤坂和延、小峰　篤、福田貫之、阿久澤智和、寺内勝彦

④発掘・整理担当者　　阿久澤智和、寺内勝彦

4．本書の編集は阿久澤･寺内が行った。なお、神谷佳明氏（公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）、高島英之氏、田中広明氏より玉稿をいただいた。

5．発掘調査・整理作業にかかわった方々は次のとおりである。

石倉稔夫、齋藤簡詳、髙澤京子、戸丸澄江、奈良啓子、峰岸あや子、山田哲也

6．発掘調査にあたり、井田彌寿雄氏、伊藤シゲ子氏、伊藤千代子氏、岡野けさ子氏、平井喜久衛氏、宗教法人総社神社の土地を借用した。

7．調査および報告書作成にあたっては下記の諸機関・諸氏の御教示・御指導・御協力があった。

群馬県教育委員会文化財保護課、群馬県埋蔵文化財調査事業団

石田　真、出浦　崇、井上唯雄、梅澤重昭、神谷佳明、宗教法人総社神社、城田博巳、須田　勉、都木周彌、高島英之、田中広明、林部　均、前橋市立元総社小学校、松島榮治、松田　猛、右島和夫、水谷貴之

8．発掘調査で出土した遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

凡　　例

1．挿図中に使用した北は、座標北である。

2．挿図に建設省国土地理院発行の１：200,000地形図（宇都宮、長野）、１：50,000地形図（前橋）を使用した。

3．本遺跡の略称は、25A147である。略称の後に枝番を付し、トレンチ番号を示した。

4．遺構及び遺構施設の略称は、次のとおりである。

H…古墳～奈良・平安時代の竪穴住居跡　　B…建物跡　　W…溝跡

D…土坑　　P…ピット・柱穴・貯蔵穴　　A…道路　　O…落ち込み

5．遺構・遺物の実測図の縮尺は、次のとおりである。

遺構　　全体図・遺構配置図…１：200、１：60などを適宜用いた。

遺構断面図…１：60　　住居跡…１：60（竈…１：30）　　溝…１：60

遺物　　土器…1/3・1/4

6．計測値については、（　　）は現存値、［　　］は復元値を表す。

7．遺物観察表については、以下のとおり記述した。

①層位は遺構出土の場合、「床直」・「底面」：遺構底面より10cm未満の層位からの検出、「覆土」：床面より10cm以上の層位からの検出の２段階に分けた。

②口径、器高の単位はcmである。現存値を（　　）、復元値を［　　］で示した。

③胎土は、細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0～1.9mm）、粗粒（2.0mm以上）とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名等を記載した。

④焼成は、基本的に極良・良好・不良の三段階とした。ただし、須恵器について酸化焔焼成によるものは「酸化焔」と記載した。

⑤色調は土器外面で観察し、色名は『新版標準土色帳』（小山・竹原1967）によった。

8．遺構平面図の－－－－は推定線を表し、－‐－‐－は竪緻面の範囲を表す。

9．スクリーントーンの使用は、次のとおりである。特別な場合は図版ごとに凡例を設けた。

遺構平面図　　版築…　　粘土分布…　　炭化物分布…　　灰分布…

遺構断面図　　構築面…

遺物実測図　　須恵器断面…　　煤付着…

10．主な火山降下物等の略称と年代は次のとおりである。

As-B　（浅間Ｂ軽石：供給火山・浅間山、1108年）

Hr-FP　（榛名二ッ岳伊香保テフラ：供給火山・榛名山、６世紀中葉）

Hr-FA　（榛名二ッ岳渋川テフラ：供給火山・榛名山、６世紀初頭）

As-C　（浅間Ｃ軽石：供給火山・浅間山、４世紀前半）

目　　次

Ⅰ　調査に至る経緯……1

Ⅱ　遺跡の位置と環境……2
　1　遺跡の立地……2
　2　歴史的環境……2

Ⅲ　調査方法と経過……6
　1　調査方法……6
　2　調査経過……8

Ⅳ　基本層序……9

Ⅴ　遺構と遺物……11
　1　各トレンチの概要……11
　2　各トレンチの検出遺構および状態……14

Ⅵ　ま と め……51
　1　成果について……51
　2　今後の課題……69

Ⅶ　寄　　稿……71
　1　元総社小学校校庭出土の黒色土器について（神谷佳明）……71
　2　元総社小学校校庭新出土の墨書土器について（高島英之）……76
　3　上野国府域出土の陶硯について（田中広明）……78

挿図目次

Fig. 1　推定上野国府位置図…… 3
Fig. 2　周辺遺跡…… 5
Fig. 3　２m小グリッドの呼称…… 6
Fig. 4　グリッド設定図と平成25年度調査区…… 7
Fig. 5　基本層序模式図と各トレンチ土層柱状図……10
Fig. 6　各トレンチ全体図(1)……12
Fig. 7　各トレンチ全体図(2)……13
Fig. 8　17・18トレンチ各遺構……21
Fig. 9　18・19・22トレンチ各遺構……22
Fig.10　21ａトレンチ各遺構(1)……23
Fig.11　21ａトレンチ各遺構(2)……24
Fig.12　23トレンチ各遺構(1)……25
Fig.13　23トレンチ各遺構(2)……26
Fig.14　26トレンチ各遺構(1)……27
Fig.15　26トレンチ各遺構(2)……28
Fig.16　24ａ・24ｂトレンチ各遺構……29
Fig.17　24ｂトレンチ各遺構……30
Fig.18　25トレンチ各遺構(1)……31
Fig.19　25トレンチ各遺構(2)……32
Fig.20　総社神社境内出土遺物……33
Fig.21　元総社小学校校庭出土遺物(1)……34
Fig.22　元総社小学校校庭出土遺物(2)……35
Fig.23　元総社小学校校庭出土遺物(3)……36
Fig.24　元総社小学校校庭出土遺物(4)……37
Fig.25　元総社小学校校庭出土遺物(5)……38
Fig.26　区画溝範囲確認調査の出土遺物(1)……39
Fig.27　区画溝範囲確認調査の出土遺物(2)……40
Fig.28　東山道国府ルート確認調査の出土遺物(1)……41
Fig.29　東山道国府ルート確認調査の出土遺物(2)……42
Fig.30　総社神社、元総社小学校周辺の状況……52
Fig.31　元総社小学校周辺の主な出土遺物(1)……54
Fig.32　元総社小学校周辺の主な出土遺物(2)……55
Fig.33　元総社小学校周辺の主な出土遺物(3)……56
Fig.34　元総社小学校周辺の主な出土遺物(4)……57
Fig.35　元総社地内の大溝（区画溝）……60
Fig.36　各区画溝の断面……62
Fig.37　推定東山道国府ルートと関連遺跡……65
Fig.38　推定東山道国府ルートとその周辺……66
Fig.39　陶硯の分類と存続期間、特殊な陶硯……82

表目次

Tab. 1　各トレンチの面積と調査目的…… 6
Tab. 2　調査経過表…… 8
Tab. 3　土坑・ピット・落ち込み計測表……43
Tab. 4　遺物観察表……45
Tab. 5　元総社周辺で検出された区画溝……63

図版目次

【巻頭図版】
1　21ａトレンチW―１号溝跡　遺物出土状態
2　21ａトレンチW―１号溝跡　黒色土器出土状態
3　21ａトレンチW―１号溝跡　出土遺物
4　21ａトレンチW―１号溝跡出土　墨書土器「大家」
5　墨書土器「大家」　赤外線写真
6　21ａトレンチW―１号溝跡出土　墨書土器「本」
7　墨書土器「本」　赤外線写真

【遺　構】
PL. 1　17、18、19トレンチ
PL. 2　21ａ、22トレンチ
PL. 3　21ａ、21ｂ、23トレンチ
PL. 4　23トレンチ
PL. 5　23、26トレンチ
PL. 6　26トレンチ
PL. 7　24ａ、24ｂ、26トレンチ
PL. 8　24ａ、24ｂ、25トレンチ、調査風景

【遺　物】
PL. 9　各トレンチ出土遺物(1)
PL.10　各トレンチ出土遺物(2)

Ⅰ　調査に至る経緯

前橋市の元総社・総社地区は総社古墳群、山王廃寺、国分僧寺・尼寺に代表される多くの遺跡が存在し、古代上野国の中心地として栄えた地域である。上野国府についてもこれまでの研究から元総社町付近に設置されていたと考えられている。こうした歴史的な環境をふまえて、前橋市教育委員会では元総社・総社地区の歴史遺産を有機的に関連付けた保存・活用を目指し、平成18年度から22年度までの５年間山王廃寺の範囲内容確認調査を実施し、伽藍配置の解明等の成果を収めることができた。その一方で元総社町では元総社蒼海土地区画整理事業の進行にともない発掘調査を継続してきたが、存在が推定される上野国府に関連する遺構の確認は至っていなかった。区画整理事業が進行していく中で上野国府の実態について早急な解明が急務となったことから、平成23年度から５ヵ年計画で上野国府等範囲内容確認調査が計画され実施されるに至った。本調査は、上野国府の解明を目的として、平成23年度から５ヵ年計画で実施している上野国府等範囲内容確認調査の３年次調査である。

平成23年度の調査は、国庁推定地Ａ案（「宅地」等の地名が残る100m四方の区域）の範囲内において９ヶ所にトレンチを設定し309㎡の範囲で行った。国庁関連遺構は検出されなかったものの、６トレンチにおいて、国府域を考える上で重要な要素と考えられる古代の大溝が検出された。平成24年度の調査は、国庁推定地Ｃ案（宮鍋神社の南に広がる100m四方の区域）の範囲内における調査を中心としながら、１年次調査６トレンチ検出の大溝の延長の確認や、国庁推定地４案以外の地点として総社神社西方における範囲確認調査もあわせて実施し、合計で９ヶ所にトレンチを設定し705㎡の面積を調査した。結果としては宮鍋神社の北で国府存在期に掘削されたと推定される南北方向の溝が確認された程度で国庁に関連する遺構は検出されなかった。

本年度の調査は、当初、国庁推定地Ｂ案（蒼海城本丸を中心とした100m四方の区域）の調査を予定したが、日程的に調査が難しい状況となったことから、調査予定を変更し、国庁解明のための有効な情報が得られると考えられる以下の事項の解明のために地点を定めて調査を実施することとした。

⑴　総社神社及び元総社小学校周辺について

総社神社は現在元総社町一丁目31番地45号に鎮座する。文字どおり上野国の総社であるが、宮鍋神社が故地で、戦国時代に蒼海城の落城とともに現在地に移転したという伝承をもつ。元総社小学校では昭和37・38年に実施された元総社小校庭遺跡の調査で掘立柱建物跡が２棟検出されている。また総社神社と元総社小学校の東側を流れる牛池川周辺では、河川改修にともなう元総社明神遺跡Ⅷ及び元総社寺田遺跡Ⅲの発掘調査で人形や「国厨」・「曹司」等の国府関連施設名の墨書土器が出土していることから、付近に国府関連施設が存在した可能性があることが以前から考えられてきた。このため、総社神社境内と元総社小学校校庭において範囲内容確認を実施することとした。

⑵　元総社町周辺で検出されている大溝の解明

元総社町周辺でこれまで多くの発掘調査が実施されてきたが、閑泉樋遺跡、閑泉明神北遺跡、元総社明神遺跡、元総社蒼海遺跡群（9）・(14)、上野国府１年次調査６トレンチ等21の地点で古代の大溝が検出されている。これらの大溝は浅間Ｂ軽石が覆土の上部に堆積していることや、幅約５m、深さ約２m程度で断面が逆台形であることなどの共通点があるほか、検出された溝が直線的に繋がると考えられる地点も存在することから、何条かは同一の溝であることが考えられる。さらにこれらの大溝は、その時期や規模から国府域の区画との関連が指摘されており（木津　1988他）、これらの溝の性格の解明が国府解明への手掛かりになると考えられる。

これら大溝のうち、元総社蒼海遺跡群(7)・(9)、閑泉明神北遺跡、閑泉樋遺跡の大溝は、東西に走行をもつ同一の大溝と考えられる。また元総社明神遺跡Ⅰ・同Ⅱの大溝は南北に走行をもつ同一の大溝と考えられ、さらに元総社蒼海遺跡群(14)、上野国府１年次調査６トレンチの大溝も南北に走行をもつ同一の大溝と考えられる。これら３本の大溝が同時期に存在したとするならば、これらの溝が連続していることが想定でき、現状で確認でき

る地割等も含めて想定した場合、総社神社や元総社小学校周辺を中心として東西約600m、南北約900mの規模で四周することが想定できる（Fig. 4）。

これらの大溝が国衙域を区画する大溝であるならば、大溝の有無の確認は、国府解明の有効な手がかりになることが考えられるため、想定の線上で未確認である南側の大溝と、西側の大溝を確認する必要がある。

⑶　東山道駅路国府ルートの解明

上野国内を通過する東山道駅路については国府ルート、牛堀・矢ノ原ルート、下新田ルートが確認されているが、そのうちの国府ルートについては、研究史的にも一番古く、国府の推定位置にも関連している（金坂　1978）。また、国府ルート上では、高崎市内で発掘調査により古代の道路跡が検出されていることから、ルートはほぼ確実とされている。しかしながら、現状で道路状遺構が確認されている最東端は正観寺遺跡までで、それより東の前橋市内では想定はされているものの道路状遺構の検出には至っていない。想定のルートは、高崎市内で直線的に連続して検出された道路状遺構の延長上で、現在でも地割が存在している場所も存在し、この地割を基にルートを想定している。想定のルートが通過する付近は推定国府域でも南端付近に位置すること。さらに国府ルートは国庁の位置と何らかの位置関係を持って設定されていることが考えられるため、そのルートを解明するための調査を実施するものである。

上記のとおり平成25年度は３つの問題点に関して範囲内容確認調査を実施し、国府解明に資することとした。

II　遺跡の位置と環境

1　遺跡の立地

前橋市は、利根川が赤城・榛名の両火山の裾合を経て関東平野を望むところに位置し、地形・地質の特徴から、北東部の赤城火山斜面、南西部の前橋台地利根川右岸、南部から南西部にかけての前橋台地の利根川左岸、東部の広瀬川低地帯という４つの地域に分けられる。

本遺跡の立地する前橋台地は、約24,000年前の浅間山噴火によって引き起こされた火山泥流堆積物とそれを被覆するローム層（水成）から成り立っている。台地の東部は、広瀬川低地帯と直線的な崖で画されていて、台地の中央には現利根川が貫流している。現在の利根川の流路は中世以降のもので、旧利根川は現在の広瀬川流域と推定される。台地の西部には榛名山麓の相馬ヶ原扇状地が広がり、榛名山を源とする中小河川が利根川に向かって流下し、台地面を刻んで細長い微高地を作り上げている。総社・元総社付近の染谷川や牛池川は、微高地との比高３ｍ～５ｍを測り、段丘崖上は高燥な台地で、桑畑を主とした畑地として利用されてきた。

本遺跡は、前橋市街地から利根川を隔て、西へ約３㎞の地点、前橋市元総社町地内に所在している。南東へ約１㎞の所に上野国総社神社があり、すぐ西には関越自動車道が南北に走っている。さらに、主要地方道前橋・群馬・高崎線が東西に走り、東側には市道大友・石倉線が南北に走り、これらの幹線道路を中心にオフィスビルや大規模小売店が進出している。本遺跡はこれらの幹線道路から奥に入ったところに位置し、周囲には田畑が多い住宅地という静かで落ち着いた環境である。

2　歴史的環境

本遺跡地周辺には、総社古墳群、山王廃寺、上野国分僧寺・尼寺のほか蒼海城跡など多くの遺跡が存在し、歴史的環境に優れている。また継続して実施されている埋蔵文化財発掘調査によって新しい知見が集積されている。

縄文時代　縄文時代の遺跡としては、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡や蒼海遺跡群で前期・中期の集落跡が

Fig. 1　推定上野国府位置図

検出されているほか、元総社蒼海遺跡群（9）で晩期の住居が検出されている。

弥生時代　弥生時代の遺跡は、水田・集落跡等が検出された日高遺跡のほか、後期住居跡が検出された上野国分僧寺・尼寺中間地域や桜ヶ丘遺跡、下東西遺跡等に散見するだけで少ない。

古墳時代　古墳としては総社古墳群が挙げられる。総社古墳群を構成する主な古墳としては、前方後円墳の遠見山古墳、川原石を用いた積石塚の王山古墳、前方部と後円部にそれぞれ横穴式石室が築造されている前方後円墳の総社二子山古墳、横穴式石室と石棺をもつ方墳の愛宕山古墳、県内古墳終末期の方墳である宝塔山古墳や蛇穴山古墳がある。また、宝塔山古墳の南西500mには、平成18年度からの５ヵ年計画で実施した範囲内容確認調査の結果、約80m四方を回廊で囲み、講堂・金堂・塔が法起寺様式で伽藍が配置された山王廃寺跡（放光寺）が存在する。山王廃寺の塔心礎や石製鴟尾、根巻石等の石造物群は、宝塔山古墳の石棺や蛇穴山古墳の石室と同系統の石造技術を駆使して加工されており、このことから、この寺院を建立した氏族と宝塔山古墳・蛇穴山古墳の被葬者は同一の氏族と考えられている。この地が「車評」の中心地として、仏教文化と古墳文化が併存していた様子が窺える。なお、山王廃寺の下層には北西に主軸をもつ基壇建物や掘立柱建物跡が検出されているが、これらの建物群についての評価は「車評衙」等諸説あるが、寺院の変遷を考える上で重要なものとなっている。

その他に古墳時代の集落については４世紀代と６世紀代を中心に展開しており、大屋敷遺跡や元総社蒼海遺跡群で集落が確認されている。元総社蒼海遺跡群では、牛池川沿いの低地で古墳時代の水田も確認されているほか、墓域や祭祀跡も確認されており、同時代の集落・生産域・墓域がそれぞれ展開していたことがうかがえる。

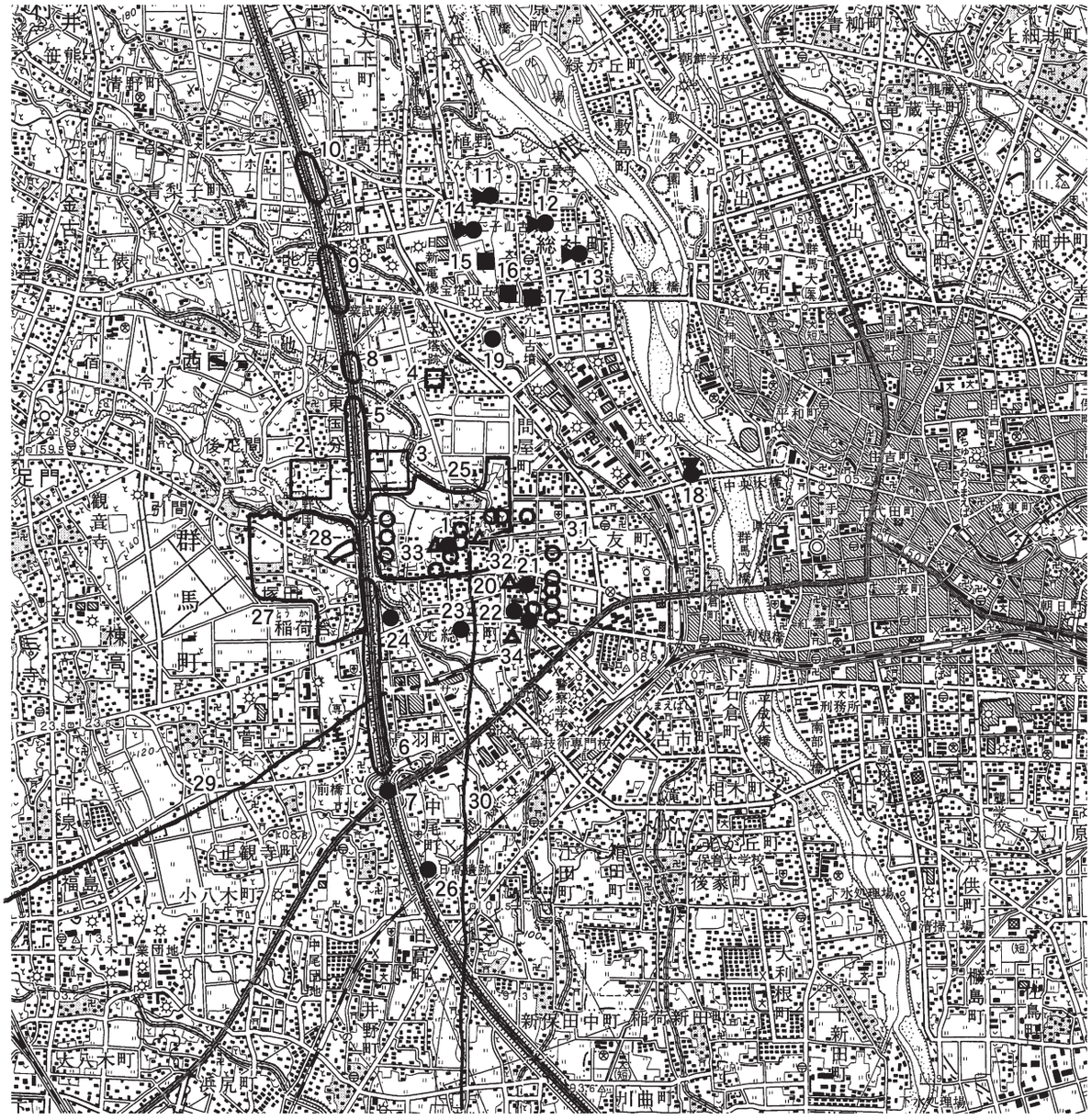
奈良・平安時代　奈良・平安時代になると、上野国分僧寺、上野国分尼寺が建立されるなど、本地域は古代の政治・経済・文化の中心地としての様相を呈する。大正15年に国指定史跡となった上野国分僧寺は昭和55年から本格的な調査を実施し、主要伽藍の礎石、築垣、塀等が確認された。また上野国分尼寺は、昭和44・45年の調査で伽藍配置が推定できるようになり、さらに平成12年に実施された寺域確認調査によって東南隅と南西隅の築垣とそれに平行する溝跡や道路状遺構が確認された。上野国分僧寺、上野国分尼寺周辺では、関越自動車道建設に伴い発掘調査、上野国分僧寺、尼寺中間地域では、当時の大規模な集落跡や掘立柱建物群が検出されている。

なお、元総社地域には総社神社が鎮座するほか、上野国府が存在したことが推定されているが、掘立柱建物跡が元総社蒼海遺跡群、元総社小校庭遺跡で確認されている。これらの建物の性格については不明であるが、元総社町周辺で掘立柱建物が確認された事例が現在少ないことから、特筆される遺構である。また、国府推定域でも西に位置する鳥羽遺跡では、神社遺構とされる周囲に方形の溝をもつ掘立柱建物が存在するほか、大規模な工房跡も確認されている。また、牛池川沿いの元総社明神遺跡Ⅷと元総社寺田遺跡Ⅲでは、それぞれ人形が出土しているほか、元総社寺田遺跡Ⅲでは「国厨」や「曹司」などの国府関連施設名が墨書された須恵器が出土している。その他に国府域の区画溝と考えられているものとして大溝がある。この遺構は閑泉樋遺跡・元総社明神遺跡・元総社蒼海遺跡群等で確認されており、上野国府等範囲内容確認調査の平成23年度調査（１次）でも確認されている。これらの大溝は覆土上部に浅間Ｂ軽石を包含するという時期的な特徴をもち、規模も同様であることや、確認された地点が連続すること地点もあることから、一連のものと考えられる大溝も存在する。その他に国府域を推定する上では、天神遺跡・弥勒遺跡・元総社蒼海遺跡群の西寄りの調査地点どの染谷川周辺では緑釉陶器が多数出土するほか、銅椀等の遺物が出土する傾向が強いことが指摘されており、こうした点から国府に関連した何らかの施設の存在がうかがえる。また元総社町周辺では至るところで奈良･平安時代の集落が検出されているが、これら集落から「大館」の墨書土器など特殊な遺物も少なからず出土している。

高崎市内の調査等により、元総社町の南部にＮ―64°―Ｅ方向の東山道駅路国府ルートが存在したことが推定されている。その他に存在が推定される通称「日高道」は、日高遺跡で検出された幅約4.5mの道路状遺構を北方へ延長したもので、これらは当時の交通網を物語る重要な遺構である。

中世　中世に至り、永享元年(1429)、この地には上野国守護代の長尾氏によって蒼海城が築城されるが、この

城は県内でも最古級の城郭に位置づけられるとあわせて県内初の城下町を形成したとも考えられている。現在の本地域の主要道路はこの縄張りに沿って造られていると推測されるほか、元総社蒼海遺跡群の調査で青白磁梅瓶や青磁・白磁片が出土しているほか、蒼海城に関連する堀跡の検出も相次いでいる。



1．推定上野国府　2．上野国分僧寺跡　3．上野国分尼寺跡　4．山王廃寺　5．上野国分僧寺・尼寺中間地域
6．鳥羽遺跡　7．中尾遺跡　8．国分境遺跡　9．北原遺跡　10．下東西遺跡　11．稲荷山古墳　12．大小道山古墳
13．遠見山古墳　14．二子山古墳　15．愛宕山古墳　16．宝塔山古墳　17．蛇穴山古墳　18．王山古墳　19．大屋敷遺跡
20．元総社寺田遺跡　21．大友屋敷II　22．元総社小校庭遺跡　23．天神遺跡　24．弥勒II遺跡　25．元総社蒼海遺跡群
26．日高遺跡　27．国府南部遺跡群　28．元総社西川・塚田中原遺跡　29．推定東山道　30．通称日高道　31．宮鍋神社
32．総社神社　33．御霊神社　34．釈迦尊寺　　○は、大溝（区画溝）が検出された主な地点

Fig. 2　周辺遺跡

Ⅲ　調査方法と経過

1　調査方法

上野国府の範囲内容確認調査にあたり、国庁の推定地として４案を提示し、平成23年度はそのうちのＡ案の範囲内において、平成24年度はＣ案の範囲内と総社神社西方付近において調査を行った。本年度は、総社神社・元総社小学校における国府関連施設の確認、区画溝の確認、東山道駅路国府ルートの確認を目的として12ヶ所のトレンチ調査を行った。総調査面積は574㎡である（Tab. 1）。調査は、「上野国府等範囲内容確認調査基準」に基づいて行った。以下、調査方法について要点を記す。

Tab. 1　各トレンチの面積と調査目的

トレンチ	調査面積（㎡）	主な調査目的
17	44	国府関連施設の確認
18	65	国府関連施設の確認
19	12	国府関連施設の確認
20	8	国府関連施設の確認
21 a	102	国府関連施設の確認
21 b	80	国府関連施設の確認
22	25	国府関連施設の確認
23	56	区画溝（南側）の確認
24 a	28	東山道駅路国府ルートの確認
24 b	42	東山道駅路国府ルートの確認
25	49	東山道駅路国府ルートの確認
26	63	区画溝（西側）の確認
計	574	

グリッド設定（Fig. 3）　調査区のグリッド設定は以下のとおりである。①単位は４ｍ四方とする。②国家座標第Ⅸ系（旧日本測地系）を用い、Ｘ＝＋44.800、Ｙ＝－77.200を基点（Ｘ０、Ｙ０）とする。③西から東へ４ｍごとにＸの数値が増大し（Ｘ157、Ｘ158、Ｘ159……）、北から南へ４ｍごとにＹの数値が増大する（Ｙ44、Ｙ45、Ｙ46……）。④各グリッドの呼称基点は北西杭とする。

なお、このグリッド設定は、区画整理に伴い継続的に調査が行われている元総社蒼海遺跡群のグリッド設定と共通するものである。

トレンチ設定　各トレンチの設定幅については、これまで掘立柱建物の柱穴間隔を考慮して原則３ｍとしていたが、平成24年度の調査から４ｍ幅へと拡大した。トレンチ名は、原則として調査順に数字で呼称することとし、23年度からの通し番号とした。

遺構の確認　遺構確認については、基本層序Ⅰ層およびⅡ層直下で行い、その後、上野国府の遺構面が存在するⅢ層（Hr-FP・As-C 混土層）を細分しながら確認することとした。遺構の確認にあたって、必要な場合はサブトレンチを設定することにし、サブトレンチの規模は遺構保護のため必要最小限とした。

測量　遺構平面図については縮尺１/20を原則とし、必要に応じて１/10～１/50の縮尺を適宜使用することとした。また、土層図についても縮尺１/20とし、遺構毎の図面とは別に、グリッド杭のあるトレンチ壁面ですべて作成することにした。

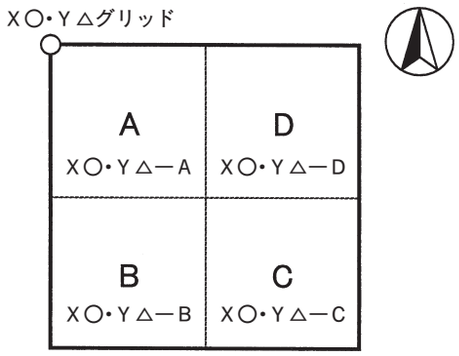


Fig. 3　２ｍ小グリッドの呼称

出土遺物の取り上げ　遺構毎を原則とし、遺構に属さない遺物は４ｍグリッド単位で記録を作成し取り上げることとした。なお、状況に応じて４ｍグリッドを Fig. 3 のように４分割し、２ｍの小グリッド一括で取り上げた遺物もある。小グリッドの呼称は、北西から反時計回りでＡ～Ｄとした。なお現位置を保つ礎石等、施設を構成する遺物については、原則として現状保存することとした。

写真撮影　遺構の写真撮影については、35㎜フィルム（モノクロ、カラーリバーサル）およびデジタルデータを常時使用した。また、必要に応じて６×９サイズフィルムを使用した。空中写真撮影には６×６サイズフィルムを使用した。

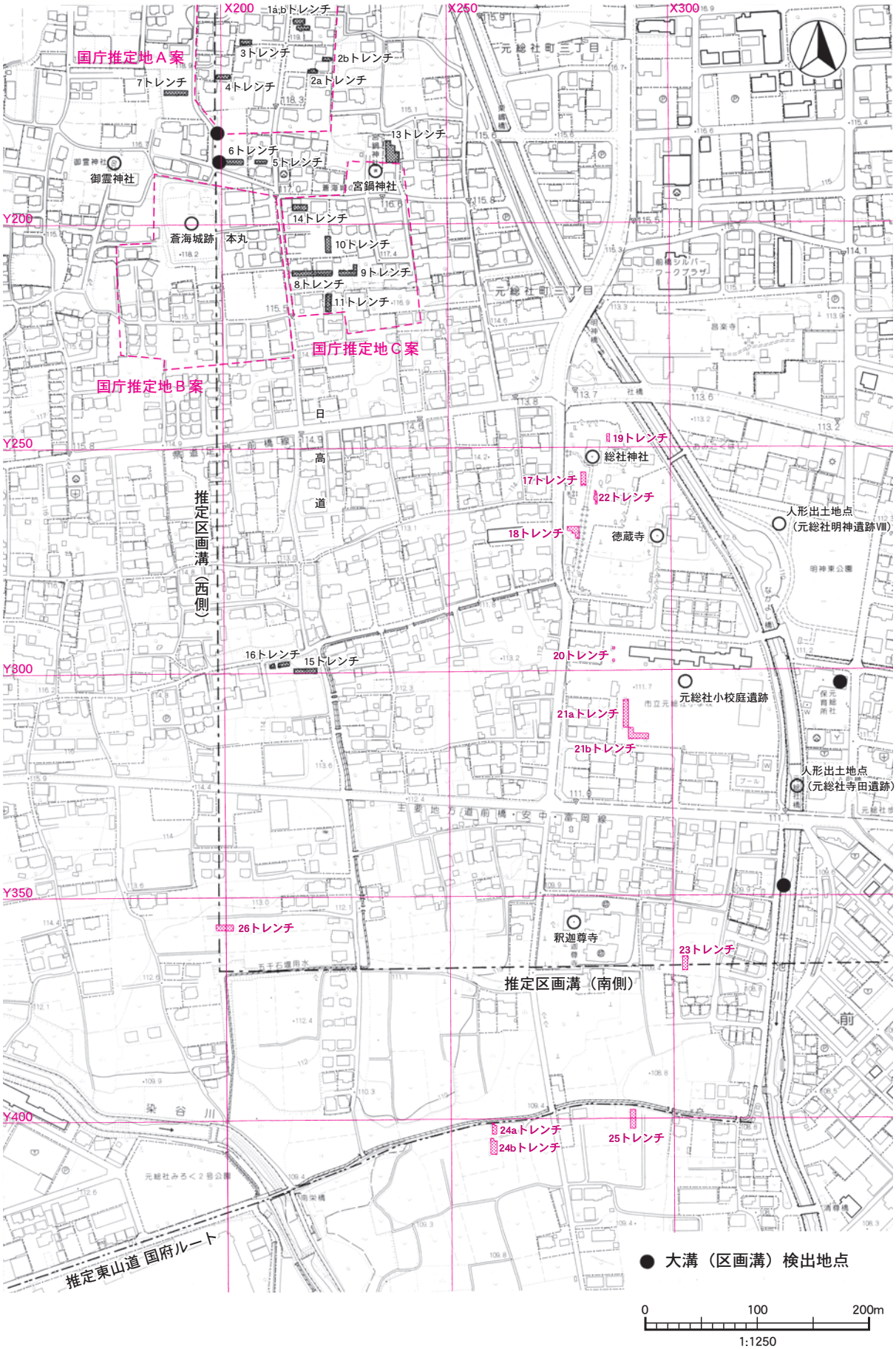


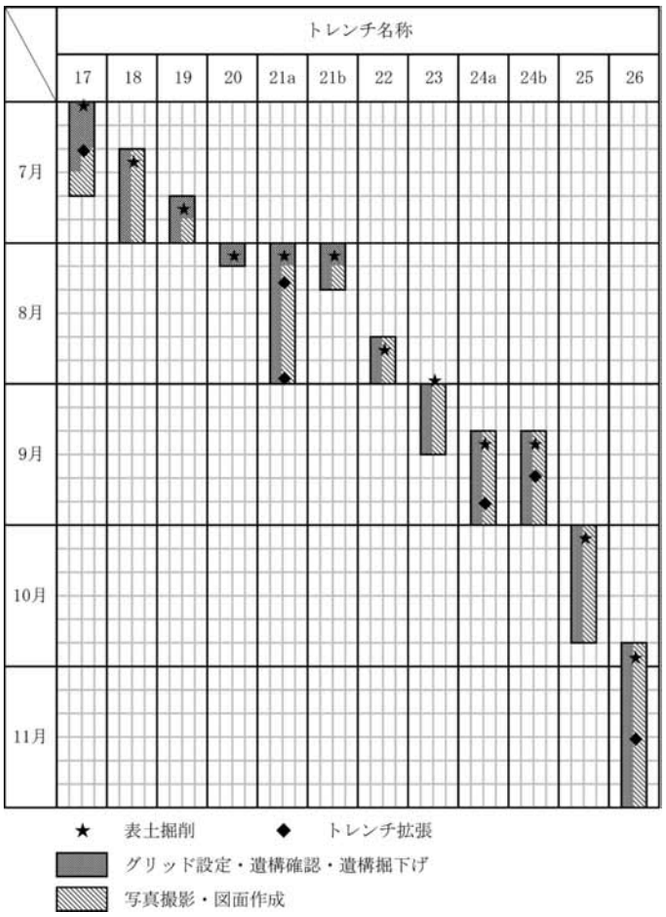
Fig. 4　グリッド設定図と平成25年度調査区

埋め戻し　調査終了後は、今後の調査と区別できるように石灰を散布してから埋め戻しをおこなった。

2　調査経過

本年度の発掘調査は７月１日から開始し、11月27日に終了した。調査経過は、以下のとおりである。

Tab. 2　調査経過表



７月２日に総社神社境内にて17トレンチの表土掘削を行った。遺構確認の結果、溝が１条検出され掘下げたところ、溝の底部がトレンチ外にあると思われたため、８日にトレンチの拡張を行った。その結果、薬研状の底部であり、中世の溝であることが推測された。17トレンチの調査と平行して、同境内にて10日に18トレンチ、22日に19トレンチの表土掘削を行った。調査終了後、19日に17トレンチ、30日に18・19トレンチを埋め戻した。17・18・19トレンチにおいて検出された遺構は、６世紀の住居跡、中世の溝、中近世の土坑・ピット等であり、国府関連施設の検出には至らなかった。

８月に入り、元総社小学校にて１日に20・21ａトレンチ、２日に21ｂトレンチの表土掘削を行った。20トレンチは、墓地があった場所とのことであり、２ｍ四方のテストピットを２ヶ所掘ったところ、攪乱状態であることが分かったため、同日埋め戻した。21ａトレンチでは古代の溝と思われる遺構が検出され、溝の走行方向を確認するため、８日にトレンチ北側の拡張を行った。28日に溝の西側にて溝に平行する柵列を確認するためトレンチを拡張した。21ｂトレンチは大部分が攪乱を受けており、遺構が検出されなかったため、９日に埋め戻した。21ａトレンチにて、27日に同小学校の児童向け発掘調査現地説明会を開催し、30日に埋め戻した。20・21ａ・21ｂトレンチは、大部分が攪乱を受けていたものの、21ａトレンチの溝から、墨書土器を初めとして８世紀のものと推定される多くの遺物が出土し、一定の成果を得ることができた。

同小学校の調査と平行して、８月20日に総社神社境内にて22トレンチの表土掘削を行った。22トレンチは、17トレンチの中世の溝の走行を確認するためのものであったが、溝と思われる遺構は検出されず、28日に埋め戻した。また、27日に区画溝（南側）の確認を目的とする23トレンチの表土掘削を行った。

23トレンチの調査は、９月の上中旬にかけて行い、13日に埋め戻した。23トレンチにおいて溝が４条検出されたが、いずれも大型の区画溝ではなかった。12日に東山道駅路国府ルートの解明を目的とする24ａ・24ｂトレンチの表土掘削を行った。調査地点は南北で高低差があり、北側を24ａトレンチ、一段高い南側を24ｂトレンチとした。18日に24ｂトレンチの北西部、24日に24ａトレンチの南西部を拡張したが、道路と思われる遺構は検出されなかった。30日に両トレンチを埋め戻した。

10月１日に東山道駅路国府ルートの解明を目的とする25トレンチの表土掘削を行った。25トレンチにおいて検出された遺構は、古代の溝、中近世のピット等であり、道路と思われる遺構の検出には至らなかった。23日に25

トレンチを埋め戻した。28日に区画溝（西側）の確認を目的とする26トレンチの表土掘削を行った。

26トレンチの調査は11月いっぱいをかけて行った。トレンチ南壁に道路と思われる硬化面の広がりが見られたため、14日にトレンチ南部を拡張したところ、北東方向に走る道路状遺構が検出された。溝は３条検出されたが、いずれも大型の区画溝ではなかった。27日に26トレンチの埋め戻しを行い、本年度の調査を終了した。

Ⅳ　基本層序

基本層序については、大まかな調査地点ごとに述べたい。

⑴　総社神社境内および元総社小学校付近

総社神社境内は17・18・19・22トレンチが該当する。17・18・22トレンチは社殿の南側に位置するが、この３つのトレンチでは表土の下層が地山の総社砂層となっており、浅間Ｂ・Ｃ軽石や砂層への漸位層等は確認できなかった。特に18トレンチでは総社砂層が以前は地表に露出していたという状態だった。このことから総社神社境内は土が削り取られ整地されていたことが考えられる。なお、社殿東側の19トレンチについては、東へ傾く傾斜地形が確認されたが、これは牛池川沿いの低地へと続く斜面の一部と考えられる。なおかつての総社神社境内は、神楽殿より東が牛池川へと続く傾斜地だったという話もあり、牛池川の河川改修前の地図でもそのことは確認できるが、この谷地形は、もう少し西側へも続いていたことが推定される。

元総社小学校は20・21ａ・21ｂトレンチが該当する。校舎西側の20トレンチでは土の入れ替えにより表土以下は砕石となっていた。校舎南側の21ａ・21ｂトレンチでは、表土である校庭の土の下層が浅間Ｃ軽石を混入する黒色土となっており、浅間Ｂ軽石混入土は確認できなかったことから、整地で既に削り取られていた。

⑵　元総社町天神付近

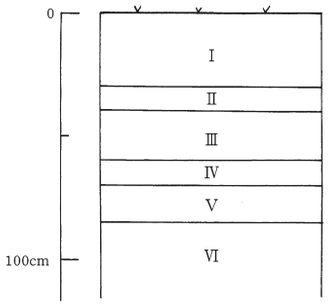
元総社町でも南西に位置する26トレンチは、土層堆積も良好で、元総社地区で確認できる基本的な土層堆積が確認できた。

⑶　釈迦尊寺付近

釈迦尊寺の東に位置する23トレンチでは、現在の地形や土地利用から推測して東から南にかけて谷地形を控えていると考えられ、土も下層ほど粘性が強かった。浅間Ｂ軽石を含む層は確認できず、榛名二ッ岳の噴出物が多く含まれる層が確認できた。

⑷　推定東山道国府ルート付近

24ａ・24ｂ・25トレンチは、上野国府等範囲内容確認調査でこれまで調査した地点でも最南端での地点で、元総社集落の中心部とは蒼海城南端の谷地形を隔てた南側にそれぞれ位置する。24ａトレンチは谷地形内でも台地際、24ｂトレンチは台地に上がり終えた付近に位置し、その比高差は現状で50㎝程度である。24ａトレンチは表土の下層が総社砂層のブロックを多く含んだ撹乱を受けたような土となっており、広範囲に渡り深く掘り込まれた痕跡がサブトレンチにより確認できた。24ｂトレンチは表土の下層は地山の総社砂層への漸移層となっており、浅間Ｂ軽石混入土等の堆積は確認できなかった。しかしながら同じ台地でも東へ約100ｍに位置する25トレンチは土層の堆積が比較的良好で、浅間Ｂ軽石混入土の堆積も見られ、浅間Ｃ軽石を含む黒色土層から地山の総社砂層にかけては粘性が強い。なお、24ｂトレンチと25トレンチでは層位の高さに差が見られることから、同じ台地でも西ほど高かったことが推定される。



Ⅰ層		As-B軽石が混入する耕作土・表土層。 混入量の多寡により、a（新）・b（旧）に分けられる。 Ⅰa層：灰黄褐色砂質土。現在の表土・耕作土 Ⅰb層：灰黄褐色砂質土。旧表土・耕作土。いわゆるAs-B混土層
Ⅱ層		As-B軽石純層
Ⅲ層	暗褐色土	As-C、Hr-FPなどの軽石粒を5～10%程度含む。場所により粘性が変化する。（奈良・平安時代の遺物包含層）
Ⅳ層	黒褐色土	As-Cを10～30%程度含む。場所により粘性が変化する。この層上面で、古墳時代後期～奈良・平安時代の遺構が確認しやすくなる。
Ⅴ層	総社砂層への漸位層	上部黒色土（a）から下へ行くにつれて、黄褐色土（b）へ漸位する。場所によっては、黒褐色粘質土～褐色粘質土へ漸位する。
Ⅵ層	総社砂層	場所により色調・土質が異なり、黄褐色土でロームに近いところと、明褐色もしくは白色に近い色調を呈する粘質土のところがある。

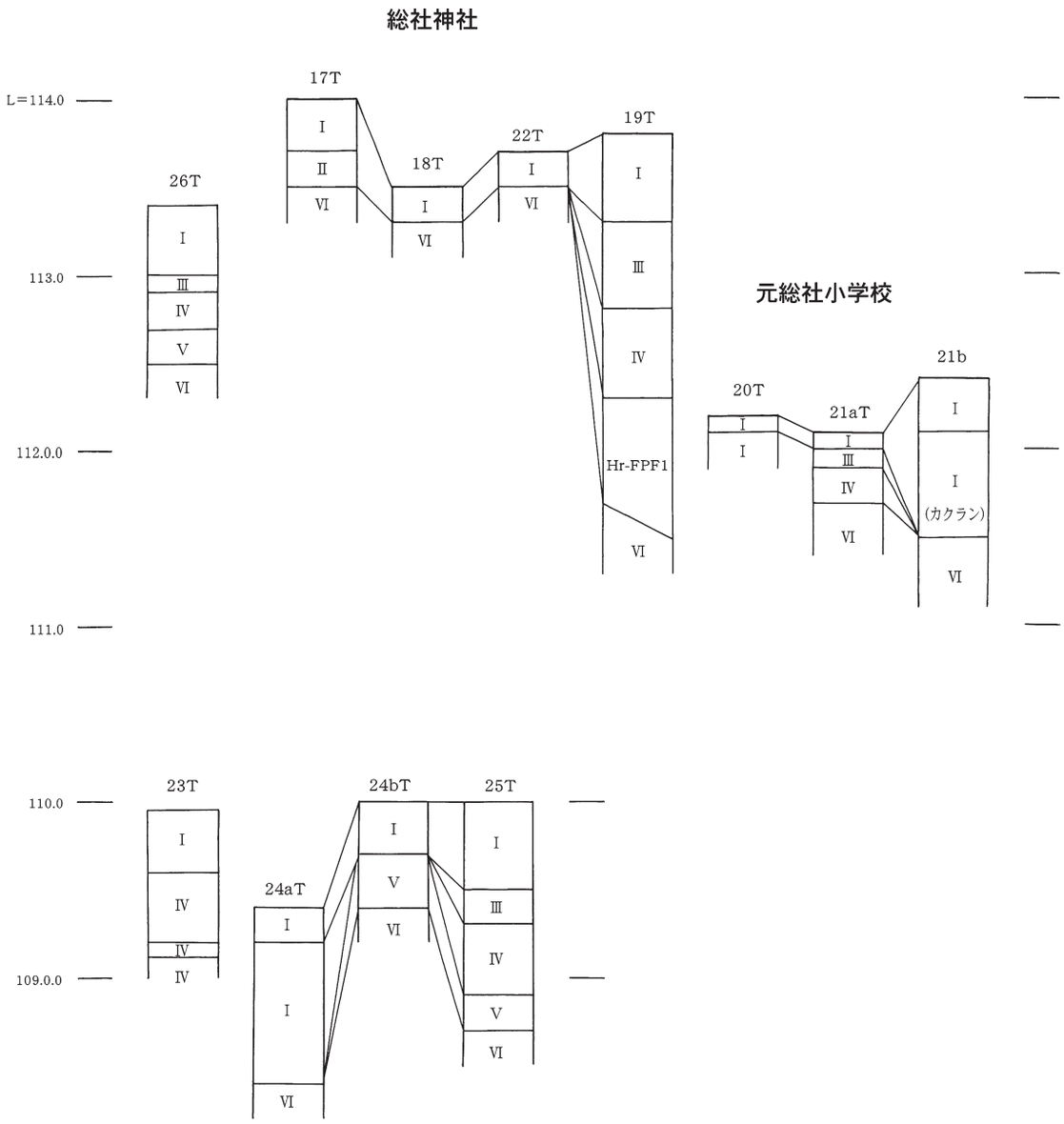


Fig. 5　基本層序模式図と各トレンチ土層柱状図

Ⅴ　遺構と遺物

1　各トレンチの概要

国府関連施設、区画溝及び東山道駅路国府ルートについて有益な情報が得られると思われる地点のうち、調査可能な12ヶ所にトレンチを設定した。以下に調査目的別に各トレンチの概要を記す。

⑴　国府関連施設の確認調査

元総社明神遺跡、元総社寺田遺跡、及び元総社小校庭遺跡の発掘調査の結果から、総社神社、元総社小学校の周辺は国府関連施設が存在した可能性が非常に高いと思われるため、総社神社境内に17～19・22トレンチを、元総社小学校校庭に20・21ａ・21ｂトレンチをそれぞれ設定し、確認調査を実施した。

17トレンチ（Fig. 6 、PL. 1 ）

17トレンチは総社神社境内にて東西４ｍ、南北10ｍの規模で調査を予定した。南端に溝が１条検出され、調査範囲を拡張したため、最終的には44㎡の範囲の調査となった。この溝の時期は中世と考えらる。その他、６世紀後半の住居跡１軒、土坑２基が検出された。国府関連遺構は確認できなかった。

18トレンチ（Fig. 6 、PL. 1 ）

18トレンチは総社神社境内にて東西11ｍ、南北10ｍの規模でＬ字形にトレンチを設定したが、中心部を拡張したため、最終的には65㎡の範囲の調査となった。調査地点は攪乱を受けており、中近世の土坑１基･ピット11基･井戸１基・落ち込み１ヶ所が検出された。国府関連遺構は確認できなかった。

19トレンチ（Fig. 6 、PL. 1 ）

19トレンチは総社神社境内にて東西２ｍ、南北６ｍの12㎡の範囲を調査した。遺構は検出されなかったが、牛池川へ続くと考えられる北東方向への傾斜地形が確認され、その埋土中から円面硯の破片が出土した。

20トレンチ（Fig. 6 ）

20トレンチは元総社小学校校庭にて調査を予定したが、調査地点が過去に墓地であったことが判明したため、１辺２ｍの方形に試掘調査を２ヶ所行った。２ヶ所とも攪乱により遺構が確認できない状態であった。

21ａトレンチ（Fig. 6 、PL. 2 ・ 3 ）

21ａトレンチは元総社小学校校庭にて東西４ｍ、南北24ｍの規模で調査を予定した。トレンチの約３分の２が攪乱により遺構が確認できない状態であったが、７世紀の住居跡１軒、８世紀の溝１条、土坑２基、ピット４基が検出された。溝の西部を拡張したため、最終的には102㎡の範囲の調査となった。溝の覆土から多くの遺物が出土した。その中でも須恵器の椀で「本」、「大家」と記された墨書土器の出土は特筆される。

21ｂトレンチ（PL. 6 、PL. 3 ）

21ｂトレンチは元総社小学校校庭にて東西15ｍ、南北９ｍのＬ字形に80㎡の範囲を調査した。トレンチの約３分の２が攪乱を受けており、遺構は検出されなかった。

22トレンチ（Fig. 6 、PL. 2 ）

22トレンチは17トレンチの溝と平行する溝の存在が期待されたため、その延長線上に直行する形で東西２ｍ、南北10ｍの規模で調査を予定した。この調査範囲では、溝と思われる遺構が確認できなかったため、範囲を拡張し、25㎡の範囲の調査となった。６世紀後半の住居跡１軒、落ち込み１ヶ所が検出されたが、溝は確認できなかった。国府関連遺構も確認できなかった。

⑵　区画溝の確認調査

閑泉樋遺跡、元総社明神遺跡、元総社蒼海遺跡群、推定上野国府１年次調査で検出された古代の大溝をつなぐと総社神社と元総社小学校を中心として東西約600ｍ、南北約900ｍの規模で四周することが想定される。溝の存

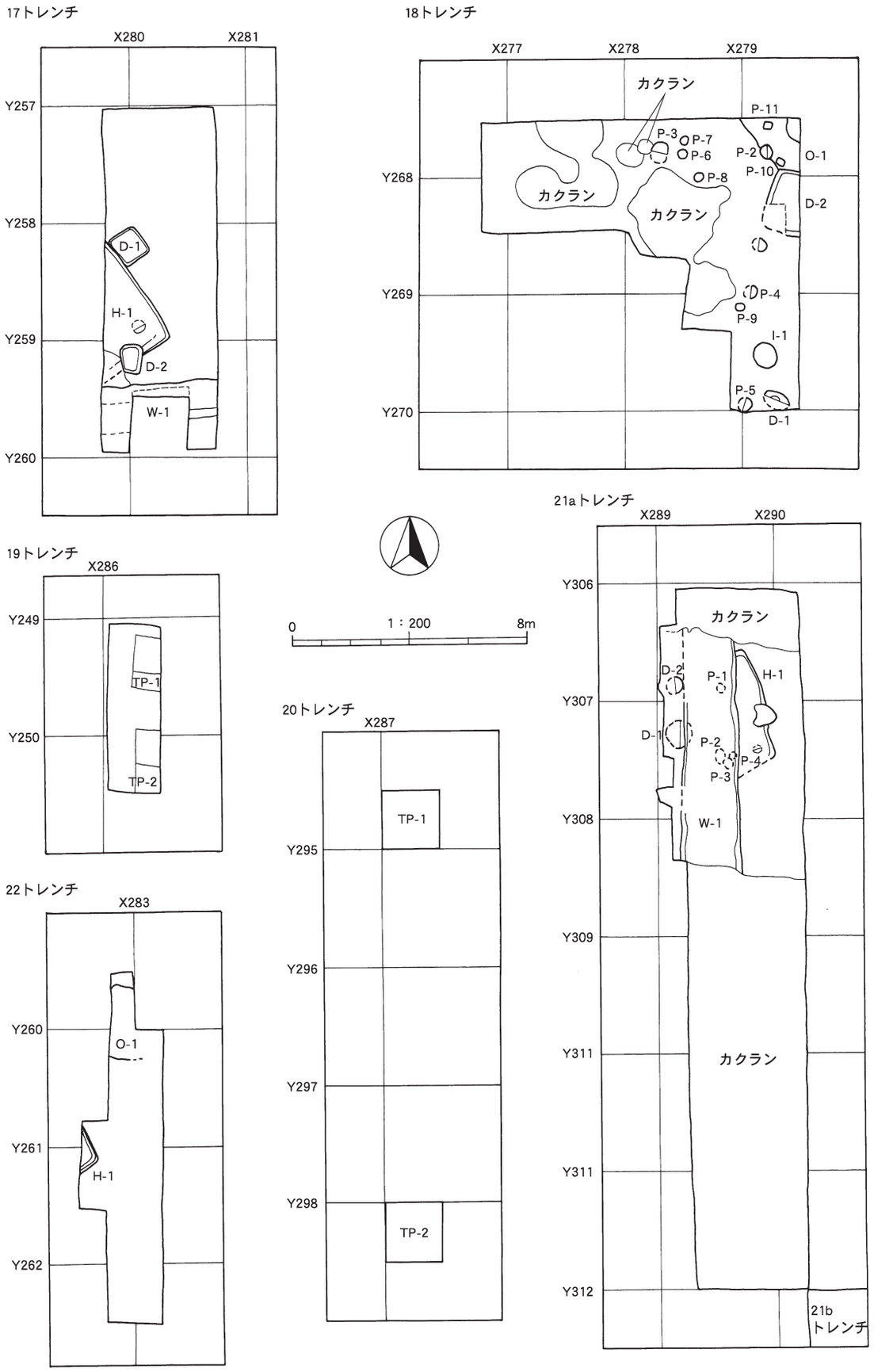


Fig. 6　各トレンチ全体図(1)

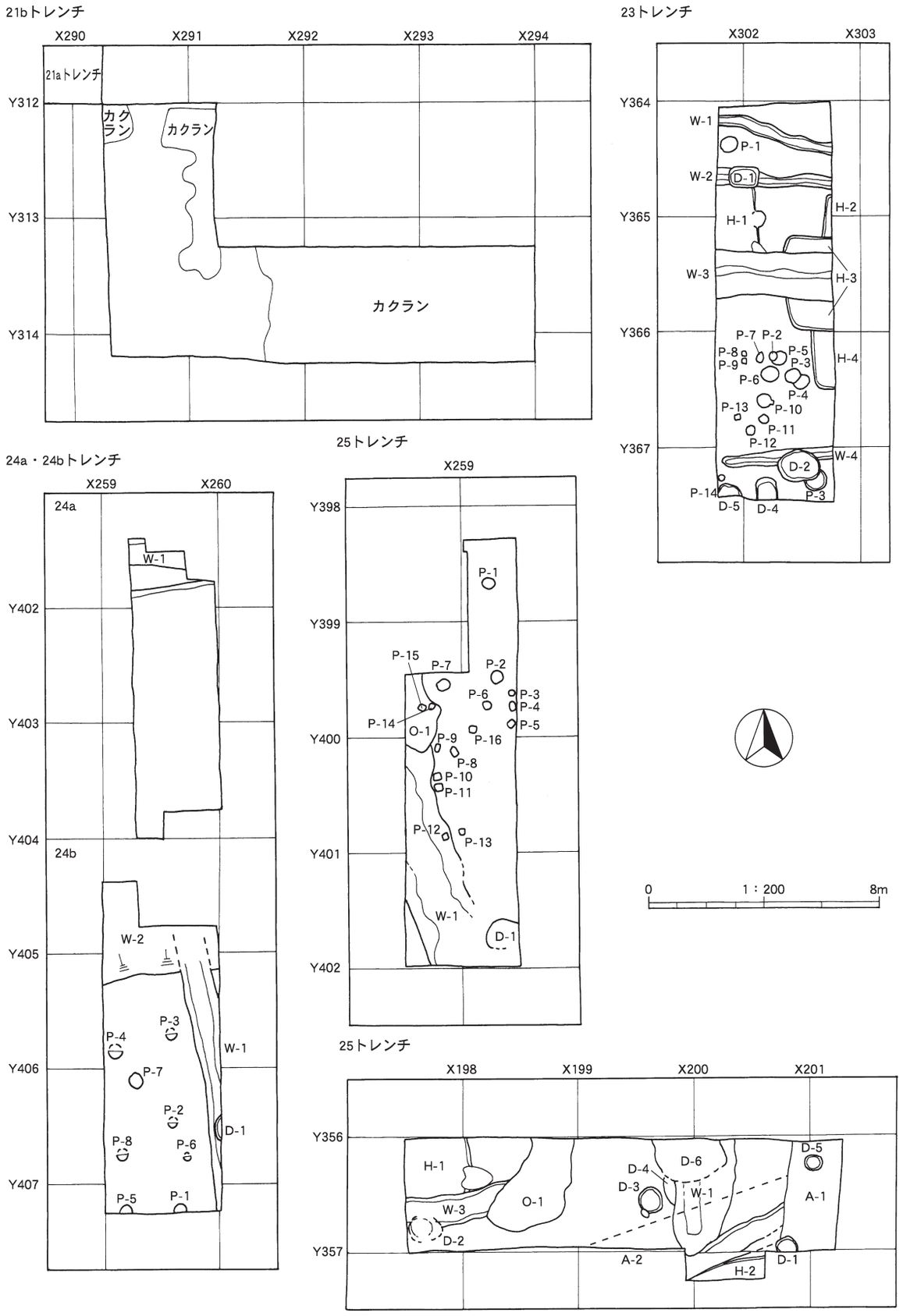


Fig. 7　各トレンチ全体図(2)

在が想定されるが未検出である部分について、23、26トレンチを設定し、確認調査を実施した。

23トレンチ（Fig. 7 、PL. 3 ～ 5 ）

23トレンチは東西 4 m、南北14mの56㎡の範囲を調査した。10世紀頃の住居跡 4 軒、溝 4 条、土坑 5 基、ピット14基が検出された。 4 条の溝は、いずれも走行、規模等から鑑みて大型の区画溝とは異なるものであった。

26トレンチ（Fig. 7 、PL. 5 ～ 7 ）

26トレンチは区画溝の有無を確認するため、東西15m、南北 4 mの規模で調査を予定した。トレンチ南端を一部拡張し、最終的には63㎡の範囲の調査となった。10世紀頃の住居跡 2 軒、溝 3 条、土坑 6 基、道路状遺構 2 ヶ所が検出された。 3 条の溝は、いずれも走行、規模等から鑑みて大型の区画溝とは異なるものであった。

⑶　東山道駅路国府ルートの確認調査

推定上野国府域の南端付近の道路が、東山道駅路国府ルートの想定ルートとなっているが、この道路は下水管の埋設工事が終了した舗装道路であるため、道路に隣接する地点に24ａ、24ｂ、25トレンチを設定し、確認調査を行った。

24ａトレンチ（Fig. 7 、PL. 7 ・ 8 ）

24ａトレンチは東山道駅路のルートを確認するため、東西 3 m、南北 8 mの規模で調査を予定した。トレンチ北端および南端を一部拡張したため、最終的には28㎡の範囲の調査となった。溝 1 条が検出されたが、東山道駅路と思われる遺構は確認できなかった。

24ｂトレンチ（Fig. 7 、PL. 7 ・ 8 ）

24ｂトレンチは東山道駅路のルートを確認するため、東西 4 m、南北10mの規模で調査を予定した。トレンチ北端を一部拡張し、最終的には42㎡の範囲の調査となった。中近世の溝 2 条・土坑 1 基、ピット 8 基が検出されたが、東山道駅路と思われる遺構は確認できなかった。

25トレンチ（Fig. 7 、PL. 8 ）

25トレンチは東山道駅路のルートを確認するため、東西 4 m、南北15mの49㎡の範囲を調査した。古代の溝 1 条、土坑 1 基、中近世のピット13基、落ち込み 1 ヶ所が検出されたが、東山道駅路と思われる遺構は確認できなかった。

2　各トレンチの検出遺構および状態

17トレンチ

⑴　竪穴式住居

Ｈ－１号住居跡（Fig. 8 ）

位置　Ｘ279・280、Ｙ258・259グリッド。　**主軸方向**　Ｎ－54°－Ｅ。　**形状等**　方形と推定される。東西(2.95)m、南北(4.05)m。壁高9.5㎝。面積(5.7)㎡。　**床面**　地山床、もしくは貼床と思われる。顕著な堅緻面は検出されなかった。　**竈**　未検出（焼土の検出状況から東壁中央付近に存在したと推測される）。　**周溝**　幅 4 ～ 9 ㎝。深さ14.5㎝。　**重複関係**　Ｄ－２号土坑と重複する。本住居跡の方が古い。　**出土遺物**　土師器片が出土。**時期**　本住居跡の形状及び出土遺物から、 6 世紀後半と推定される。

⑵　溝跡

Ｗ－１号溝跡（Fig. 8 、PL. 1 ）

位置　Ｘ279･280、Ｙ259グリッド。　**主軸方向**　Ｎ－86°－Ｅ。　**形状等**　長さ(4.1)m、深さ175㎝、最大上幅2.35m、最大下幅0.28m。断面は薬研状。　**出土遺物**　土師器片、酸化焔焼成須恵器片、瓦片が出土。　**時期**　本溝跡の形状及び出土遺物から、中世と推定される。

⑶　土坑

土坑が２基検出されたが、出土遺物が少ないため詳細な時期は不明である（Fig.８）。規模等については計測表（Tab.３）に記載した。

18トレンチ

⑴　井戸跡

Ｉ－１号井戸跡（Fig.９）

位置　Ｘ279、Ｙ269グリッド　**形状等**　南北0.84m×東西0.85mの円形。底部未確認。　**時期**　本井戸跡から遺物は出土していないが、18トレンチ全体では軟質土器片や砥石が出土しており、中近世以後と考えたい。

⑵　土坑、ピット、落ち込み

土坑が２基、ピットが11基、落ち込みが１ヶ所検出された（Fig.８・９）。軟質土器が出土したＤ－２号土坑、砥石が出土したＰ－３号ピット以外の遺構は、個々に時期を特定することはできない。規模等については計測表（Tab.３）に記載した。

19トレンチ

トレンチの状況　19トレンチにおいて遺構は確認されていないが、トレンチ内の２ヶ所においてテストピットを設けて土層の堆積状態を調査したところ、東へ傾斜する地形が検出された。付近の地形の状態からこの傾斜地形は牛池川へと続く傾斜地形と推定される（Fig.９、PL.１）。　**位置**　テストピット１（TP－１）はＸ286、Ｙ249グリッド。テストピット２（TP－２）はＸ286、Ｙ250グリッド。　**層位等**　表土の下位は浅間Ｂ軽石を含む土層が堆積しており、遺物はこの付近から出土し始めている。その下位にFA泥流と考えられるの堆積層が確認できた。その下位は浅間Ｃ軽石を含む黒色土が堆積し、地山の総社砂層となっていた。　**出土遺物**　土師器、須恵器の破片が少量出土している。層位的にはHr-FPF １より上位では、奈良・平安時代と考えられる土師器や須恵器の破片が中心であり、その中には８世紀代の脚部の断面が多角形となる土師器の坏部の破片や、須恵器の円面硯の破片などの官衙関連遺物も含まれている。Hr-FPF １より下位では石田川式の土師器の破片等が出土している。本報告では、６世紀墳時代の坏、８世紀代の土師器高坏、須恵器の円面硯の脚部の破片、平瓦片、紡錘車と推定される円盤形の土製品を図示した。

20トレンチ

トレンチの状況　元総社小学校の構内のうち、校舎西側において調査を計画した際、この場所がかつて墓地であり、牛池川の河川改修とあわせて付近の区画整理を行った際に墓地が移転しており、その折に大規模な土の入れ替えを行っていることが判明した。そこで、テストピットを２ヶ所設定し、試掘したところ、表土（校庭のゴンベ砂）の下位は客土として入れた砕石層となっていたため、１m程掘り下げたところで調査を終了した。　**位置**　テストピット１（TP－１）はＸ287、Ｙ294グリッド。テストピット２（TP－２）はＸ287、Ｙ298グリッド。

21ａトレンチ

⑴　竪穴式住居

Ｈ－１号住居跡（Fig.10、PL.３）

位置　Ｘ286、Ｙ306・307グリッド。　**主軸方向**　Ｎ－60°－Ｅ。　**形状等**　方形と推定される。東西(1.32)m、南北(3.74)m。壁高25㎝。　**面積**　(3.69)㎡。　**床面**　地山の砂層に造られた地山床。　**竈**　東壁に構築されている。主軸方向はＮ－92°－Ｅ、全長0.81mを測る。構築材１片を検出したが、粘土は確認できなかった。　**重複関**

係　W－１号溝と重複する。本住居跡の方が古い。　**出土遺物**　土師器坏･甕･土師器片、須恵器片が出土。　**時期**　出土遺物から７世紀後半と推定される。

⑵　**溝跡**

W－１号溝跡（Fig.10・11、PL.２・３）

位置　X289、Y306～308グリッド。　**主軸方向**　N－１°－W。　**形状等**　長さ(8.35)m、深さ0.31m　最大上幅210m、最大下幅1.82m。断面は逆台形。　**重複関係**　H－１号住居跡、D－１・２号土坑、１・２・３・４号ピットと重複する。H－１号住居跡、１・２・３・４号ピットは本遺構よりも古い、D－２号土坑は本遺構よりも新しい。D－１号土坑は本遺構との重複関係の判断が難しい状況ではあるが、出土遺物等から本遺構よりも新しい可能性が高い。　**出土遺物**　土器類としては、本遺構に直接関係のない遺物として、４世紀代と６世紀代の土師器片が出土している。本遺構と時期的に関係のある可能性が高いものとして、土師器、須恵器、黒色土器が出土している。土師器片は、坏、甕、鉢の破片のほか、放射状･螺旋状暗紋を有する坏や高坏の破片が出土している。須恵器では蓋・坏・椀・盤・高盤・甕など点数・器種ともに内容は豊富である。その中に「本」、「大家」と記された墨書土器も含まれている。黒色土器は一対と考えられる蓋、盤のほか坏が出土している。その他に鉄滓、羽口片、転用坩堝片、漆が付着した須恵器片などの工房に関連した遺物も出土している。　**時期**　出土遺物や遺構の重複関係から８世紀前半には掘削されていたことは推定できる。廃絶の時期は遺物から９世紀代まで溝は存在していたと考えられる。

⑶　**土坑、ピット**

土坑が２基、ピットが４基検出された(Fig.10･11、PL.３)。遺構の重複関係や覆土の状態から大まか時期は推測できるが、出土遺物が少ないため詳細な時期は不明である。規模等については計測表（Tab.３）に記載した。

21ｂトレンチ

トレンチの状況　21ａトレンチの調査とあわせて掘削したが、トレンチ付近は戦時中に小学校で使用した運動用のバンクが存在したとの証言もあり、調査区内は攪乱が多く、遺構は確認されなかった（PL.３)。しかしながら掘削時に覆土から少なからず遺物が出土しており、内容的には21ａトレンチのW－１号溝跡の出土遺物に共通する遺物が多かった。　**層位等**　表土（校庭のゴンベ砂）の下位は攪乱を受けた土となっており、浅間Ｂ軽石混入土層や浅間Ｃ軽石混入黒色土層は明瞭に確認できなかった。この攪乱を受けた土の層の下位は部分的には粘性の強い漸位層が確認できたが、概ね総社砂層となっていた。　**出土遺物**　土器としては土師器・須恵器の破片が出土している。これらの中には放射状暗文を有する土師器、須恵器蓋のほか、須恵器長頸壺の底部と推定される破片も出土している。また、鉄滓、羽口片、転用坩堝片、漆が付着した須恵器片などの工房に関連した遺物も出土しており、出土遺物の内容は21ａトレンチのW－１号溝跡出土の遺物の内容と共通している。

22トレンチ

⑴　**竪穴式住居**

H－１号住居跡（Fig.９、PL.２）

位置　X282、Y260･261グリッド。　**主軸方向**　N－63°－E。　**形状等**　方形と推定される。東西(0.80)m、南北(1.35)m。壁高12㎝。　**面積**　(0.48)㎡。　**床面**　地山床。　**竈**　未検出(調査区外に存在すると推定される)。　**周溝**　幅４～８㎝。深さ7.5～10.5㎝。　**出土遺物**　床面直上から土師器甕･小甕等が出土。　**時期**　出土遺物から６世紀後半と推定される。

⑵　**落ち込み**

落ち込みが１ヶ所検出された（Fig.９)。規模等については計測表（Tab.３）に記載した。

23トレンチ

⑴　竪穴式住居

Ｈ－１号住居跡（Fig.12、PL.４）

位置　Ｘ301・302、Ｙ364・365グリッド。　**主軸方向**　Ｎ―86°―Ｅ。　**形状等**　方形と推定される。東西(1.58)ｍ、南北(3.40)ｍ。壁高13.5㎝。　**面積**　(4.62)㎡。　**床面**　地山床。　**竈**　東壁に構築されている。主軸方向Ｎ―122°―Ｅ。　**重複関係**　Ｗ－２・３号溝跡と重複する。本住居跡が最も古い。　**出土遺物**　土師器片、須恵器坏、羽釜片が出土。　**時期**　出土遺物から10世前半と推定される。

Ｈ－２号住居跡（Fig.12、PL.４）

位置　Ｘ302、Ｙ364･365グリッド。　**主軸方向**　Ｎ―95°―Ｅ。　**形状等**　方形と推定される。東西(0.18)ｍ、南北(1.50)ｍ。壁高12㎝。　**面積**　(0.34)㎡。　**床面**　地山床。　**竈**　未検出(調査区外に存在すると推定される)。**重複関係**　Ｈ－３号住居跡と重複する。本住居跡の方が古い。　**出土遺物**　なし。　**時期**　重複関係から10世紀代と推定される。

Ｈ－３号住居跡（Fig.12、PL.４）

位置　Ｘ302、Ｙ365グリッド。　**主軸方向**　Ｎ―94°―Ｅ。　**形状等**　方形と推定される。東西(1.96)ｍ、南北(3.25)ｍ。壁高15㎝。　**面積**　(5.08)㎡。　**床面**　地山床。　**竈**　未検出（調査区外に存在すると推定される)。**重複関係**　Ｈ－２・４号住居跡、Ｗ－３号溝跡と重複する。本住居跡は、Ｗ－３号溝跡、Ｈ－４号住居跡より古く、Ｈ－２号住居跡より新しい。　**出土遺物**　酸化焔焼成須恵器片、砥石が出土。　**時期**　出土遺物から10世紀後半と推定される。

Ｈ－４号住居跡（Fig.12、PL.４）

位置　Ｘ302、Ｙ365･366グリッド。　**主軸方向**　Ｎ―85°―Ｅ。　**形状等**　方形と推定される。東西(0.65)ｍ、南北(2.61)ｍ。壁高17㎝。　**面積**　(1.9)㎡。　**床面**　地山床。　**竈**　未検出(調査区外に存在すると推定される)。**重複関係**　Ｈ－３号住居跡と重複する。本住居跡の方が古い。　**出土遺物**　土師器片、須恵器片、灰釉陶器片、黒色土器高台椀等が出土。　**時期**　出土遺物から10世紀後半と推定される。

⑵　溝跡

Ｗ－１号溝跡（Fig.13）

位置　Ｘ301・302、Ｙ364グリッド。　**主軸方向**　概ねＮ―108°―Ｅ。　**形状等**　長さ(4.05)ｍ　深さ14.5㎝　最大上幅0.48ｍ、最大下幅0.35ｍ。断面はＵ字形。　**出土遺物**　瓦片が１点出土。　**時期**　覆土から中世と推定される。

Ｗ－２号溝跡（Fig.13、PL.４）

位置　Ｘ301･302、Ｙ364グリッド。　**主軸方向**　Ｎ―92°―Ｅ。　**形状等**　長さ(3.98)ｍ、深さ13.5㎝　最大上幅0.60ｍ、最大下幅0.20ｍ。断面はＵ字形。　**重複関係**　Ｈ－１号住居跡、Ｄ－１号土坑と重複する。Ｈ－１号住居跡よりも新しく、Ｄ－１号土坑よりも古い。　**出土遺物**　軟質土器の擦鉢片が出土。　**時期**　覆土・出土遺物から中近世と推定される。

Ｗ－３号溝跡（Fig.13、PL.４）

位置　Ｘ301・302、Ｙ365グリッド。　**主軸方向**　Ｎ―91°―Ｅ。　**形状等**　長さ(4.1)ｍ　深さ38㎝　最大上幅1.72ｍ、最大下幅0.72ｍ。断面はＵ字形。　**重複関係**　Ｈ－１・３号住居跡と重複する。本溝跡が最も新しい。　**出土遺物**　酸化焔焼成須恵器片、須恵器片、陶器片が出土。　**時期**　出土遺物から中世と推定される。

Ｗ－４号溝跡（Fig.13）

位置　Ｘ301・302、Ｙ367グリッド。　**主軸方向**　Ｎ―84°―Ｅ。　**形状等**　長さ(3.8)ｍ　深さ33㎝　最大上幅0.53㎜、最大下幅0.19ｍ。断面はＵ字形。　**重複関係**　Ｄ－２号土坑と重複する。本溝跡の方が古い。　**出土遺**

物　酸化焔焼成恵器片、土錘片が出土。　**時期**　重複関係や覆土から、古代末頃と推定される。

⑶土坑、ピット

土坑が５基、ピットが14基検出された（Fig.12･13、PL.４・５）。覆土の状態から土坑やピットの多くは中世のものと考えられるが、浅間Ｂ軽石を覆土に含まないＤ－４号土坑は古代の可能性がある。規模等については計測表（Tab.３）に記載した。

24ａトレンチ

⑴　溝跡

Ｗ－１号溝跡（Fig.16、PL.６）

位置　Ｘ259、Ｙ401グリッド。　**主軸方向**　Ｎ－88°－Ｗ。　**形状等**　溝の一部が検出されたのみで、詳細な計測値は不明。　**出土遺物**　なし。　**時期**　覆土と検出状況から近世以後と推定される。また、北側を流れる「芦田堰」の一部と推定される。

⑵　その他の遺構

24ａトレンチでは、Ｗ－１号溝跡の南側で地山の総社砂層を大きく掘り込んでいた（Fig.16、PL.８）。形状としては、断面が逆台形で、Ｎ－82°－Ｗの走行をもち、深さは現地表面から0.8m程度でトレンチの南端まで続いていた。掘り込みの側面には縦方向の工具痕が見られ急角度に掘り込まれているが、底面は平坦となっている。出土遺物は表土近くで陶磁器の小片が若干出土した程度で無い。土層の堆積状況では、南から北に向かい地山の総社砂層が由来と考えられる砂や砂層ブロックを含んだ層が堆積しているが、上位は攪乱のような状況を呈しており、この掘り込みの時期や性格を引き出すようなものは検出できなかった。

24ｂトレンチ

⑴　溝跡

Ｗ－１号溝跡（Fig.17）

位置　Ｘ259、Ｙ405～407グリッド　**主軸方向**　Ｎ－９°－Ｗ。　**形状等**　長さ(8.88)ｍ　深さ14.5㎝　最大上幅1.22m、最大下幅0.57m。断面はＵ字形。　**重複関係**　Ｗ－２号溝跡と重複する。本溝跡の方が古い。　**出土遺物**　土師器片、須恵器片、常滑焼が出土。　**時期**　出土遺物から中世と推定される。

Ｗ－２号溝跡（Fig.17、PL.８）

位置　Ｘ259、Ｙ404･405グリッド　**主軸方向**　Ｎ－84°－Ｅ　**形状等**　溝の一部が検出されたのみで、詳細な計測値は不明。　**重複関係**　Ｗ－１号溝跡と重複する。本溝跡の方が新しい。　**出土遺物**　土師器、須恵器、灰釉陶器、軟質土器などの土器の小片、牛もしくは馬の歯等。　**時期**　遺構の重複関係や出土遺物等から中近世以後と推定される。　**その他**　検出状況から、溝とするよりも北側の谷地形へと続く傾斜地の可能性がある。現状では24ａトレンチと24ｂトレンチは高さの異なる面に位置しており、その間は自然石の石積みで土手になっている。この遺構が埋没した自然地形であれば、24ａ・24ｂトレンチ付近が、かつて北へ向かう傾斜地となっていたことが推測でき、中世以後に土手状に整備され、現在の棚田のような状態に至ったことが推測できる。

⑵土坑、ピット

土坑が１基、ピットが８基検出された（Fig.17）。出土遺物が皆無に等しいが、覆土の状態から時期的には中世に該当するであろうか。規模等については計測表（Tab.３）に記載した。

25トレンチ

⑴　溝跡

W－１号溝跡（Fig.18・19、PL.８）

位置　X290・291、Y400・401グリッド。　**主軸方向**　N－13°－W。　**形状等**　長さ(7.85)m、深さ35㎝、最大上幅2.10m、最大下幅1.30m。断面はU字形。　**重複関係**　O－１号落ち込みと重複する。本溝跡の方が古い。　**出土遺物**　土師器甕破片、須恵器坏・高台椀、黒色土器高台椀、獣骨？が出土。須恵器のうちに、「木」「本」と推定される墨書土器や、五芒星の刻書土器も含まれる。　**時期**　出土遺物から９世紀後半頃と推定される。

⑵　土坑、ピット、落ち込み

土坑が１基、ピットが16基、落ち込みが１ヶ所検出された（Fig.18）。出土遺物が皆無に等しいが、ピットについては覆土や検出状況から時期的には中世に該当するであろうか。土坑については古代まで遡る可能性があるが詳細は不明である。規模等については計測表（Tab.３）に記載した。

⑶　遺物包含層、その他

25トレンチにおける遺構検出状態はFig.18のとおりで主な遺構としてはW－１号溝跡とピット群が検出されているが、浅間Ｂ軽石混入土の下層（Ⅲａ・ｂ・ｃ層）に、遺物、炭化物、焼土が包含されていた。遺物は主なもので土師器坏・甕、須恵器坏・高台椀・大甕等、灰釉陶器皿で、破片が多い。時期的にはW－１号溝跡とほぼ同時期と考えられる。住居等の遺構が存在したことも考えられるが、竈や、床面と考えられる硬化面が検出できなかったことから、ここでは存在しないと判断した。

なお、トレンチ北端では浅間Ｂ軽石層が下位の層を掘り込むように堆積しているが、溝跡もしくは「芦田堰」に関連した水路の覆土の可能性がある。

26トレンチ

⑴　竪穴式住居

Ｈ－１号住居跡（Fig.14、PL.５）

位置　X197･198、Y356グリッド。　**主軸方向**　N－87°－E。　**形状等**　方形と推定される。東西(2.41)m、南北(2.04)m。壁高20㎝。　**面積**　(4.96)㎡。　**床面**　地山床。堅緻面は検出されなかった。　**竈**　東壁に構築される。主軸方向N－95°－E、全長0.88m、最大幅0.77m、焚口部幅0.32mを測る。　**重複関係**　W－３号溝跡と重複する。本住居跡の方が古い。　**出土遺物**　土器類では土師器坏・甕・放射状の暗文を有する坏、須恵器蓋・坏・甕のそれぞれの破片が出土している。　**時期**　出土遺物から９世紀前半と推定される。

Ｈ－２号住居跡（Fig.14、PL.６）

位置　X199･200、Y357グリッド。　**主軸方向**　N－72°－E。　**形状等**　方形と推定される。東西(2.82)m、南北(0.91)m。壁高18㎝。　**面積**　(1.36)㎡。　**床面**　地山床。堅緻面は検出されなかった。　**竈**　未検出（調査区外に存在すると推定される）。　**重複関係**　A－２号道路状遺構と重複する。本住居跡の方が古い。　**出土遺物**　酸化焔焼成須恵器の高台椀の底部が出土。　**時期**　判断が難しいが出土遺物から10世紀頃と推定される。

⑵　溝跡

W－１号溝跡（Fig.14、PL.５）

位置　X199・200、Y356グリッド　**主軸方向**　N－１°－W　**形状等**　長さ(4.0)m　深さ63.5㎝　最大上幅2.15m、最大下幅0.54m。断面はU字形。　**重複関係**　D－４・６号土坑と重複する。本溝跡はD－６号土坑より古く、D－４号土坑より新しい。　**出土遺物**　土器類では土師器坏･放射状および螺旋状暗文を有する坏等の破片、須恵器坏・蓋・大甕・長頸壺等の破片、布目瓦破片、羽口破片、黒色土器坏の破片が出土。　**時期**　古代と考えられるが、９世紀前後か。　**その他**　大型の土坑の可能性もあるが、形状が南北に延びるような形状であったこ

とから、溝とした。

W－2号溝跡（Fig.15、PL.6）

位置　X200、Y356グリッド　**主軸方向**　N－60°－E　**形状等**　長さ(3.28)m、深さ6.5㎝　最大上幅0.86m、最大下幅0.56㎝。断面は逆台形か。　**重複関係**　A－1・2号道路状遺構と重複する。新旧関係はA－1・2号道路状遺構より本溝跡が古い。　**出土遺物**　なし。　**時期**　判断が難しいが遺構の重複関係から中世以前と推定される。

W－3号溝跡（Fig.15、PL.5）

位置　X197・198、Y356グリッド　**主軸方向**　N－81°－E　**形状等**　長さ(3.6)m、深さ14.5㎝　最大上幅1.10m、最大下幅0.77m。断面は逆台形。　**重複関係**　H－1号住居跡、D－2号土坑、O－1号落ち込みと重複する。本溝跡は、O－1号落ち込みより古く、H－1号住居跡・D－2号土坑より新しいと推定される。　**出土遺物**　土師器甕破片、須恵器坏・高台椀破片等全体的に極少量。　**時期**　9世紀以後か。

⑶　道路状遺構

A－1号道路状遺構（Fig.15、PL.6）

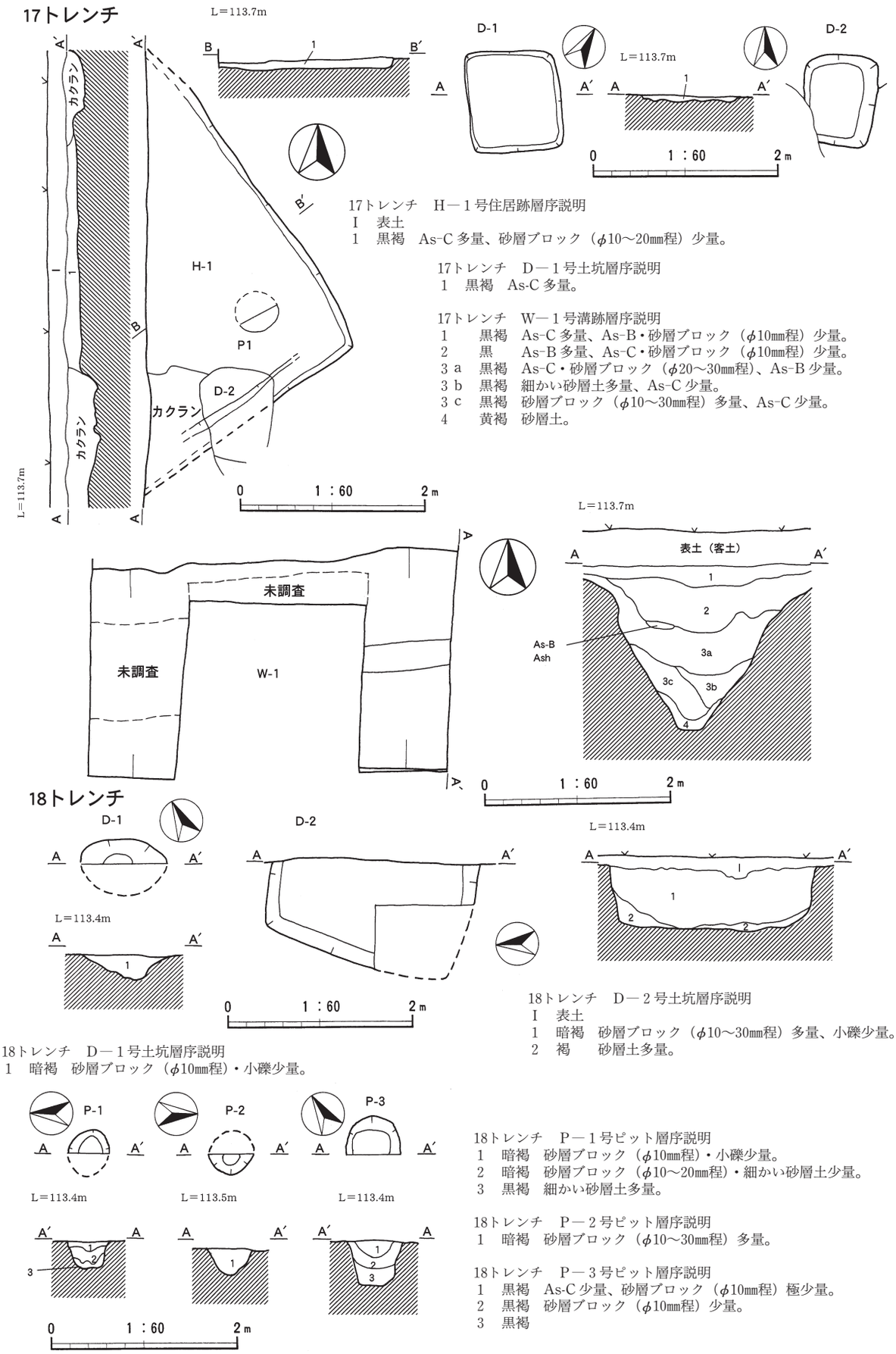
位置　X200・201、Y356グリッド　**主軸方向**　N－6°－E　**形状等**　長さ(3.84)m、最大上幅(1.90)m。遺構の範囲とした面がほぼ全面的に硬化しており、その土は地山を凸凹に掘り込んだ面の上に堆積していた。　**重複関係**　D－1・5号土坑、W－2号溝跡、A－2号道路状遺構と重複する。本道路跡は、W－2号溝跡より新しく、D－1・5号土坑、A－2号道路状遺構より新しい。　**出土遺物**　硬化面の中から土師器、須恵器の小片が若干出土。　**時期**　他の遺構との重複関係から中世と推定される。

A－2号道路状遺構（Fig.15、PL.6）

位置　X(199)・200・(201)、Y356・357グリッド　**主軸方向**　N－66°－E　**形状等**　検出した範囲は、長さ(1.85)m、最大上幅(0.66)㎝であるが、南壁土層断面において本道路状遺構の硬化面が確認でき、そこから本道路状遺構の幅は1.9m程と推定される。硬化面の上部の土は錆びており、その上層に砂層が堆積していた。　**重複関係**　H－2号住居跡、W－1・2号溝跡、A－1号道路状遺構と重複する。本遺構はH－2号住居跡、W－1・2号溝跡より新しく、A－1号道路状遺構より古い。　**出土遺物**　路面直上の覆土から土師器、須恵器、灰釉陶器の小片および灰釉陶器の皿が出土。　**時期**　他の遺構との重複関係や土層の堆積状況から古代末から中世初頭頃と推定される。

⑷　土坑、ピット

土坑が6基、落ち込みが1ヶ所検出された（Fig.14・15）。出土遺物は少なからず出土しているが、O－1号落ち込みからは、土師器や須恵器の破片が多く出土している。土師器としては、放射状暗文を有する坏などが含まれ、須恵器には、坏、蓋、大甕、長頸壺と推定される底部などが含まれる。その他に灰釉陶器片、羽口片、漆の付着した土器などの遺物も出土している。規模等については計測表（Tab.3）に記載した。



17トレンチ　H－1号住居跡層序説明
Ⅰ　表土
1　黒褐　As-C多量、砂層ブロック（φ10～20㎜程）少量。

17トレンチ　D－1号土坑層序説明
1　黒褐　As-C多量。

17トレンチ　W－1号溝跡層序説明
1　　黒褐　As-C多量、As-B・砂層ブロック（φ10㎜程）少量。
2　　黒　　As-B多量、As-C・砂層ブロック（φ10㎜程）少量。
3a　黒褐　As-C・砂層ブロック（φ20～30㎜程）、As-B少量。
3b　黒褐　細かい砂層土多量、As-C少量。
3c　黒褐　砂層ブロック（φ10～30㎜程）多量、As-C少量。
4　　黄褐　砂層土。

18トレンチ　D－2号土坑層序説明
Ⅰ　表土
1　暗褐　砂層ブロック（φ10～30㎜程）多量、小礫少量。
2　褐　　砂層土多量。

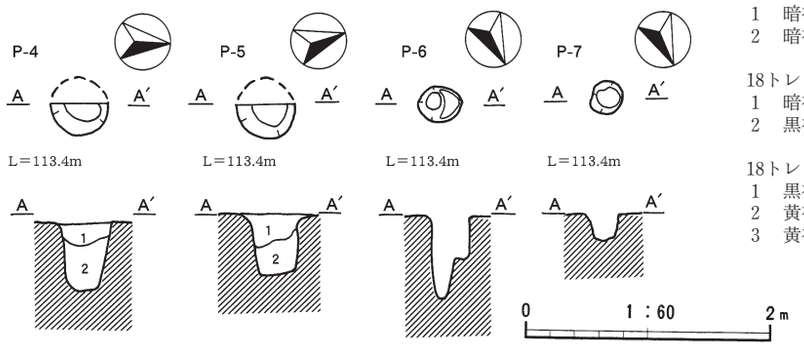
18トレンチ　D－1号土坑層序説明
1　暗褐　砂層ブロック（φ10㎜程）・小礫少量。

18トレンチ　P－1号ピット層序説明
1　暗褐　砂層ブロック（φ10㎜程）・小礫少量。
2　暗褐　砂層ブロック（φ10～20㎜程）・細かい砂層土少量。
3　黒褐　細かい砂層土多量。

18トレンチ　P－2号ピット層序説明
1　暗褐　砂層ブロック（φ10～30㎜程）多量。

18トレンチ　P－3号ピット層序説明
1　黒褐　As-C少量、砂層ブロック（φ10㎜程）極少量。
2　黒褐　砂層ブロック（φ10㎜程）少量。
3　黒褐

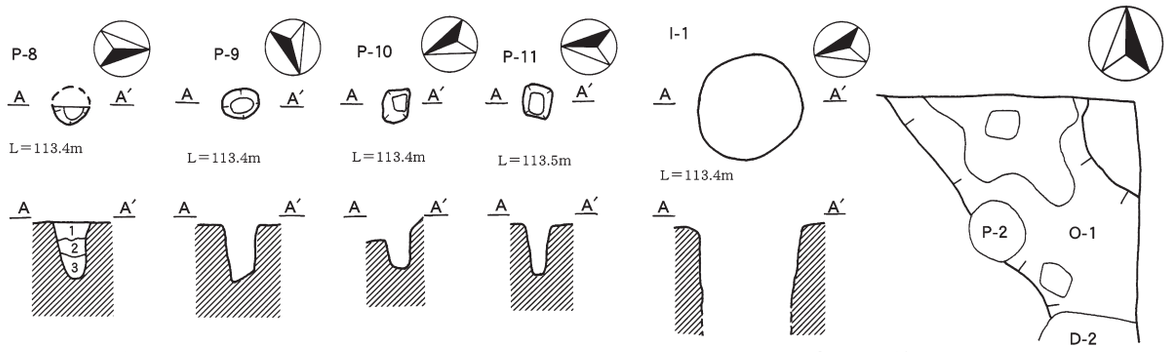
Fig. 8　17・18トレンチ各遺構



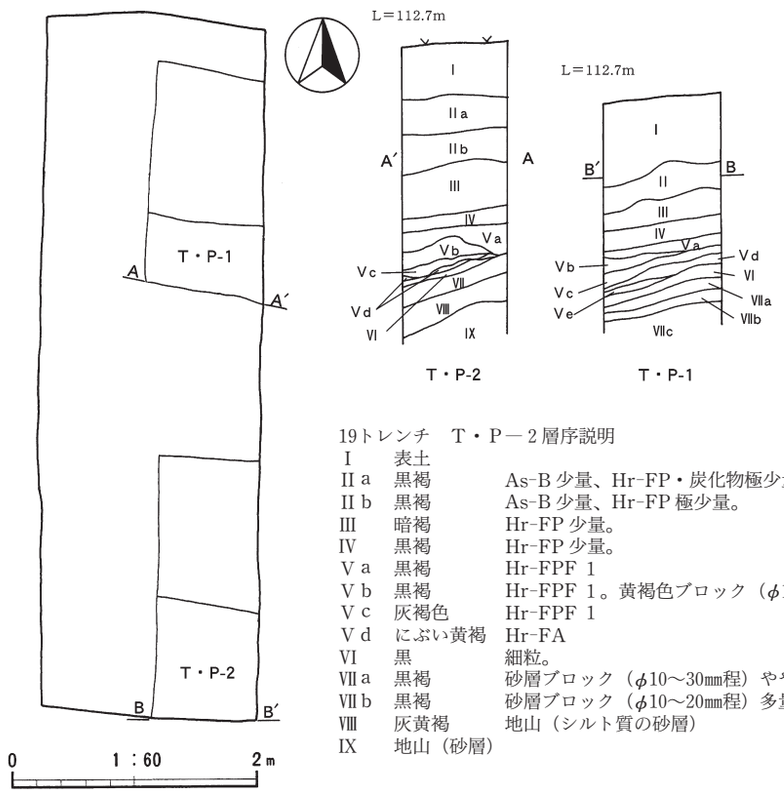
18トレンチ　P－4セクション
1　暗褐　小礫極少量。
2　暗褐　細かい砂層土多量。

18トレンチ　P－5セクション
1　暗褐　砂層ブロック（φ20～30㎜程）・小礫少量。
2　黒褐　砂層ブロック（φ10㎜程）・小礫少量。

18トレンチ　P－8セクション
1　黒褐
2　黄褐　砂層土多量。
3　黄褐　砂層土主体。



19トレンチ



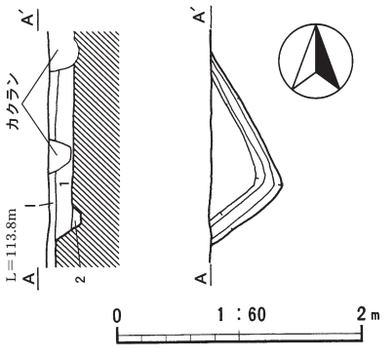
19トレンチ　T・P－2層序説明

I	表土	
IIa	黒褐	As-B少量、Hr-FP・炭化物極少量。
IIb	黒褐	As-B少量、Hr-FP極少量。
III	暗褐	Hr-FP少量。
IV	黒褐	Hr-FP少量。
Va	黒褐	Hr-FPF 1
Vb	黒褐	Hr-FPF 1。黄褐色ブロック（φ10～20㎜）多量。
Vc	灰褐色	Hr-FPF 1
Vd	にぶい黄褐	Hr-FA
VI	黒	細粒。
VIIa	黒褐	砂層ブロック（φ10～30㎜程）やや多量。
VIIb	黒褐	砂層ブロック（φ10～20㎜程）多量。
VIII	灰黄褐	地山（シルト質の砂層）
IX	地山（砂層）	

19トレンチ　T・P－1層序説明

II	黒褐	As-B少量、Hr-FP・炭化物極少量。
III	暗褐	As-B・Hr-FP極少量。
IVa	黒褐	Hr-FP・As-C極少量。
IVb	黒褐	Hr-FP少量、As-Cを極少量含む。
Va	黒褐	Hr-FPF 1
Vb	にぶい黄褐	Hr-FPF 1
Vc	黄褐	Hr-FPF 1
Vd	灰黄褐	Hr-FPF 1
Ve	にぶい黄褐	Hr-FA
VI	黒褐	As-C少量含。
VIIa	黒褐	As-C・砂層ブロック（φ10㎜程）少量。
VIIb	黒褐	細かい砂層土多量。
VIIc	黒	砂層ブロック（φ10～20㎜）多量。

22トレンチ



22トレンチ　H－1号住居跡層序説明
I　表土
1　黒褐　As-C少量、焼土ブロック極少量。
2　注記漏れ

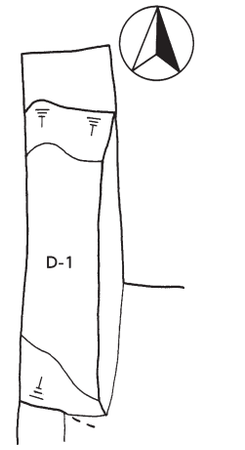


Fig. 9　18・19・22トレンチ各遺構

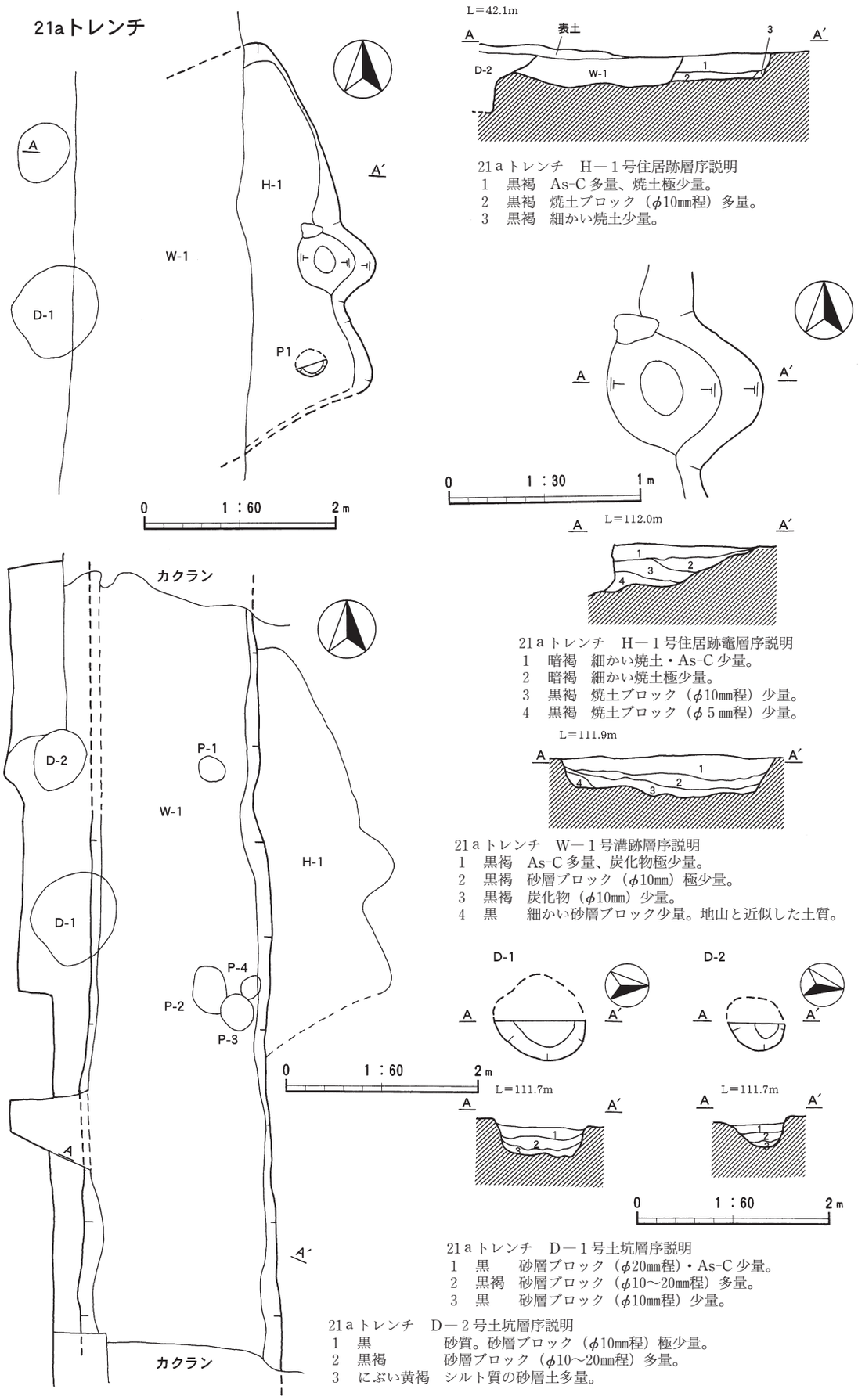
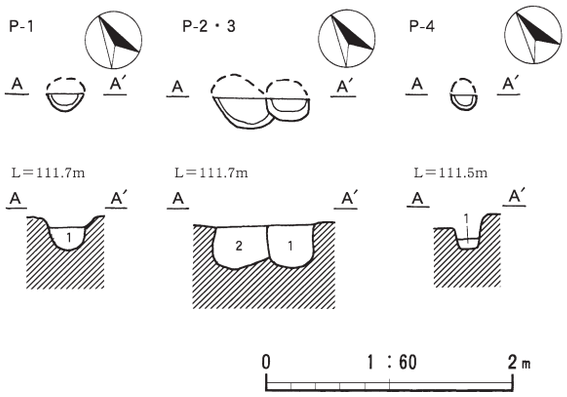


Fig.10　21ａトレンチ各遺構(1)



21ａトレンチ　Ｐ－１号ピット層序説明
１　黒褐　砂層土・砂層ブロック（φ20㎜程）少量。

21ａトレンチ　Ｐ－２・３号ピット層序説明
１　黒褐　As-C少量。
２　黒褐　As-C・砂層ブロック（φ10㎜程）少量。

21ａトレンチ　Ｐ－４号ピット層序説明
１　黒褐　砂層ブロック（φ30㎜程）極少量。

W-1号溝跡の遺物出土状態

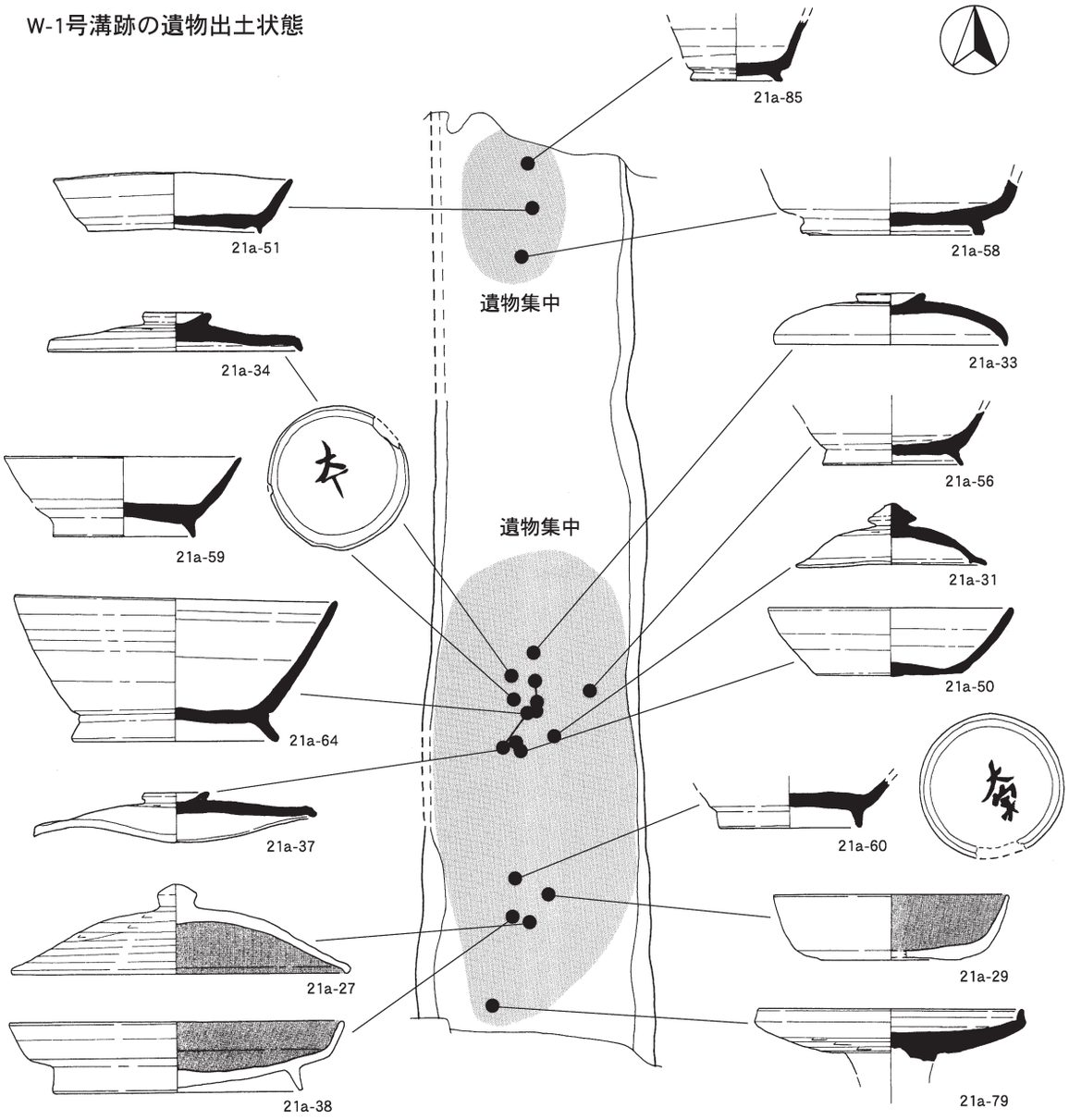
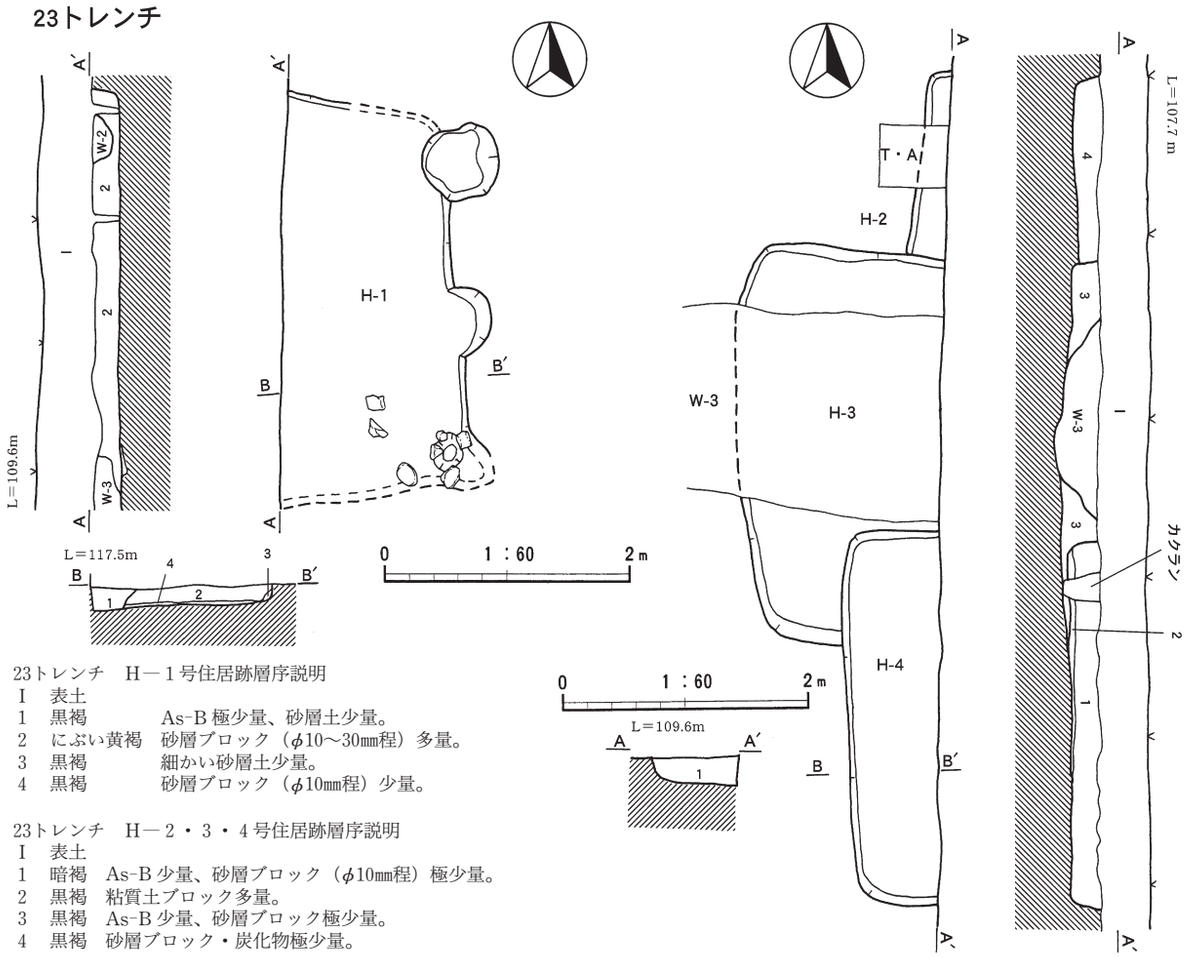


Fig.11　21ａトレンチ各遺構(2)

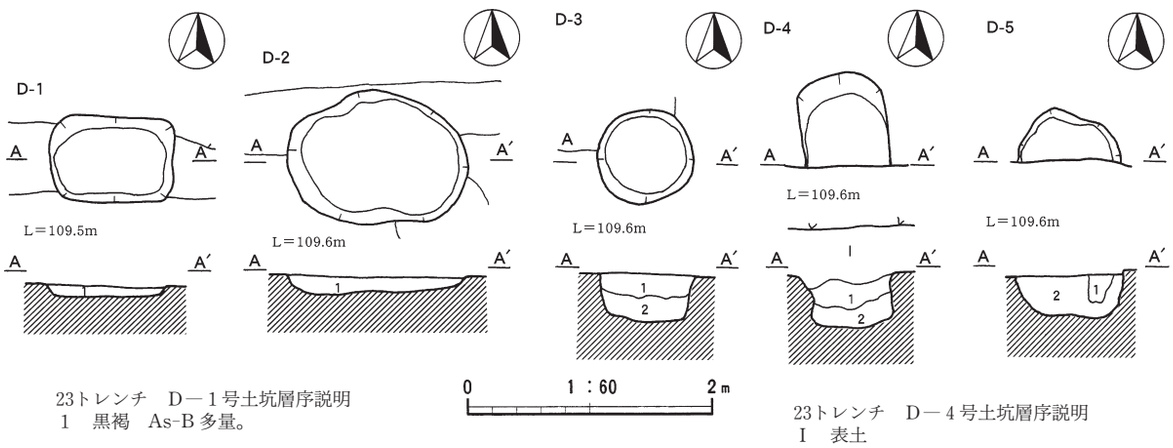
23トレンチ



23トレンチ　H－1号住居跡層序説明
Ⅰ　表土
1　黒褐　　As-B 極少量、砂層土少量。
2　にぶい黄褐　砂層ブロック（φ10～30㎜程）多量。
3　黒褐　　細かい砂層土少量。
4　黒褐　　砂層ブロック（φ10㎜程）少量。

23トレンチ　H－2・3・4号住居跡層序説明
Ⅰ　表土
1　暗褐　As-B 少量、砂層ブロック（φ10㎜程）極少量。
2　黒褐　粘質土ブロック多量。
3　黒褐　As-B 少量、砂層ブロック極少量。
4　黒褐　砂層ブロック・炭化物極少量。

23トレンチ　H－4号住居跡層序説明
1　暗褐　As-B 少量、砂層ブロック（φ10㎜程）極少量。



23トレンチ　D－1号土坑層序説明
1　黒褐　As-B 多量。

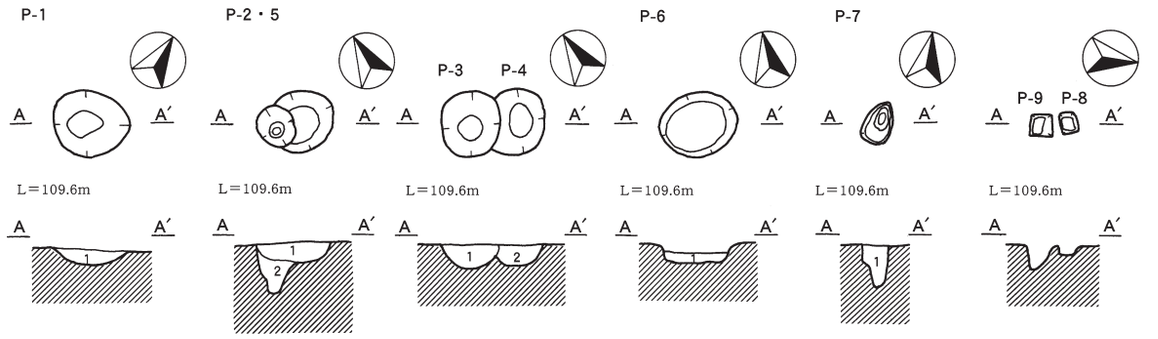
23トレンチ　D－2号土坑層序説明
1　黒褐　As-B 多量。

23トレンチ　D－3号土坑層序説明
1　黒褐　As-B 極少量。
2　黒褐　粘質。

23トレンチ　D－4号土坑層序説明
Ⅰ　表土
1　黒褐　As-C・焼土少量。
2　黒褐　As-C・焼土少量。

23トレンチ　D－5号土坑層序説明
1　黒褐　As-B 多量。
2　黒褐　砂層ブロック（φ10㎜程）少量。

Fig.12　23トレンチ各遺構(1)



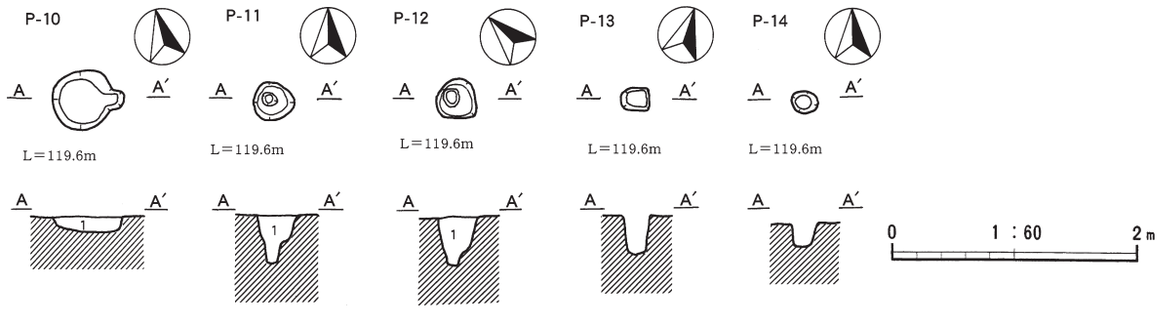
23トレンチ　P－1号ピット層序説明
1　黒褐　As-B少量。

23トレンチ　P－2・5号ピット層序説明
1　黒褐　As-B多量。
2　注記漏れ

23トレンチ　P－3・4号ピット層序説明
1　黒褐　As-B多量、粘質土ブロック（φ10～20㎜）極少量。
2　黒褐　As-B多量、粘質土ブロック（φ10㎜程）少量。

23トレンチ　P－6号ピット層序説明
1　黒褐　As-B多量。

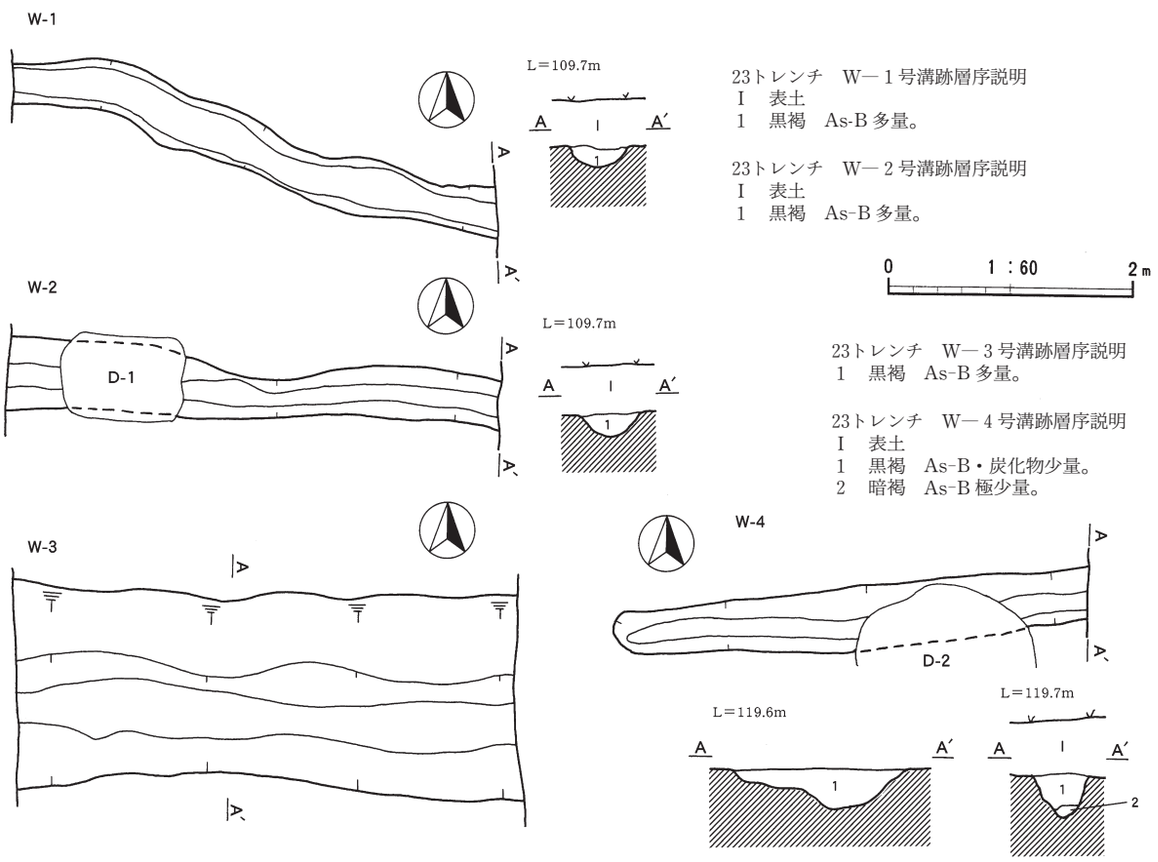
23トレンチ　P－7号ピット層序説明
1　黒褐　As-B多量。



23トレンチ　P－10号ピット層序説明
1　黒褐　As-B多量。

23トレンチ　P－11号ピット層序説明
1　黒褐　As-B多量。

23トレンチ　P－12号ピット層序説明
1　黒褐　As-B多量。



23トレンチ　W－1号溝跡層序説明
I　表土
1　黒褐　As-B多量。

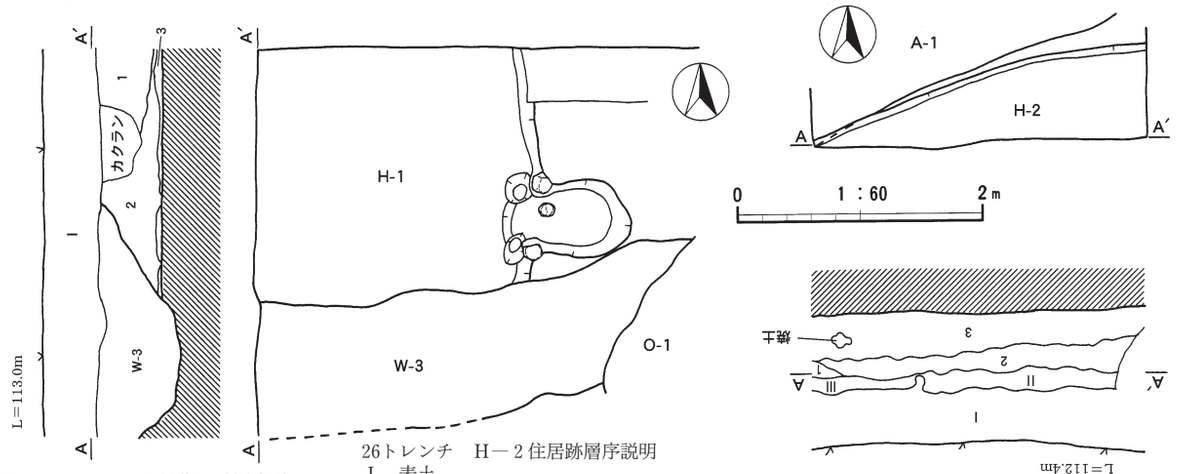
23トレンチ　W－2号溝跡層序説明
I　表土
1　黒褐　As-B多量。

23トレンチ　W－3号溝跡層序説明
1　黒褐　As-B多量。

23トレンチ　W－4号溝跡層序説明
I　表土
1　黒褐　As-B・炭化物少量。
2　暗褐　As-B極少量。

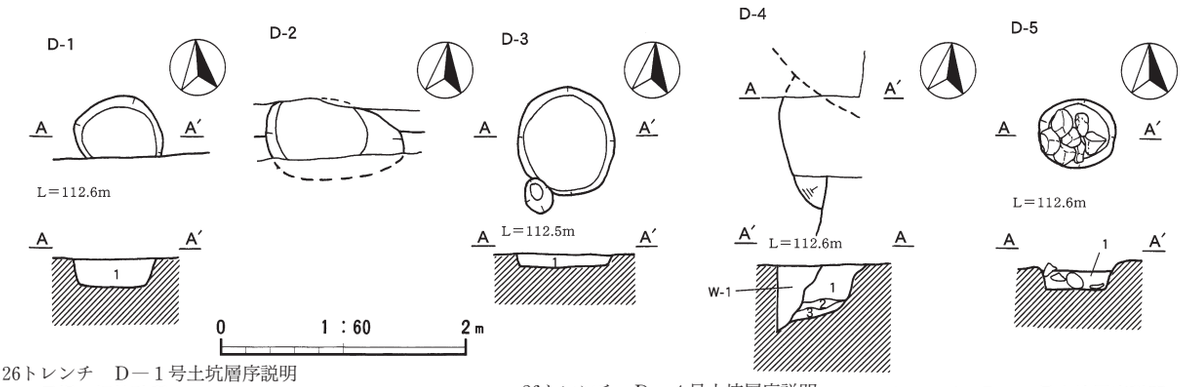
Fig.13　23トレンチ各遺構(2)

26トレンチ



26トレンチ　H－1号住居跡層序説明
Ⅰ　表土
1　褐　As-C少量、炭化物極少量。
2　褐　As-C少量。
3　暗褐　シルト質土少量。

26トレンチ　H－2住居跡層序説明
Ⅰ　表土
Ⅱ　　As-B混入土
1　黒　　As-B多量。
2　黒　　As-B多量。炭化物極少量。
3　黒褐　As-B・As-C・炭化物少量。



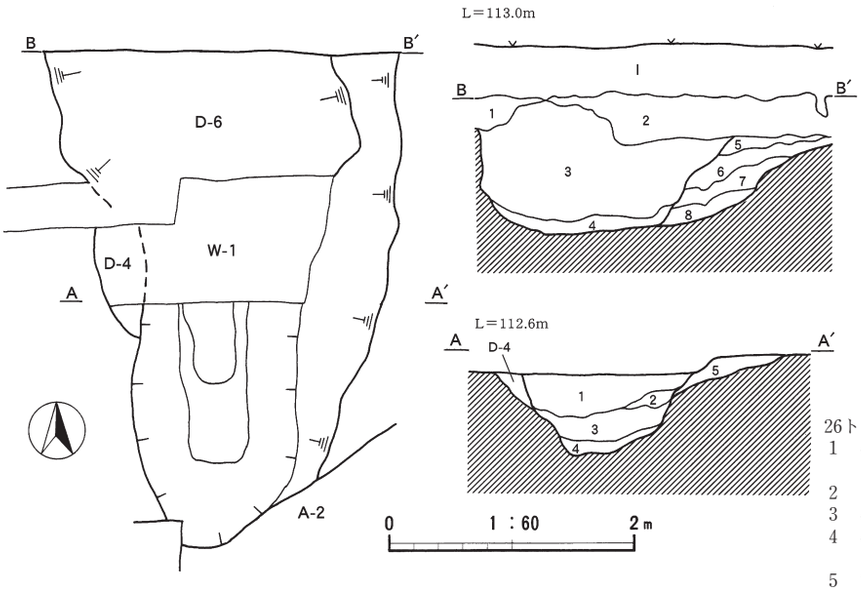
26トレンチ　D－1号土坑層序説明
1　黒褐　細粒砂質。

26トレンチ　D－3号土坑層序説明
1　黒褐　As-C極少量。

26トレンチ　D－4号土坑層序説明
1　黒褐　As-C多量。
2　黒褐　細かい小礫少量。
3　黒褐　細かい小礫少量。

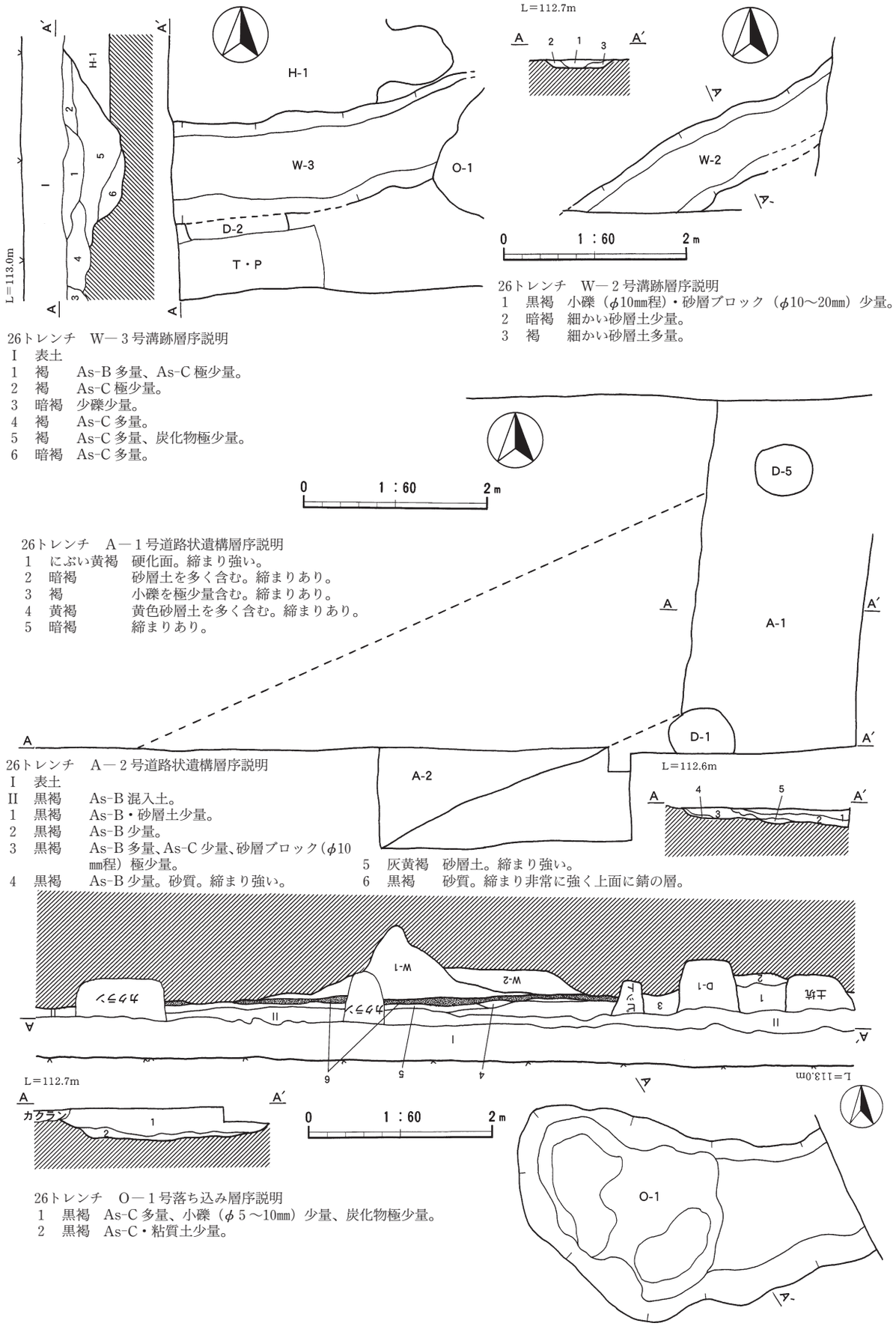
26トレンチ　D－5号土坑層序説明
1　黒　砂質。As-C・炭化物極少量。

26トレンチ　D－6号土坑・W－1号溝跡層序説明
Ⅰ　表土
1　黒褐　As-B多量、炭化物極少量。
2　黒褐　As-B多量。
3　黒褐　As-C多量、小礫（φ5～10㎜）少量。
4　黒褐　小礫（φ5～20㎜）多量、As-C極少量。
5　黒褐　As-C・小礫（φ10㎜程）極少量。
6　黒褐　細かい砂層土少量、As-C・小礫（φ10㎜程）極少量。
7　黒　小礫（φ10㎜程）・細かい砂層土多量。
8　にぶい黄褐　砂（砂層土）多量。



26トレンチ　W－1号溝跡層序説明
1　黒褐　As-C少量、小礫（φ10㎜程）極少量。
2　暗褐　細かい砂層土少量。
3　黒褐　As-C・砂層土極少量。
4　黒褐　砂層ブロック（φ10～20㎜）多量、小礫（φ10㎜程）極少量。
5　黄褐　地山に近い砂層。小礫（φ10㎜）少量。

Fig.14　26トレンチ各遺構(1)



26トレンチ　W－３号溝跡層序説明
Ⅰ　表土
1　褐　　As-B 多量、As-C 極少量。
2　褐　　As-C 極少量。
3　暗褐　少礫少量。
4　褐　　As-C 多量。
5　褐　　As-C 多量、炭化物極少量。
6　暗褐　As-C 多量。

26トレンチ　W－２号溝跡層序説明
1　黒褐　小礫（φ10㎜程）・砂層ブロック（φ10～20㎜）少量。
2　暗褐　細かい砂層土少量。
3　褐　　細かい砂層土多量。

26トレンチ　A－１号道路状遺構層序説明
1　にぶい黄褐　硬化面。締まり強い。
2　暗褐　　砂層土を多く含む。締まりあり。
3　褐　　小礫を極少量含む。締まりあり。
4　黄褐　　黄色砂層土を多く含む。締まりあり。
5　暗褐　　締まりあり。

26トレンチ　A－２号道路状遺構層序説明
Ⅰ　表土
Ⅱ　黒褐　　As-B 混入土。
1　黒褐　　As-B・砂層土少量。
2　黒褐　　As-B 少量。
3　黒褐　　As-B 多量、As-C 少量、砂層ブロック（φ10㎜程）極少量。
4　黒褐　　As-B 少量。砂質。締まり強い。
5　灰黄褐　砂層土。締まり強い。
6　黒褐　　砂質。締まり非常に強く上面に錆の層。

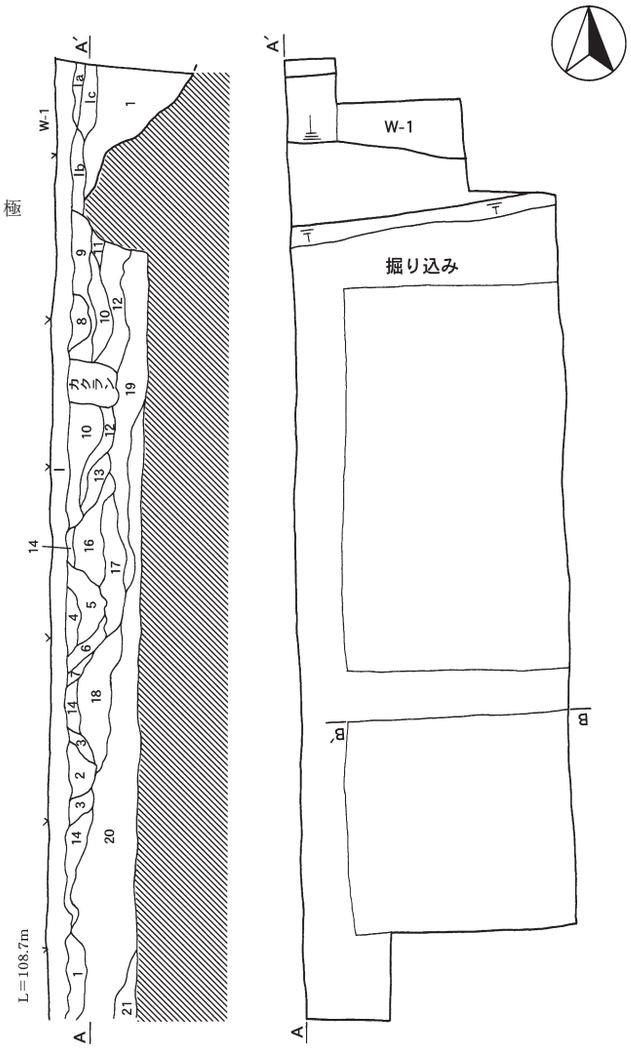
26トレンチ　O－１号落ち込み層序説明
1　黒褐　As-C 多量、小礫（φ５～10㎜）少量、炭化物極少量。
2　黒褐　As-C・粘質土少量。

Fig.15　26トレンチ各遺構(2)

24aトレンチ

24ａトレンチ　西壁層序説明
Ⅰ　表土
Ⅰａ　黒褐　　砕石混入。
Ⅰｂ　黒褐　　灰褐色土ブロック多量。
Ⅰｃ　黒褐　　細かい砂層土少量、砂層ブロック（φ10～20㎜）極少量。
1　黒褐　　砂層ブロック（φ10～30㎜）少量。
2　黒褐　　砂層ブロック（φ10～40㎜）多量。
3　黒褐　　砂層ブロック（φ20～40㎜）極少量。
4　黒褐　　砂層ブロック（φ10～40㎜）多量。
5　黒褐　　砂層ブロック（φ20～100㎜）極少量。
6　黒褐　　細かい砂層土少量。
7　黒褐　　砂層ブロック（φ10～20㎜）多量。
8　褐　　細かい砂層土多量。
9　褐　　砂層ブロック（φ５～30㎜）多量。
10　暗褐　　砂層ブロック（φ10～30㎜）少量。
11　褐　　砂層ブロック（φ５㎜程）極少量。
12　にぶい黄褐　砂層土、砂層ブロック（φ10～50㎜）多量。
13　暗褐　　砂層ブロック（φ２～10㎜）極少量。
14　褐　　砂層ブロック（φ10～20㎜）多量。
15　暗褐　　やや粘性あり。
16　にぶい黄褐　砂層土多量。炭化物少量。
17　にぶい黄褐　砂層土多量。炭化物極少量。
18　にぶい黄褐　砂層土・砂層ブロック（φ５～20㎜）多量。
19　暗褐　　砂層ブロック（φ５～30㎜）少量。
20　灰黄褐　　砂層土多量。
21　黒褐　　砂層土少量。

24ａトレンチ　Ｗ－１号溝跡層序説明
1　黒褐　細かい砂層土少量。



24bトレンチ

24ｂトレンチ　Ｄ－１号土坑層序説明
Ⅰ　表土
1　黒褐　砂層ブロック（φ10～20㎜）多量。

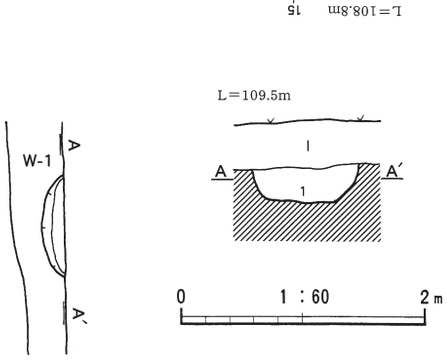


Fig.16　24ａ・24ｂトレンチ各遺構

24ｂトレンチ　西壁層序説明
Ⅰ　表土
Ⅱ　黒褐　　砂少量。
Ⅲ　褐　　小礫（10㎜程）含む細かい砂主体。
Ⅳ　にぶい黄褐　細かい砂主体。

24ｂトレンチ　W－２号溝跡層序説明
1　黒褐　細かい砂層土多量。
2　黒褐　細かい砂層土多量。
3　黒褐　白色粘土ブロック（φ10～20㎜）少量。
4　黒褐　白色粘土ブロック（φ10～20㎜）多量。
5　黒褐　細かい砂層土多量。

24ｂトレンチ　P－２号ピット層序説明
1　黒褐　As-B 極少量。

24ｂトレンチ　P－３号ピット層序説明
1　黒褐　As-B 極少量。

24ｂトレンチ　P－４号ピット層序説明
1　黒褐　As-B・砂層ブロック（φ10～20㎜）極少量。

24ｂトレンチ　P－５号ピット層序説明
1　暗褐　細かい砂層土多量。
2　黒褐　細かい砂層土極少量。

24ｂトレンチ　P－６号ピット層序説明
1　黒褐　As-B 極少量。

24ｂトレンチ　P－８セクション
1　黒褐　砂層ブロック（φ10㎜程）極少量。

24ｂトレンチ　W－１セクション
1　黒褐　As-B 極少量。

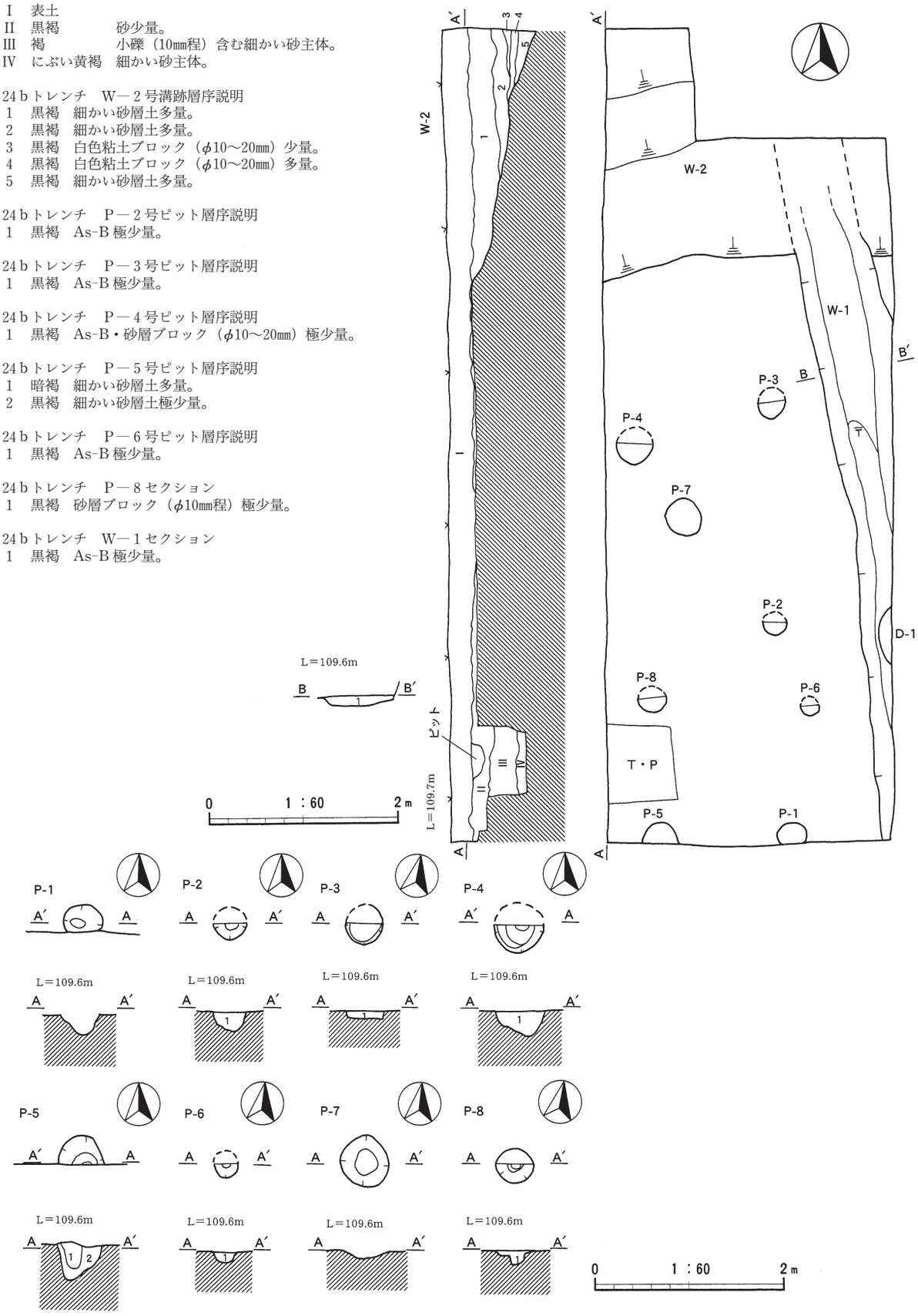
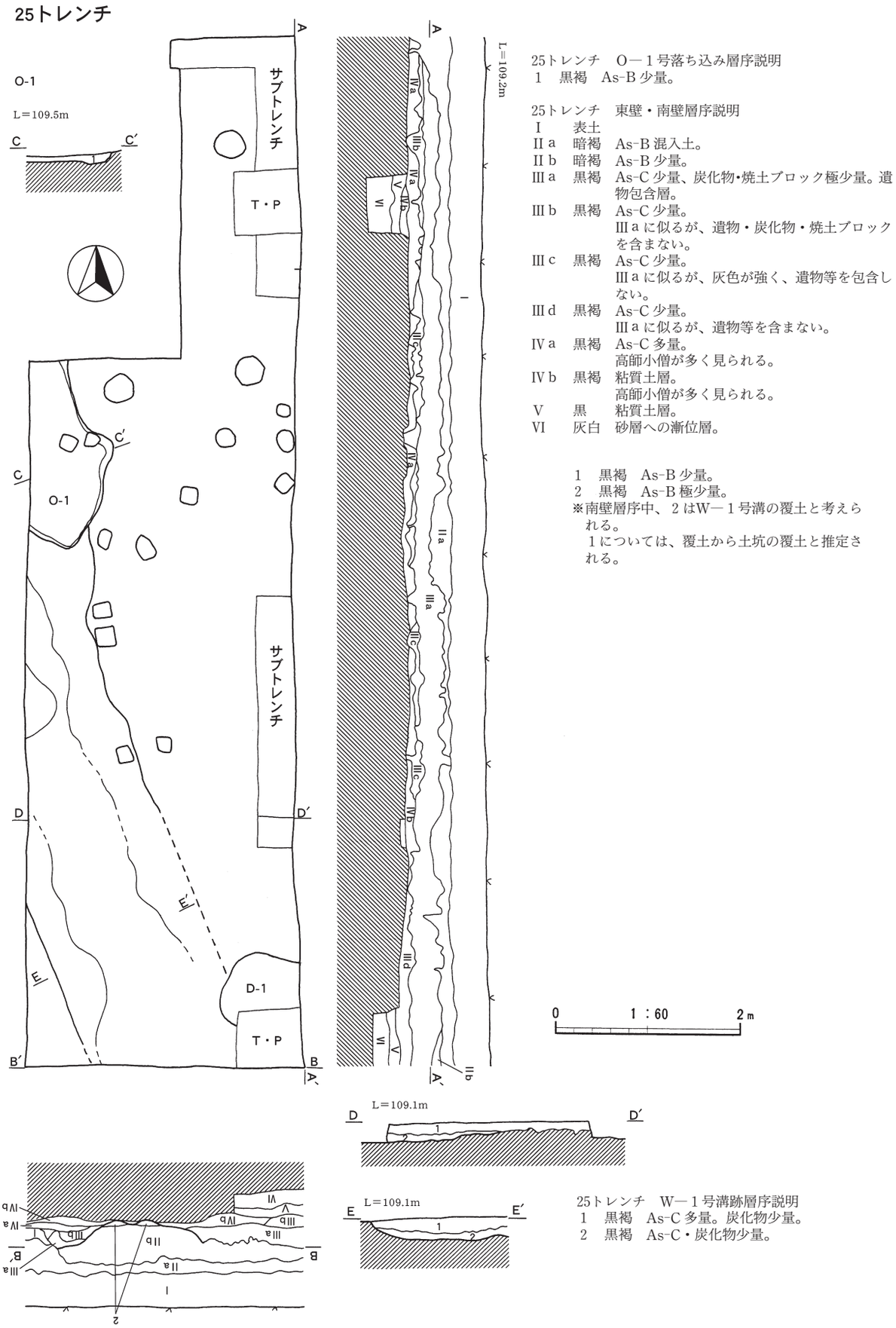


Fig.17　24ｂトレンチ各遺構



25トレンチ　O－1号落ち込み層序説明
1　黒褐　As-B少量。

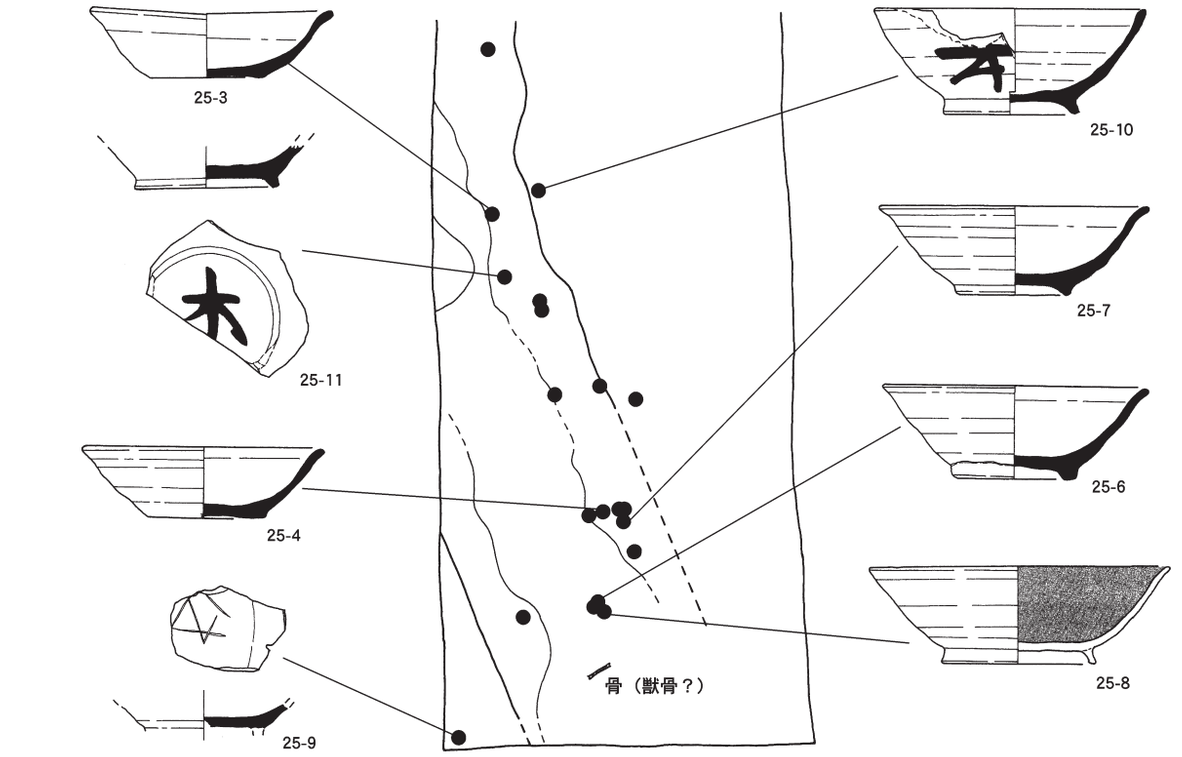
25トレンチ　東壁・南壁層序説明
Ⅰ　表土
Ⅱa　暗褐　As-B混入土。
Ⅱb　暗褐　As-B少量。
Ⅲa　黒褐　As-C少量、炭化物・焼土ブロック極少量。遺物包含層。
Ⅲb　黒褐　As-C少量。
Ⅲaに似るが、遺物・炭化物・焼土ブロックを含まない。
Ⅲc　黒褐　As-C少量。
Ⅲaに似るが、灰色が強く、遺物等を包含しない。
Ⅲd　黒褐　As-C少量。
Ⅲaに似るが、遺物等を含まない。
Ⅳa　黒褐　As-C多量。
高師小僧が多く見られる。
Ⅳb　黒褐　粘質土層。
高師小僧が多く見られる。
Ⅴ　黒　粘質土層。
Ⅵ　灰白　砂層への漸位層。

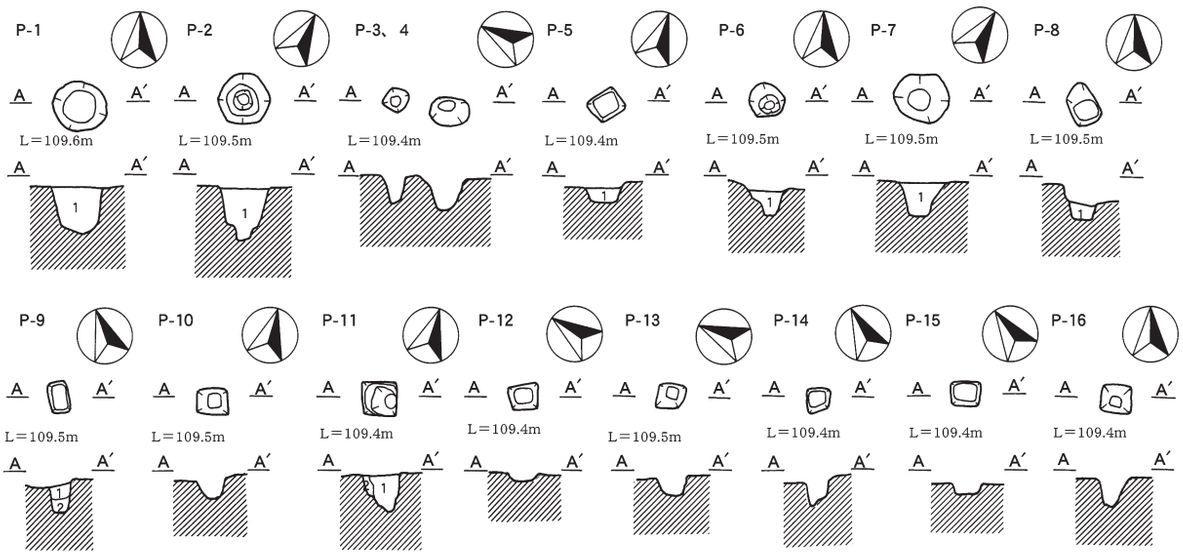
1　黒褐　As-B少量。
2　黒褐　As-B極少量。
※南壁層序中、2はW－1号溝の覆土と考えられる。
1については、覆土から土坑の覆土と推定される。

25トレンチ　W－1号溝跡層序説明
1　黒褐　As-C多量。炭化物少量。
2　黒褐　As-C・炭化物少量。

Fig.18　25トレンチ各遺構(1)

W-1号遺跡遺物出土状態





25トレンチ　P－1号ピット層序説明
1　黒褐　粘土少量、炭化物極少量。

25トレンチ　P－2号ピット層序説明
1　黒褐　As-B少量、炭化物極少量。

25トレンチ　P－5号ピット層序説明
1　暗褐　As-B少量。

25トレンチ　P－6号ピット層序説明
1　黒褐　As-B少量。

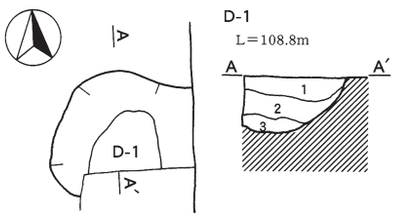
0　1：60　2m

25トレンチ　P－7号ピット層序説明
1　黒褐　As-B少量。

25トレンチ　P－8号ピット層序説明
1　暗褐　As-B少量。

25トレンチ　P－9号ピット層序説明
1　黒褐　As-B少量。
2　黒褐　As-B極少量。

25トレンチ　P－11号ピット層序説明
1　黒褐　As-B少量。
2　黒　　As-B少量。



25トレンチ　D－1号土坑層序説明
1　黒褐　細かい砂層土少量。
2　黒褐　砂層土多量。
3　黒　　砂層土極少量。

Fig.19　25トレンチ各遺構(2)

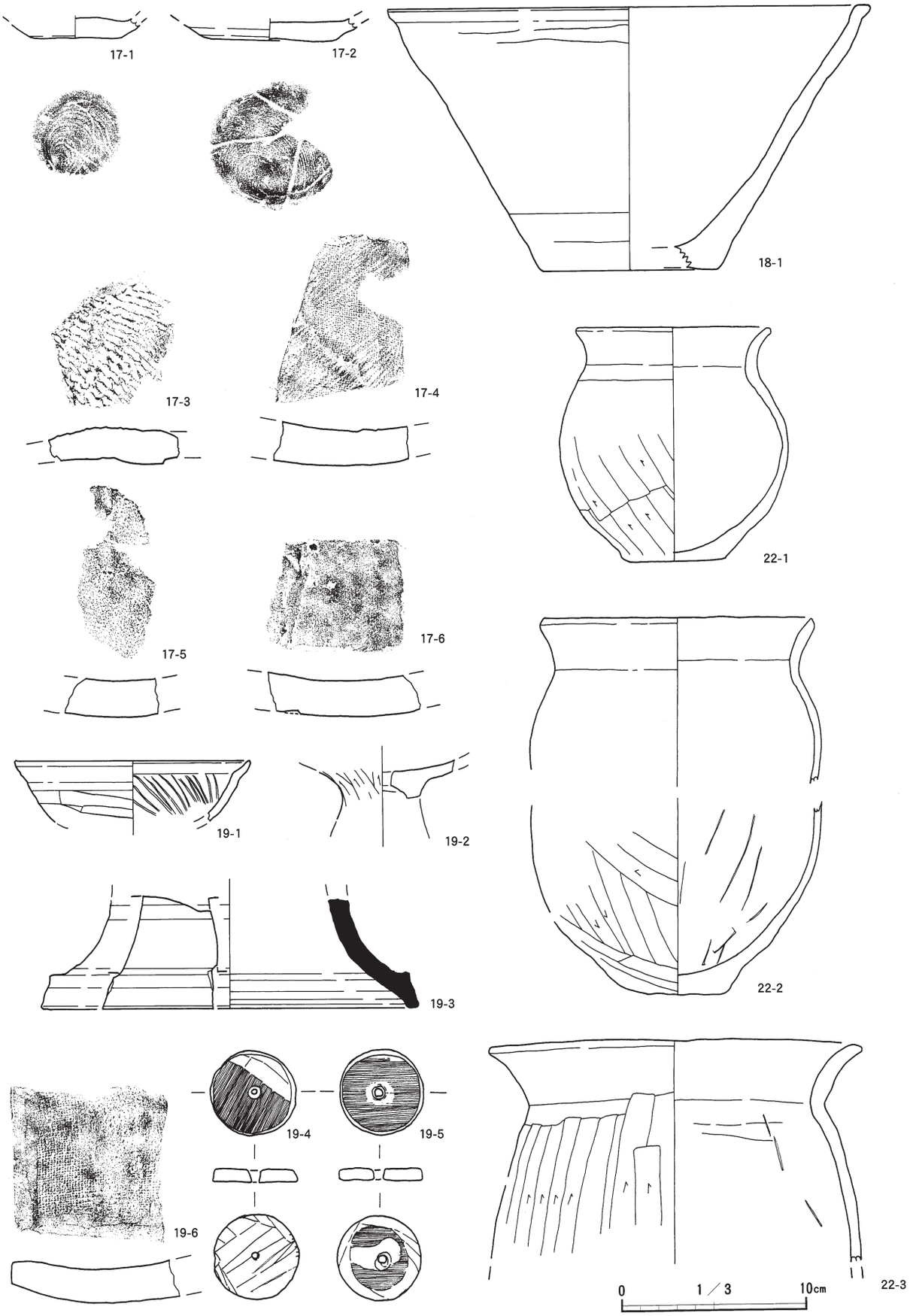


Fig.20　総社神社境内出土遺物（17、18、19、22トレンチ）

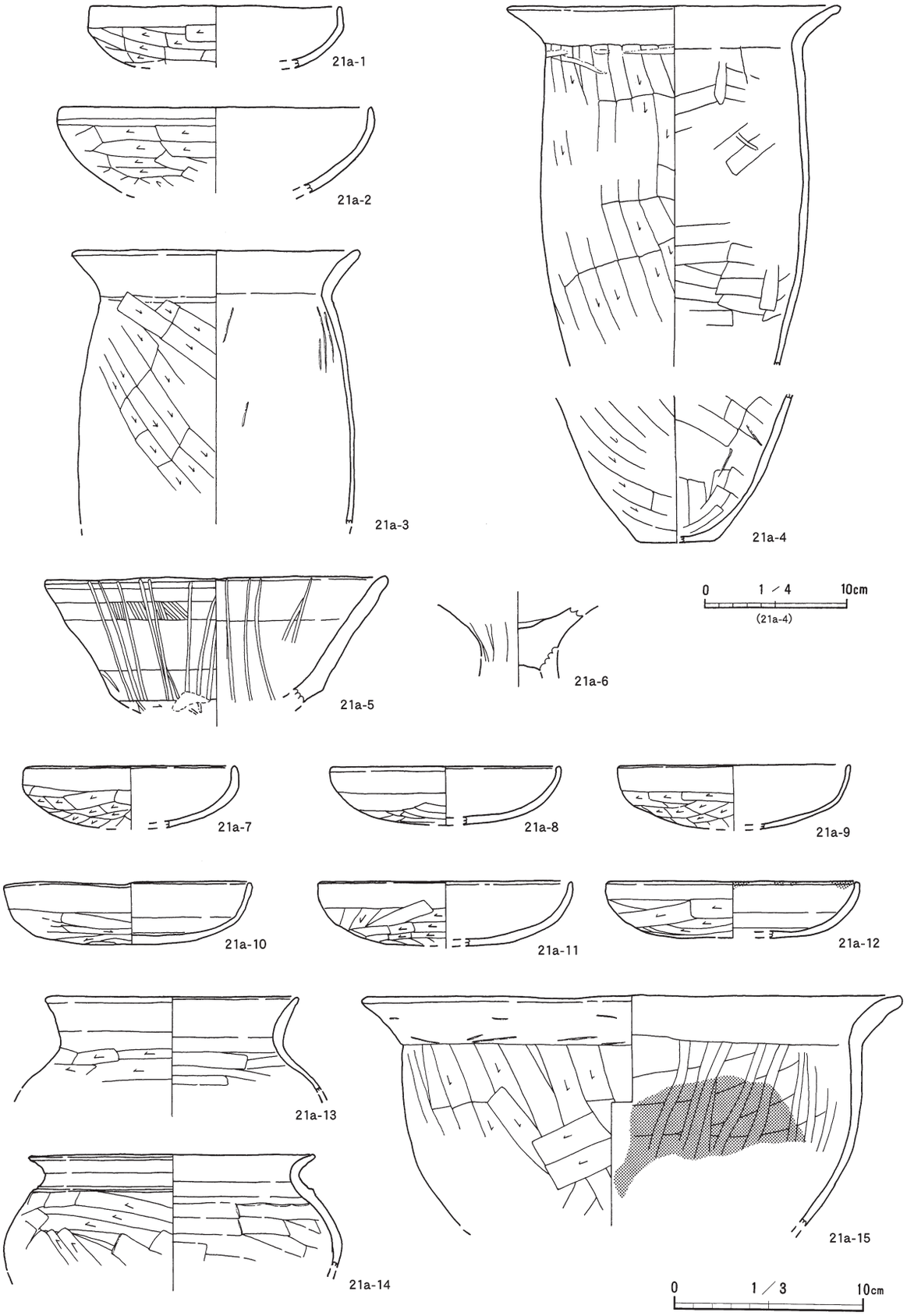


Fig.21　元総社小学校校庭出土遺物(1)（21ａトレンチ）

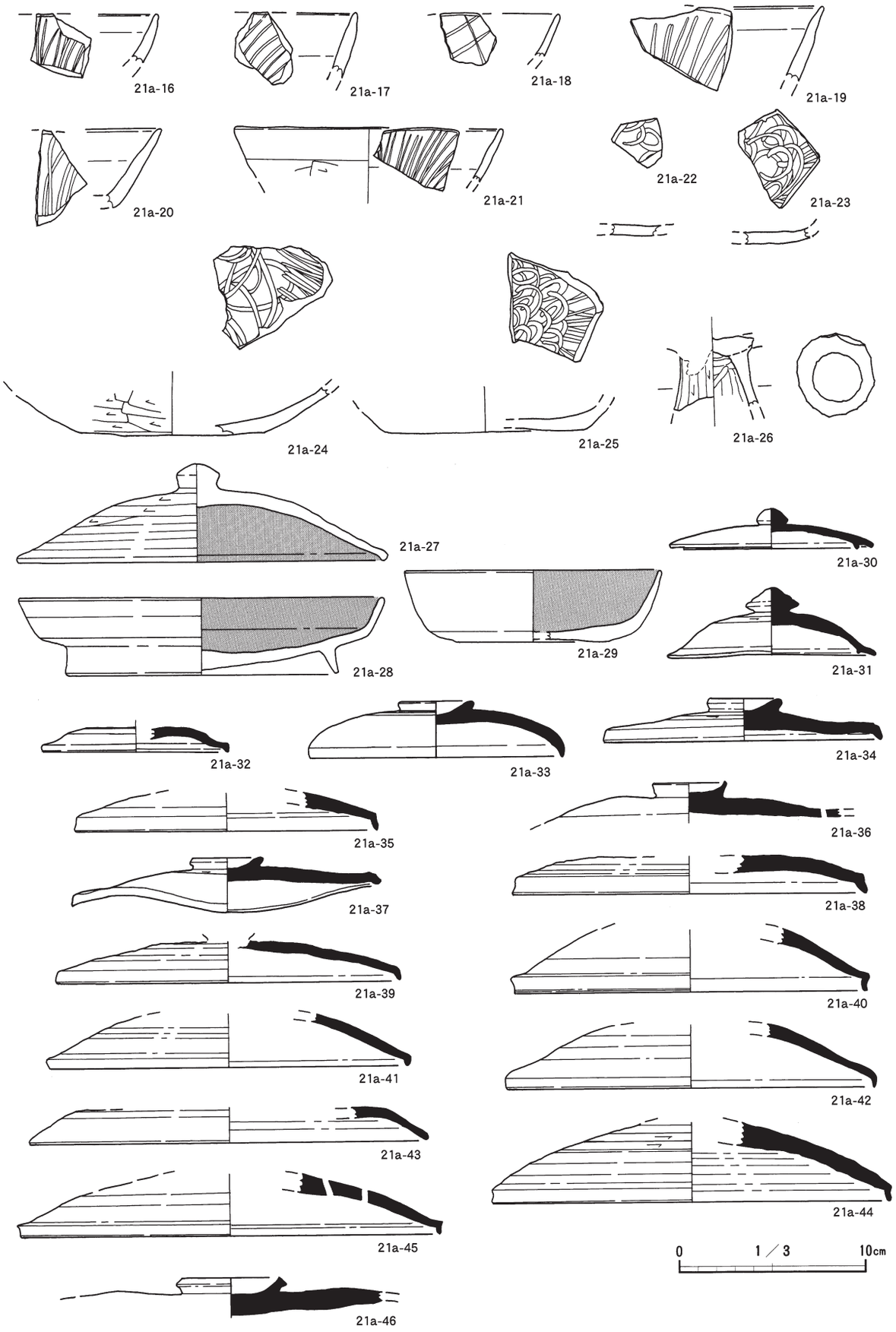


Fig.22　元総社小学校校庭出土遺物(2)（21ａトレンチ）

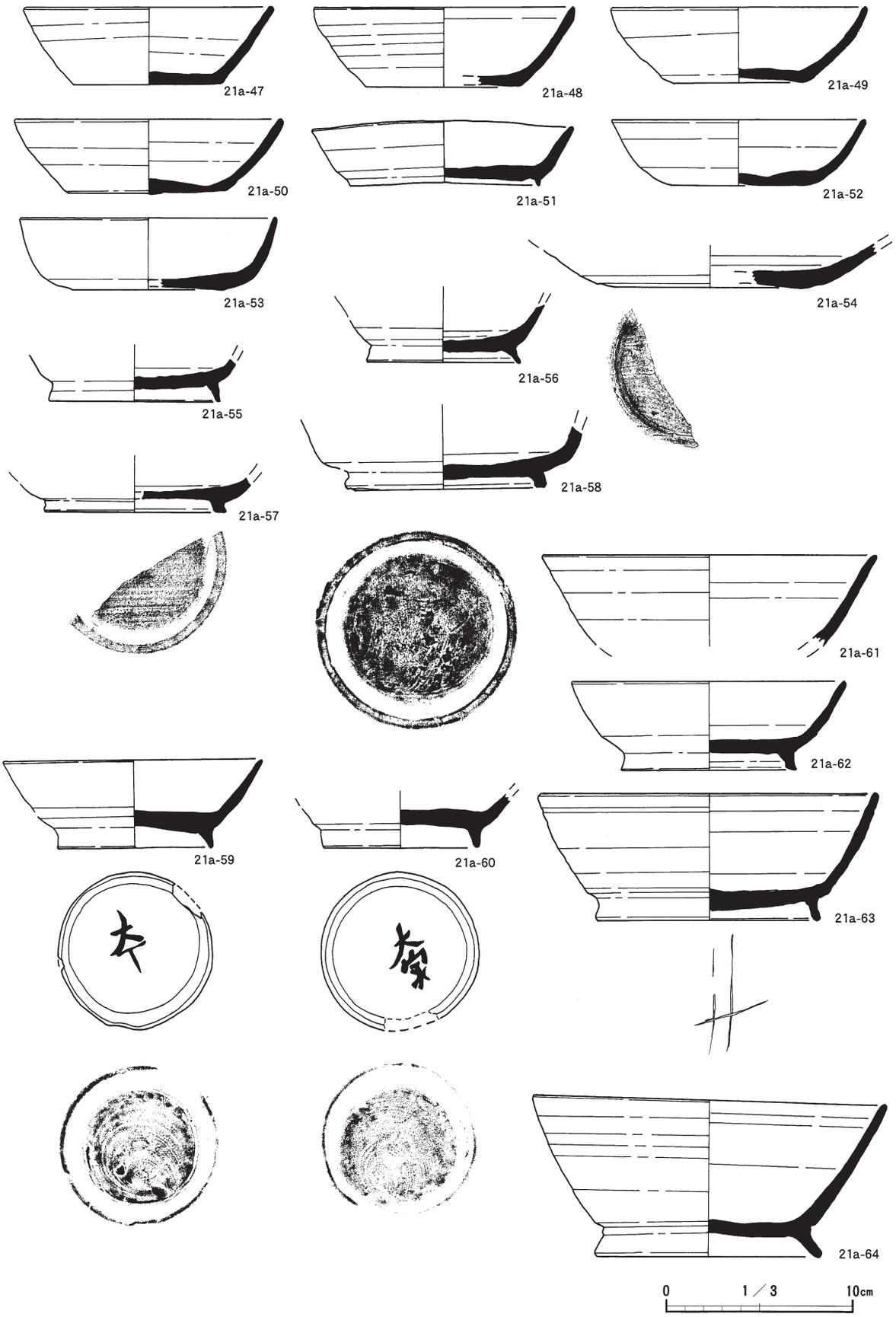


Fig.23　元総社小学校校庭出土遺物(3)（21ａトレンチ）

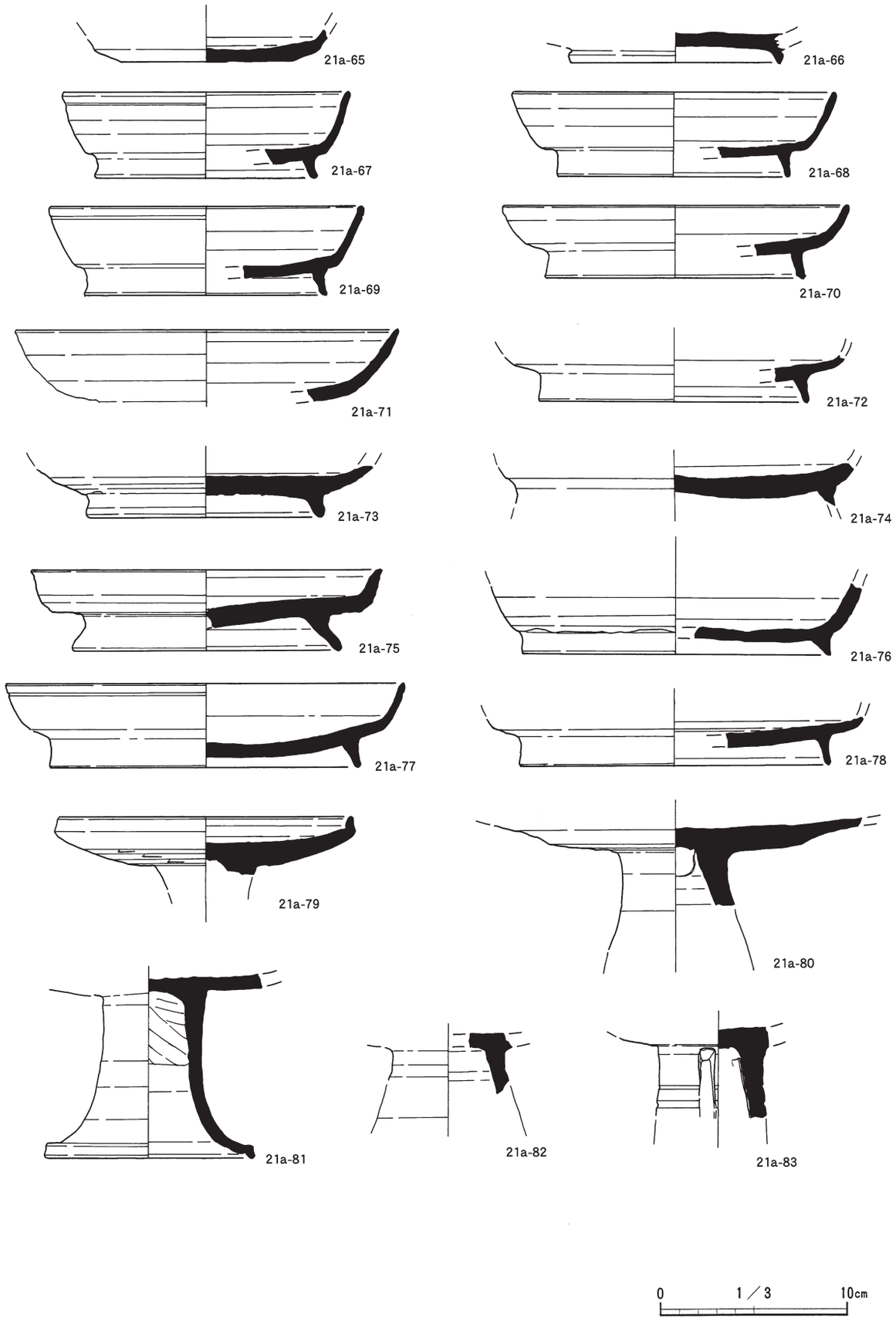


Fig.24　元総社小学校校庭出土遺物(4)（21ａトレンチ）

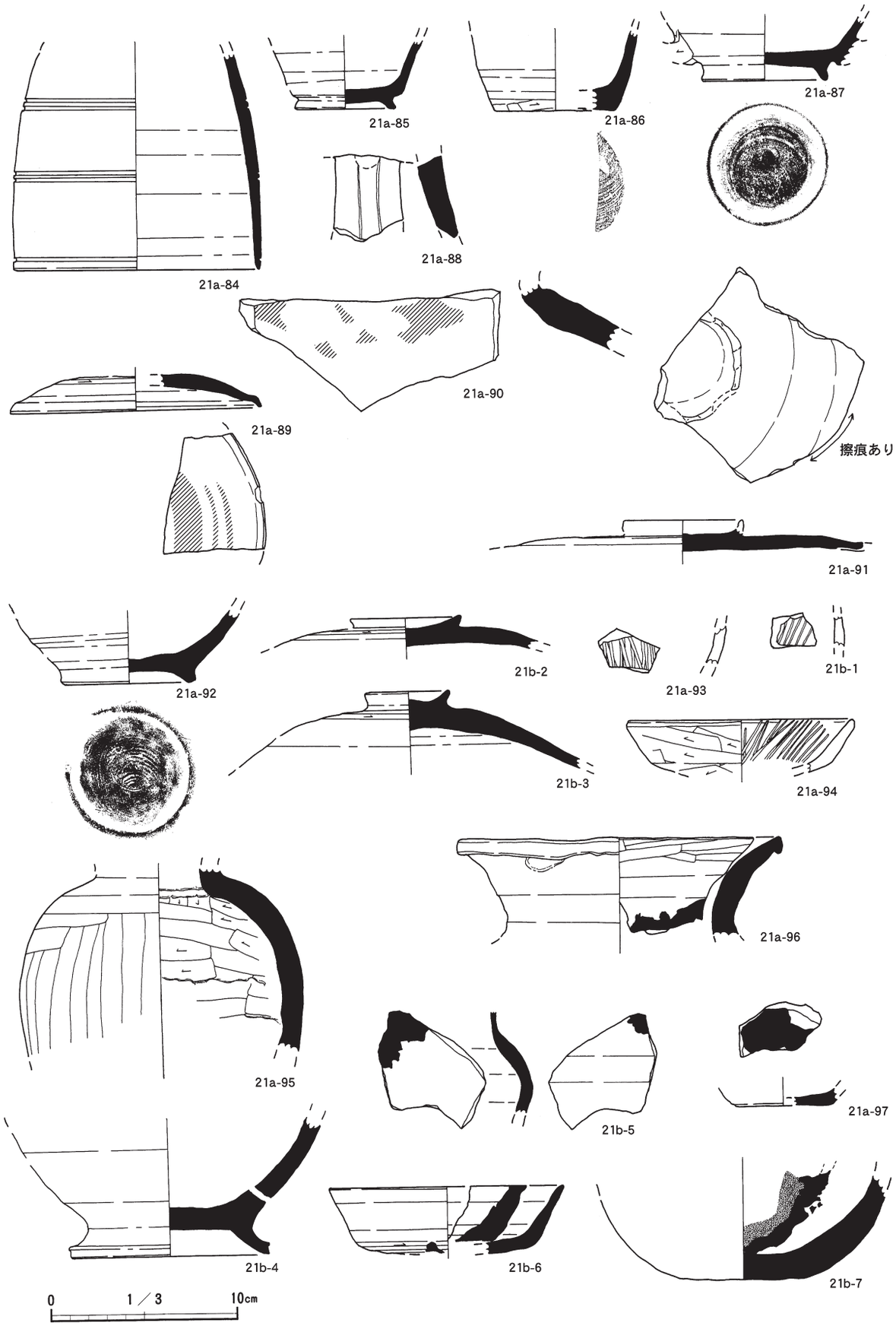


Fig.25　元総社小学校校庭出土遺物(5)（21ａ、21ｂトレンチ）

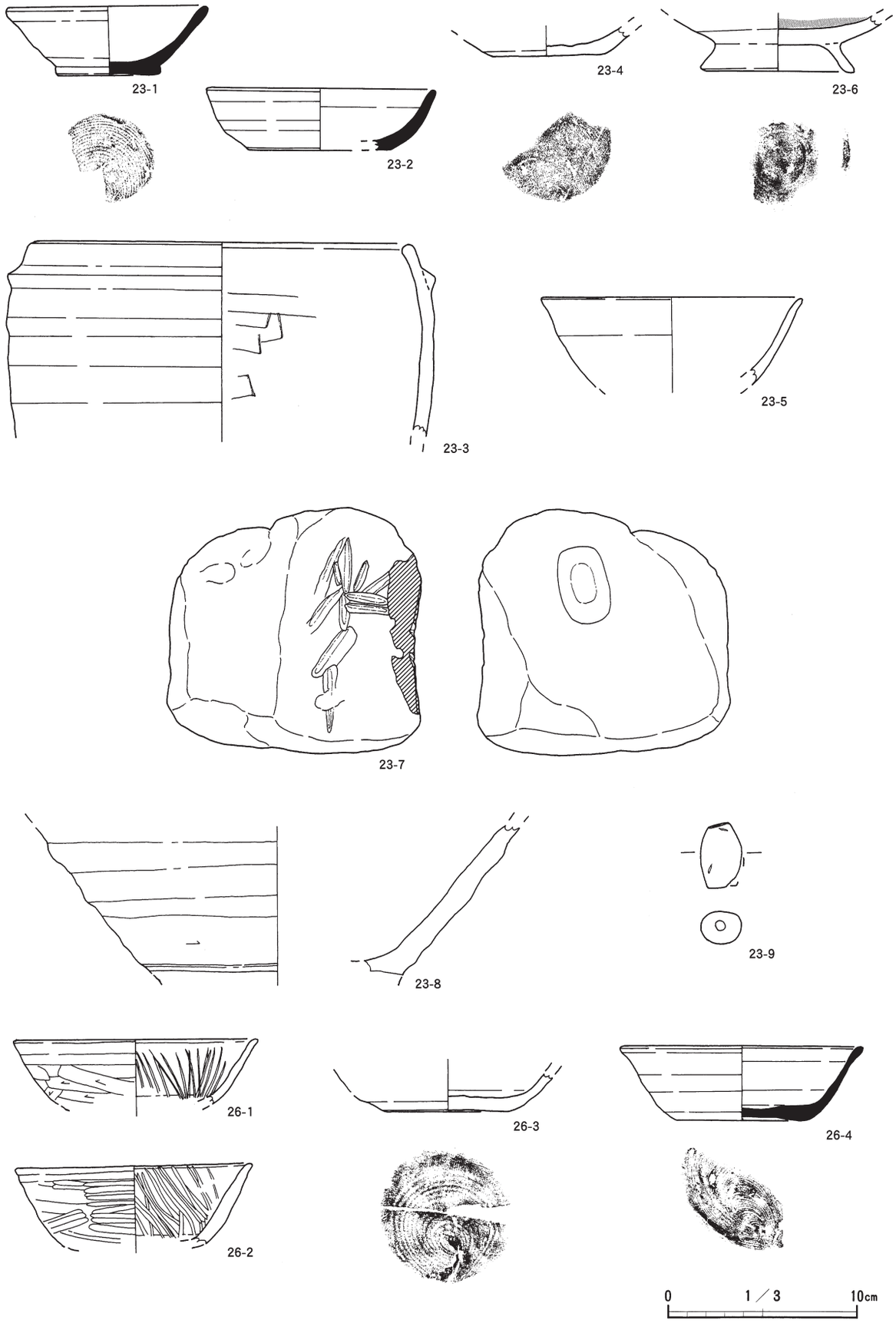


Fig.26　区画溝範囲確認調査の出土遺物(1)（23、26トレンチ）

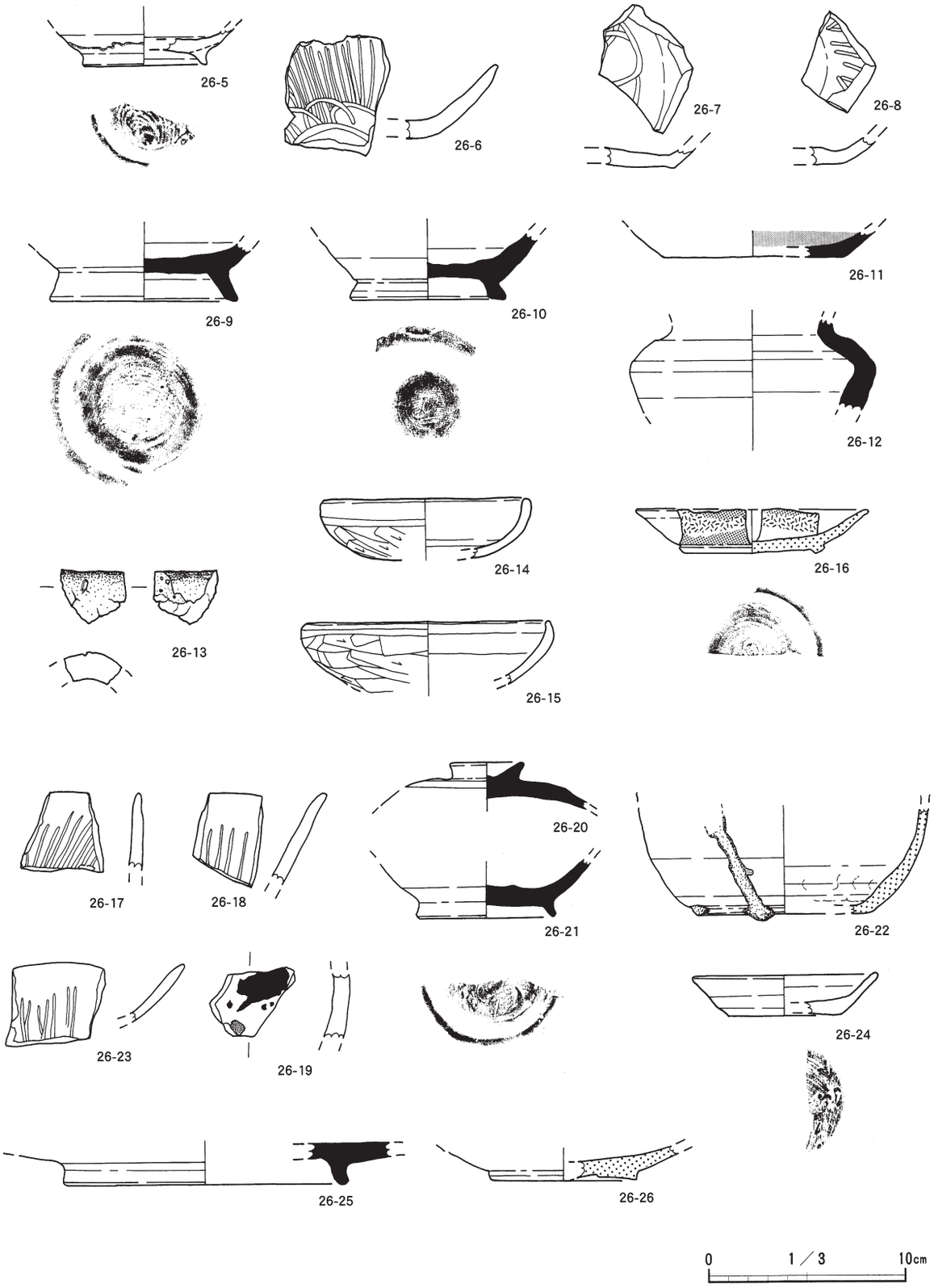


Fig.27　区画溝範囲確認調査の出土遺物(2)（26トレンチ）

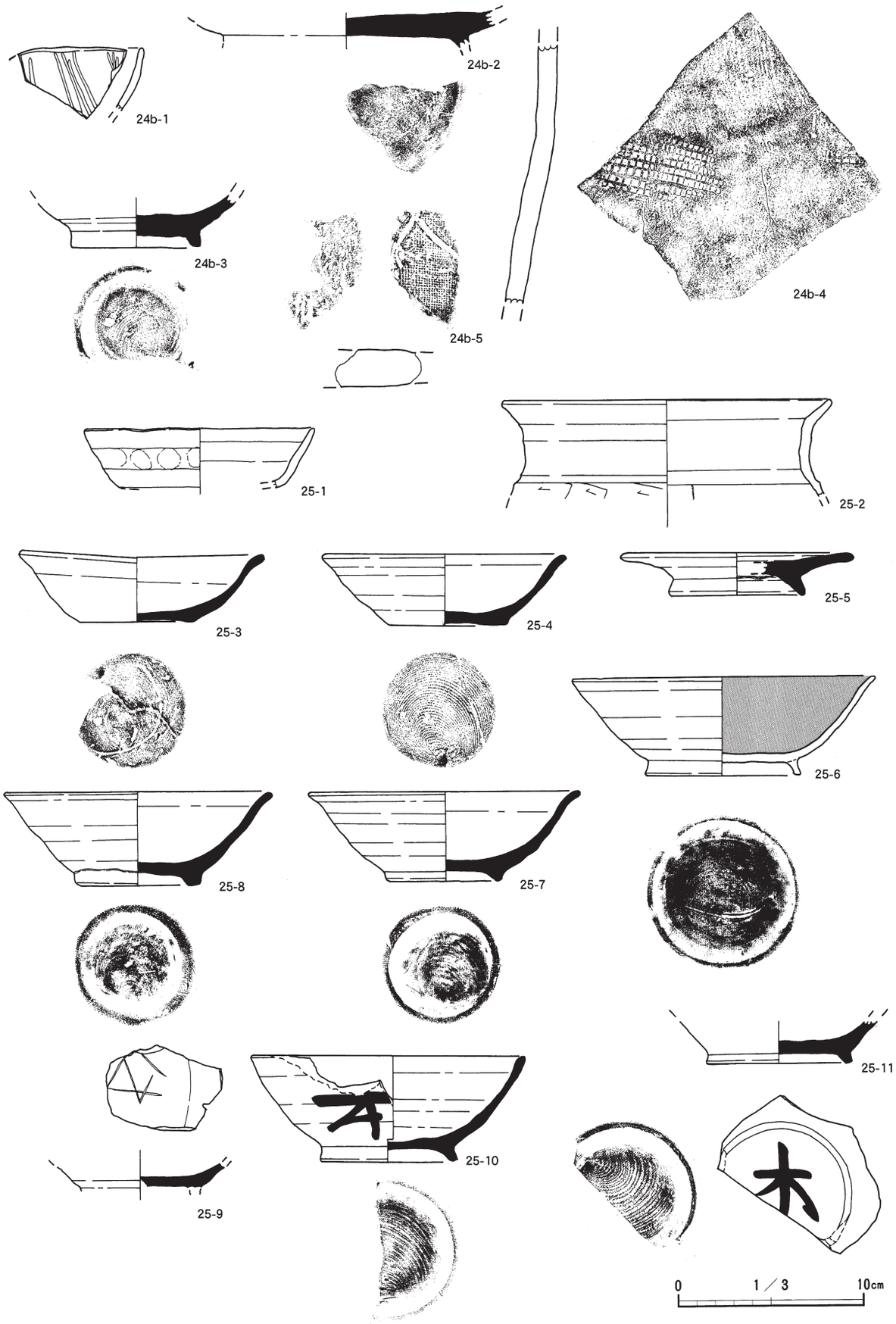


Fig.28　東山道国府ルート確認調査の出土遺物(1)（24ｂ、25トレンチ）

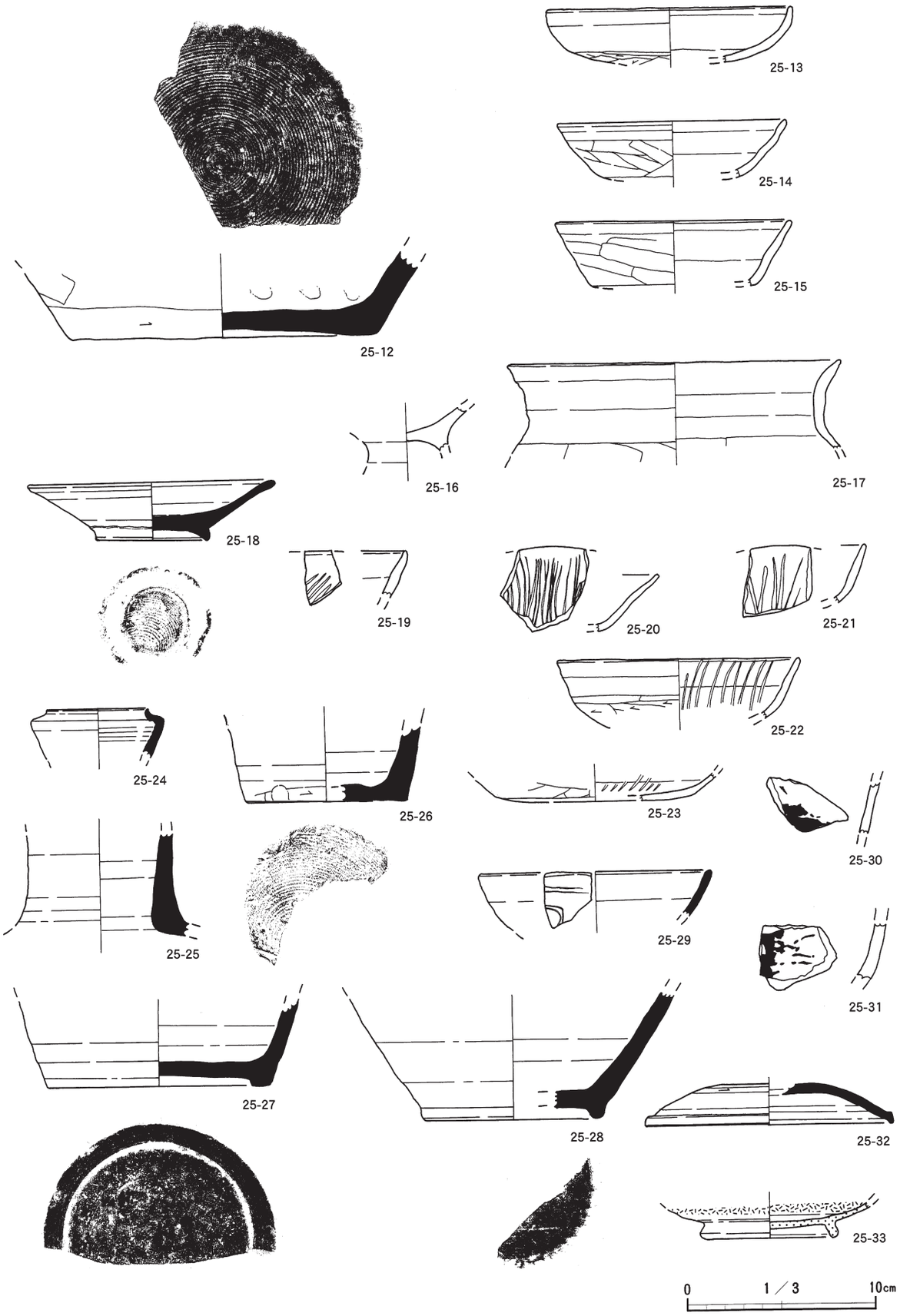


Fig.29　東山道国府ルート確認調査の出土遺物(2)（25トレンチ）

Tab. 3　土坑・ピット・落ち込み計測表

17トレンチ

遺構名	位　　置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備　考
D－1	X279・280 Y258	110.0	102.0	6.0	方形	土師器片、布目瓦片	
D－2	X279・280 Y259	98.0	80.0	18.0	方形	土師器片	

18トレンチ

遺構名	位　　置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備　考
D－1	X279　Y269	92.0	[60.0]	24.5	楕円形	なし	
D－2	X279　Y267・268	[217.0]	(74.0)	68.0	方形	内耳鍋破片、すり鉢破片	中世
P－1	X279　Y268	[49.0]	44.0	30.0	円形	なし	
P－2	X279　Y267	48.0	[45.0]	27.0	円形	なし	
P－3	X278　Y267	[74.0]	58.0	47.5	楕円形	砥石	近世
P－4	X279　Y268・269	[46.0]	45.0	59.0	円形	なし	
P－5	X278・279 Y269	[50.0]	48.0	45.0	円形	なし	
P－6	X278　Y267	34.0	29.0	65.0	楕円形	なし	
P－7	X278　Y267	27.0	25.0	23.0	円形	なし	
P－8	X278　Y267・268	31.0	[30.0]	44.0	円形	なし	
P－9	X278・279 Y269	29.0	25.0	44.0	円形	土師器片	
P－10	X279　Y267	25.0	22.0	31.0	方形	なし	
P－11	X279　Y267	28.0	24.0	40.0	方形	なし	
O－1	X279　Y267	(268.0)	131.0	41.5	不定	打製石斧、土師器片	攪乱か

21ａトレンチ

遺構名	位　　置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備　考
D－1	X289　Y307	98.0	[89.0]	31.0	楕円形	土師器片、須恵器片	
D－2	X289　Y306	61.0	[56.0]	25.0	楕円形	土師器片	
P－1	X289　Y306	30.0	[26.0]	27.0	円形	なし	W－1号溝跡より古いか
P－2	X289　Y307	50.0	[35.0]	34.5	楕円形	なし	W－1号溝跡より古いか
P－3	X289　Y307	35.0	[33.0]	31.0	円形	なし	W－1号溝跡より古いか
P－4	X289　Y307	[25.0]	19.0	30.0	楕円形	なし	W－1号溝跡より古いか

22トレンチ

遺構名	位　　置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備　考
O－1	X282　Y259・260	254.0	83.0	82.0	不定	軒丸瓦片、土師器片	攪乱か

23トレンチ

遺構名	位　　置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備　考
D－1	X301・302 Y364	102.0	70.0	16.5	方形	なし	
D－2	X302　Y367	145.0	118.0	11.0	楕円形	土師器片	
D－3	X302　Y367	76.0	74.0	36.0	円形	土師器片	
D－4	X302　Y367	(77.0)	71.0	38.0	方形	土師器片、須恵器片	古代？
D－5	X301　Y367	82.0	(45.0)	29.5	円形	土師器片	
P－1	X301　Y364	64.0	53.0	8.0	楕円形	なし	
P－2	X302　Y366	33.0	30.0	40.0	円形	なし	
P－3	X302　Y366	54.0	48.0	19.0	円形	なし	
P－4	X302　Y366	55.0	(40.0)	20.0	楕円形	なし	
P－5	X302　Y366	51.0	(46.0)	16.0	円形	なし	
P－6	X302　Y366	63.0	54.0	16.0	楕円形	なし	
P－7	X302　Y366	36.0	23.0	35.0	楕円形	なし	
P－8	X301・302 Y366	18.0	15.0	9.0	方形	なし	
P－9	X301・302 Y366	19.0	18.0	20.0	方形	なし	
P－10	X302　Y366	58.0	48.0	11.0	円形	なし	
P－11	X302　Y366	34.0	30.0	37.0	円形	土師器片	
P－12	X302　Y366	32.0	32.0	38.0	円形	土師器片	
P－13	X301　Y366	13.0	8.0	32.0	方形	なし	
P－14	X301　Y367	21.0	19.0	17.0	円形	なし	

24 b トレンチ

遺構名	位　　置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備　考
D－1	X259　　Y406	(84.0)	(17.0)	13.5	楕円形	なし	
P－1	X259　　Y407	43.0	(31.0)	21.0	楕円形	土師器片	
P－2	X259　　Y406	[35.0]	35.0	20.0	円形	土師器片	
P－3	X259　　Y405	[43.0]	39.0	9.0	円形	土師器片	
P－4	X259　　Y405	[53.0]	53.0	25.0	円形	土師器片	
P－5	X259　　Y407	48.0	(30.0)	17.0	楕円形	土師器片	
P－6	X259　　Y406	[30.0]	27.0	12.0	円形	土師器片	
P－7	X259　　Y406	55.0	51.0	8.0	円形	なし	
P－8	X259　　Y406	40.0	[38.0]	13.0	円形	なし	

25トレンチ

遺構名	位　　置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備　考
D－1	X291　　Y401	(114.0)	(107.0)	45.0	円形	土師器（石田川式）片、須恵器片	
P－1	X291　　Y398	45.0	40.0	36.0	楕円形	土師器片、須恵器片	
P－2	X291　　Y399	42.0	40.0	49.0	楕円形	なし	
P－3	X291　　Y399	19.0	19.0	21.0	円形	なし	
P－4	X291　　Y399	32.0	24.0	22.0	楕円形	なし	
P－5	X291　　Y399	27.0	22.0	12.0	方形	なし	
P－6	X291　　Y399	29.0	29.0	25.0	円形	なし	
P－7	X290　　Y399	45.0	40.0	29.0	楕円形	土師器片	
P－8	X290　　Y400	36.0	26.0	25.0	楕円形	なし	
P－9	X290　　Y400	27.0	18.0	26.5	方形	なし	
P－10	X290　　Y400	26.0	22.0	17.0	方形	なし	
P－11	X290　　Y400	29.0	28.0	34.0	方形	なし	
P－12	X290　　Y400	25.0	22.0	8.5	方形	なし	
P－13	X290・291 Y400	23.0	22.0	17.0	方形	なし	
P－14	X290　　Y399	21.0	20.0	15.0	方形	なし	
P－15	X290　　Y399	25.0	23.0	10.0	方形	なし	
P－16	X291　　Y399	26.0	25.0	22.0	方形	土師器片、須恵器片	
O－1	X290　　Y399・400	275.0	138.0	16.0	不定	なし	

26トレンチ

遺構名	位　　置	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	形状	主な出土遺物	備　考
D－1	X200　　Y356	72.0	(50.0)	24.0	楕円形	須恵器片、陶磁器片	中世か
D－2	X197　　Y356	113.0	(50.0)	29.5	楕円形	土師器片、須恵器片	8～9世紀
D－3	X199　　Y356	86.0	80.0	14.0	円形	土師器片、須恵器片	
D－4	X199　　Y356	92.0	41.0	12.5	楕円形	なし	
D－5	X200・201 Y356	63.0	55.0	23.0	楕円形	拳大の礫が入る	中世以後
D－6	X199・200 Y356	258.0	(104.0)	72.0	楕円形	なし	
O－1	X198　　Y356	(396.0)	227.0	21.0	不定	土師器片、須恵器片、灰釉陶器片など	

Tab. 4　遺物観察表

17トレンチ

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径　②器高 ③底径　④つまみ径	①胎土　②焼成 ③色調　④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
17-1	W－1 覆土	土師質 坏	①　－　②(1.1) ③　4.8	①細粒　②良好 ③橙　④底のみ	轆轤による整形。底部は回転糸切り。内面の底部中心に小さなくぼみあり。		
17-2	W－1 覆土	土師質 坏	①　－　②(1.2) ③　6.8	①細粒　②良好 ③橙　④底のみ	轆轤による整形。底部は回転糸切り。		
17-3	W－1 覆土	瓦 平瓦	長(7.5) 厚　1.8	①粗粒含　②良好 ③灰　④破片	凹面に布目あり。凸面に縄目文圧痕あり。		
17-4	W－1 覆土	瓦 平瓦	長(9.8) 厚　2.0	①細粒　②良好 ③にぶい黄橙　④破片	凹面に布目あり。凸面は箆撫でによる調整。		
17-5	W－1 覆土	瓦 平瓦	長(10.0) 厚　2.0	①細粒　②良好 ③褐灰　④破片	一枚作り。凹面・凸面ともに調整痕は不鮮明であるが、両面に細かな砂が付着。		
17-6	W－1 覆土	瓦 平瓦	長(6.6) 厚　2.0	①細粒　②良好 ③灰白　④破片	一枚作り。凹面は撫でによる調整か。凸面は不鮮明であるが、凸面のみに細かな砂が付着。		

18トレンチ

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径　②器高 ③底径　④つまみ径	①胎土　②焼成 ③色調　④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
18-1	D－2 覆土	土師質 擂鉢	①[25.8] ② 14.1 ③[9.6]	①細粒　②良好 ③橙　④1/4	外面は横方向の撫でによる整形。内面は横方向の撫でによる整形後に、半截竹管状の工具で中心から沈線が放射状に広がる。		

19トレンチ

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径　②器高 ③底径　④つまみ径	①胎土　②焼成 ③色調　④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
19-1	埋没谷 覆土	土師器 坏	①[12.6] ②(3.3) ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	外面は体部から底部にかけて箆削りで丸底に整形し、口縁部は横撫で。内面は撫でで整形し、暗文状の磨きをもつ。		
19-2	埋没谷 覆土	土師器 高坏	①(7.5) ②(2.6) ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	高坏の脚基部のみ。脚部の断面は多角形。脚部・坏部ともに縦方向の箆削りによる整形。		
19-3	埋没谷 覆土	須恵器 円面硯	①　－　②(5.7) ③[20.2]	①細粒　②良好 ③灰　④脚部	脚部の破片。轆轤整形で、接地面から一段設けて反りながら立ち上る。上段に透かしをもつ。		
19-4	埋没谷 覆土	土製品 紡錘車	直径　4.5 厚　0.8	①細粒　②良好 ③にぶい褐　④完形	上面に布目状圧痕あり。下面は撫でによる整形。		
19-5	埋没谷 覆土	土製品 紡錘車	直径　4.6 厚さ　0.7	①細粒　②良好 ③灰黄褐　④完形	上面・下面に布目状圧痕あり。下面は器体縁辺のみ撫でにより整形。		
19-6	埋没谷 覆土	瓦 平瓦	長(9.9) 厚　1.9	①細粒　②良好 ③灰　④破片	凹面に布目あり。凸面は撫でによる整形。		

21ａトレンチ

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径　②器高 ③底径　④つまみ径	①胎土　②焼成 ③色調　④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
21a-1	H－1 覆土	土師器 坏	①[13.2] ②(3.1) ③	①細粒　②良好 ③にぶい褐　④1/8	体部外面は箆削り。内面と口縁部は撫でにより整形。		
21a-2	H－1 覆土	土師器 坏	①[8.0] ②(4.4) ③	①細粒　②良好 ③明赤褐　④1/8	体部外面は箆削り。内面と口縁部は撫でにより整形。		
21a-3	H－1 覆土	土師器 長胴甕	①[20.0] ②(19.0) ③　－	①細粒　②良好 ③明赤褐　④1/8	胴部外面は斜め方向の箆削り、同内面は横方向の箆による撫で、口縁部は撫でによる整形。	12	
21a-4	H－1 覆土	土師器 長胴甕	①[23.0] ②　－ ③[5.5]	①細粒　②良好 ③にぶい橙　④1/4	胴部外面は斜め方向の箆削り、同内面は横方向の箆による撫で、口縁部は撫でによる整形。	11	
21a-5	W－1 覆土	土師器 高坏	①[16.4] ②(7.1) ③　－	①細粒　②良好 ③明赤褐　④坏部破片	内面は横撫でによる整形の後に放射状に暗文のような磨き。外面は箆削りで整形と横方向の撫でで整形の後に放射状の暗文状の磨きを施す。		
21a-6	W－1 覆土	土師器 高坏	①　－　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③明赤褐　④破片	高坏の脚基部付近の破片。外面は縦方向の撫で、内面は箆撫でにより整形。		
21a-7	W－1 覆土	土師器 坏	①[11.0] ②(3.2) ③	①細粒　②良好 ③橙　④1/4	体部外面は箆削り、内面と口縁部は撫でにより整形。		
21a-8	W－1 覆土	土師器 坏	①[12.0] ②　3.0 ③	①細粒　②良好 ③橙　④1/4	体部外面は箆削り、内面と口縁部は撫でにより整形。		
21a-9	W－1 覆土	土師器 坏	①[12.0] ②　3.4 ③	①細粒　②良好 ③橙　④2/5	体部外面は箆削り、内面と口縁部は撫でにより整形。		
21a-10	W－1 覆土	土師器 坏	①[12.7] ②　3.2 ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④1/2	体部外面は箆削り、内面と口縁部は撫でにより整形。		
21a-11	W－1 覆土	土師器 坏	①[13.2] ②(3.5) ③	①細粒　②良好 ③橙　④2/5	体部外面は箆削り、内面と口縁部は撫でにより整形。		
21a-12	W－1 覆土	土師器 坏	①[12.8] ②(2.9) ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④1/4	体部外面は箆削り、内面と口縁部は撫でにより整形。口唇部に煤が点々と付着。		
21a-13	W－1 覆土	土師器 甕	①[13.0] ②(4.8) ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	胴部外面は箆削り、口縁部は撫で。内面は箆撫でにより整形。		
21a-14	W－1 覆土	土師器 甕	①[14.7] ②(5.9) ③　－	①細粒　②良好 ③にぶい赤褐　④破片	胴部外面は横・斜めの箆削り、口縁部は横方向の撫で。内部は箆撫でにより整形。		
21a-15	W－1 覆土	土師器 鉢	①[28.0] ②(11.9) ③	①細粒(粗含)②良好 ③橙　④口縁から体部	胴部外面は縦方向の箆削り、口縁部は横方向の撫で。内面は横方向の箆撫での後に縦方向の撫でにより整形。胴部内面に赤黒く変色した部分（被熱？）と漆状の付着物あり。		
21a-16	W－1 覆土	土師器 坏	①　－　②(2.6) ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	口縁部の破片。外面は箆削りで口縁部は横方向の撫でで整形。内面は撫でによる整形の後に放射状の暗紋を施す。		
21a-17	W－1 覆土	土師器 坏	①　－　②(3.4) ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	口縁部の破片。外面は箆削りで口縁部は横方向の撫でで整形。内面は撫でによる整形の後に放射状の暗紋を施す。		
21a-18	W－1 覆土	土師器 坏	①　－　②(2.3) ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	口縁部の破片。外面は箆削りで口縁部は横方向の撫でで整形。内面は撫でによる整形の後に放射状の暗紋を施す。		
21a-19	W－1 覆土	土師器 坏	①　－　②(4.0) ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	口縁部の破片。外面は箆削りで口縁部は横方向の撫でで整形。内面は撫でによる整形の後に放射状の暗紋を施す。		
21a-20	W－1 覆土	土師器 坏	①　－　②(4.1) ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	口縁部の破片。外面は箆削りで口縁部は横方向の撫でで整形。内面は撫でによる整形の後に放射状の暗紋を施す。		

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径　②器高 ③底径　④つまみ径	①胎土　②焼成 ③色調　④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録 番号	備考
21a-21	W－1 覆土	土師器 坏	①[14.2] ②(2.8) ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	口縁部の破片。外面は篦削りで口縁部は横方向の撫でで整形。内面は撫でによる整形の後に放射状の暗紋を施す。		
21a-22	W－1 覆土	土師器 坏	①　－　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	底部の破片。外面は篦削りで整形。内面は撫でによる整形の後に螺旋の暗紋を施す。		
21a-23	W－1 覆土	土師器 坏	①　－　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	底部から体部立ち上がりにかけての破片。外面は篦削りで整形。内面は撫でによる整形の後に放射状・螺旋状の暗紋を施す。		
21a-24	W－1 覆土	土師器 坏	①　－　②(2.2) ③[9.8]	①細粒　②良好 ③橙　④破片	底部から体部立ち上がりの破片。外面は篦削り。内面は撫でによる整形の後に放射状・螺旋状の暗紋を施す。		
21a-25	W－1 覆土	土師器 坏	①　－　②(1.2) ③[10.6]	①細粒　②良好 ③橙　④破片	底部から体部立ち上がりの破片。外面は篦削り。内面は撫でによる整形の後に放射状・螺旋状の暗紋を施す。		
21a-26	W－1 覆土	土師器 高坏	①　－　②(3.0) ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	脚基部の破片。脚部外面は縦方向の篦削り。内面は横方向の篦削り。坏部内面は撫でにより整形。		
21a-27	W－1 底部	黒色土器 蓋	①[19.7] ②　5.2 ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④ほぼ完形	つまみは疑宝珠形。外面は轆轤整形の後に天井部のみ回転篦削り。内面は整形、磨きの後に黒色処理。カエリは口縁部を丸く折り曲げる。	34 36	
21a-28	W－1 底部	黒色土器 盤	① 19.4　②　4.1 ③ 14.6	①細粒　②良好 ③にぶい橙　④完形	体部は轆轤整形。底部は回転篦削りで整形後に高台を接着する。内面は整形後、磨いた後に黒色処理。	32	
21a-29	W－1 覆土	黒色土器 坏	①[12.2] ②　3.2 ③　7.0	①細粒　②良好 ③にぶい黄橙　④1/3	体部は轆轤整形。底部は回転篦削り。内面は整形後、磨いた後に黒色処理。	64	
21a-30	W－1 覆土	須恵器 蓋	①[10.8] ②　2.1 ④ 1.7	①細粒　②良好 ③灰白　④4/5	つまみは戯宝珠形。天井部は轆轤整形の後、外面のみ篦削りで整形。内面は口縁部に貼り付けによるカエリを持つ。		
21a-31	W－1 底部	須恵器 蓋	①[11.0] ②　3.6 ④ 12.8	①細粒　②良好 ③褐灰　④2/3	つまみは戯宝珠形。天井部は外面・内面ともに轆轤整形。口縁部につまみ出しによるカエリを持つ。	18	
21a-32	W－1 覆土	須恵器 蓋	①[9.9] ②(1.3) ④　－	①細粒　②良好 ③灰　④1/4	天井部は轆轤整形。口縁部は下に折り曲げてカエリを持たない。		
21a-33	W－1 覆土	須恵器 蓋	①[13.4] ②　3.0 ④　4.0	①細粒　②良好 ③灰　④1/3	摘みは扁平で中央が窪む。天井部は轆轤整形の後、中ほどを回転篦削り。口縁部は緩やかに折れ曲がり、轆轤成形による小さいカエリを持つ。	42	
21a-34	W－1 底部	須恵器 蓋	① 14.7　②　2.3 ④　－	①細粒　②良好 ③黄灰　④3/5	つまみは扁平で中央が窪む。天井部は轆轤整形の後、外面中ほどを回転篦削り。口縁部は下に折り曲がりカエリを持たない。	2	
21a-35	W－1 覆土	須恵器 蓋	①[16.0] ②(2.0) ④　－	①細粒　②良好 ③黄灰　④破片	口縁部付近の破片。天井部は轆轤整形。口縁部は下に折り曲がりカエリを持たない。		
21a-36	W－1 底部	須恵器 蓋	①　－　②(2.1) ④　3.9	①細粒　②良好 ③灰　④2/3	つまみは扁平で端が立つ。天井部は轆轤整形。	12	
21a-37	W－1 底部	須恵器 蓋	①16.4　②　2.9 ④　3.9	①細粒　②良好 ③灰白　④3/4	つまみは扁平で中央が窪む。天井部は轆轤整形。口縁部は端に沈線を１条施し、その先でカエリを持たずに下へ折り曲がる。	23	
21a-38	W－1 覆土	須恵器 蓋	①[18.8] ②(2.0) ④　－	①細粒　②良好 ③黄灰　④1/4弱	天井部は轆轤整形の後に中ほどを回転篦削り。口縁部は下に折れ曲がりカエリを持たない。		
21a-39	W－1 覆土	須恵器 蓋	①[18.4] ②(2.2) ③　－	①細粒(中粒含) ②良好　③灰　④1/3	天井部は轆轤整形。口縁部は下へ折り曲がりカエリを持たない。		
21a-40	W－1 覆土	須恵器 蓋	①[18.8] ②(3.3) ③　－	①細粒　②良好 ③灰　④1/5	天井部は轆轤整形で、外面中ほどを回転篦削り。口縁部はやや外反させながら下に折り曲がり、カエリを持たない。		
21a-41	W－1 底部	須恵器 蓋	①[19.0] ②(2.8) ③　－	①細粒　②良好 ③黄灰　④1/5	天井部は轆轤整形で、外面中ほどを回転篦削り。口縁部は下に折り曲がりカエリをもたない。	30	
21a-42	W－1 底部	須恵器 蓋	①[19.6] ②(3.4) ③　－	①細粒　②良好 ③灰　④1/4	天井部は轆轤整形で、外面中ほどを回転篦削り。口縁部は下に折り曲がりカエリをもたない。	37	
21a-43	W－1 覆土	須恵器 蓋	①[21.2] ②(1.8) ③　－	①細粒　②良好 ③黄灰　④口縁一部	口縁部付近の破片。天井部は轆轤整形。口縁部にカエシはない。		
21a-44	W－1 覆土	須恵器 蓋	①[21.2] ②(4.2) ③　－	①細粒　②良好 ③灰　④1/5	天井部は轆轤整形。口縁部は下へ折り曲がりカエリを持たない。		
21a-45	W－1 覆土	須恵器 蓋	①[22.4] ②(　　) ③　－	①細粒　②良好 ③灰　④1/4	天井部は轆轤整形。口縁部はやや外反させながら下に折り曲がり、カエリを持たない。	70 72	
21a-46	W－1 覆土	須恵器 蓋	①　－　②(2.0) ③[5.8]	①細粒　②良好 ③にぶい赤褐　④摘み	摘みは輪状で中央が窪み外側が引き出される。天井部は轆轤整形。		
21a-47	W－1 覆土	須恵器 坏	①[13.3] ②　4.1 ③　8.0	①細粒　②良好 ③褐灰　④2/3	体部は轆轤整形。底部は平底で篦削りで整形。		
21a-48	W－1 底部	須恵器 坏	①[13.8] ②　4.2 ③　8.4	①細粒　②良好 ③黄灰　④1/2	体部は轆轤整形。底部は平底で篦削りで整形。	33 35	
21a-49	W－1 覆土	須恵器 坏	①[13.6] ②　4.3 ③　7.0	①細粒　②良好 ③褐灰　④1/2弱	体部外面・内面、底部内面は轆轤整形。底部は平底で篦おこしのまま未整形。		
21a-50	W－1 底部	須恵器 坏	① 14.2　②　4.0 ③　8.6	①細粒　②良好 ③黄灰　④ほぼ完形	体部外面・内面、底部内面は轆轤整形。底部は平底で篦おこしのまま未整形。	25	
21a-51	W－1 覆土	須恵器 坏	①14.8　②　3.5 ③ 5.1	①細粒　②良好 ③黄灰　④ほぼ完形	体部は轆轤整形。底部は回転篦削りで整形。底部の縁につまみ出しで高台を作り出す。	52	
21a-52	W－1 覆土	須恵器 坏	①[13.6] ②　3.5 ③　7.0	①細粒　②良好 ③灰白　④1/4	体部は轆轤整形。底部は回転篦削りで整形。	57	
21a-53	W－1 覆土	須恵器 坏	①[13.6] ②　3.8 ③　8.0	①細粒　②良好 ③灰白　④2/5	体部は轆轤整形。底部は回転篦削りで整形。	69	
21a-54	W－1 覆土	須恵器 坏	①　－　②(2.3) ③ 10.0	①細粒(粒含)②良好 ③灰　④底の一部	体部は轆轤整形。底部は静止糸切りの後に立ちあがり部分を回転篦削りで整形。		
21a-55	W－1 覆土	須恵器 高台坏	①　－　②(2.0) ③　9.0	①細粒　②良好 ③灰白　④底部	体部は轆轤整形。底部は回転篦削りで整形し、高台を接着している。	58	
21a-56	W－1 覆土	須恵器 高台坏	①　－　②(3.0) ③　8.1	①細粒　②良好 ③灰　④1/3	体部は轆轤整形。底部は回転篦削りで整形し、高台を接着している。	46	
21a-57	W－1 覆土	須恵器 高台椀	①　－　②(1.4) ③[9.6]	①細粒　②良好 ③灰　④底部1/2	体部は轆轤整形。底部は水平糸切りの後に高台を接着している。		
21a-58	W－1 覆土	須恵器 高台椀	①　－　②(4.0) ③ 10.6	①細粒　②良好 ③黄灰　④底部	体部は轆轤整形。底部は水平糸切りの後に高台を接着している。内面の一部が摩耗に似た感触を呈することから転用硯の可能性あり。	50	
21a-59	W－1 覆土	須恵器 高台椀	①[13.8] ②　4.7 ③ 8.4	①細粒　②良好 ③灰白　④1/2	体部は轆轤成形。底部は回転糸切りの後に高台を接着している。底部中央に「大十（本）」の墨書あり。	11	
21a-60	W－1 覆土	須恵器 高台椀	①　－　②(3.0) ③ 8.3	①細粒　②良好 ③灰白　④底部	体部は轆轤成形。底部は回転糸切りの後に高台を接着している。底部中央に「大家」の墨書あり。	62	

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径　②器高 ③底径　④つまみ径	①胎土　②焼成 ③色調　④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録 番号	備考
21a-61	W－1 覆土	須恵器 椀	①[17.8] ②(4.8) ③　－	①細粒　②良好 ③灰　④体部1/5	体部は轆轤整形。	1,40 41	
21a-62	W－1 覆土	須恵器 高台坏	①[14.6] ②　4.7 ③ 9.2	①細粒　②良好 ③黄灰　④1/2	体部は轆轤整形。底部は回転篦削りで整形の後に高台を接着している。	55	
21a-63	W－1 覆土	須恵器 高台椀	①[18.0] ②　6.7 ③ 11.7	①細粒　②良好 ③灰　④1/3	体部は轆轤整形。底部は回転篦削りで整形の後に高台を接着している。底部内面に「井」状の線刻あり。口縁部に浅い沈線を１条施す。		
21a-64	W－1 底部	須恵器 高台椀	① 18.7　②　8.6 ③ 12.0	①細粒　②良好 ③灰　④1/3	体部は轆轤整形。底部は篦おこしの後に高台を接着している。	3834 25	
21a-65	W－1 覆土	須恵器 盤	①　－　②(1.2) ③[8.9]	①細粒　②良好 ③灰　④底部1/5	体部は轆轤整形。底部は回転篦削りで整形。		
21a-66	W－1 覆土	須恵器 盤？	①　－　②(1.6) ③[11.0]	①細粒　②良好 ③褐灰　④底部1/4	底部内面は轆轤整形。底部は篦おこしの後に高台を接着している。内面の一部が摩耗に似た感触を呈することから転用硯の可能性あり。		高台椀か？
21a-67	W－1 覆土	須恵器 盤	①[15.0] ②　4.5 ③[11.4]	①細粒　②良好 ③灰白　④1/5	体部は轆轤整形。底部は回転篦削りで整形の後に高台を接着している。口縁部に沈線を１条施す。		
21a-68	W－1 覆土	須恵器 盤	①[16.8] ②　4.4 ③[12.1]	①細粒　②良好 ③灰白　④1/3	体部は轆轤整形。底部は回転篦削りで整形の後に高台を接着している。		
21a-69	W－1 覆土	須恵器 盤	①[16.4] ②　4.6 ③[12.6]	①細粒　②良好 ③灰　④1/4	体部は轆轤整形。底部は回転篦削りで整形の後に高台を接着。口縁部端に沈線を１条施す。		
21a-70	W－1 底部	須恵器 盤	①[18.0] ②　3.8 ③[13.6]	①細粒　②良好 ③灰　④1/6	体部は轆轤整形。底部は回転篦削りで整形の後に高台を接着している。	8	
21a-71	W－1 底部	須恵器 盤	①[20.0] ②(3.7) ③　－	①細粒　②良好 ③灰　④体部1/5	体部は轆轤整形。	60	
21a-72	W－1 覆土	須恵器 盤	①　－　②(2.3) ③[14.0]	①細粒　②良好 ③灰白　④破片	体部は轆轤整形。底部は整形後に高台を接着している。		
21a-73	W－1 覆土	須恵器 盤	①　－　②(2.5) ③[12.0]	①細粒　②良好 ③灰　④破片	体部は轆轤整形。底部は篦おこしの後に高台を接着している。		
21a-74	W－1 底部	須恵器 盤	①　－　②(1.8) ③　－	①細粒　②良好 ③灰　④底部1/4	体部は轆轤整形。底部は回転糸切りの後に篦削りで整形し、高台を接着している。	67	
21a-75	W－1 覆土	須恵器 盤	①[18.2] ②　4.2 ③[13.8]	①細粒　②良好 ③灰　④1/4	体部は轆轤整形。底部は回転篦削りで整形の後に高台を接着している。内面は渦巻き状のカキ目。		
21a-76	W－1 底部	須恵器 盤	①　－　②(3.4) ③[16.0]	①細粒　②良好 ③灰白　④底部1/4	体部は轆轤整形。底部は篦おこしの後に高台を接着している。	31	
21a-77	W－1 覆土	須恵器 盤	①[20.8] ②　4.4 ③ 16.2	①細粒　②良好 ③灰　④3/4	体部は轆轤整形で口縁部に１条沈線を施す。底部は篦削りで整形の後に高台を接着している。		
21a-78	W－1 覆土	須恵器 盤	①　－　②(2.4) ③[16.0]	①細粒　②良好 ③灰白　④底部1/4	体部は轆轤整形。底部は回転篦削りで整形の後に高台を接着している。	56	
21a-79	W－1 底部	須恵器 高盤	①[15.4] ②(3.0) ③　－	①細粒　②良好 ③灰　④坏部1/2	坏部、脚部は轆轤整形。坏部底部は回転篦削りで整形。口縁部はやや内向して立ち上がる。脚部接着後の整形も轆轤整形。	39	
21a-80	W－1 覆土	須恵器 高盤	①　－　②(6.7) ③　－	①細粒　②良好 ③灰　④2/5	坏部、脚部は轆轤整形。坏部底部は回転篦削りで整形。		
21a-81	W－1 覆土	須恵器 高盤	①　－　②(9.6) ③ 10.9	①細粒　②良好 ③灰　④脚部のみ	坏部、脚部は轆轤整形。		
21a-82	W－1 覆土	須恵器 高盤	①　－　②(6.0) ③　－	①細粒　②良好 ③灰白　④脚基部	坏部、脚部は轆轤整形。		
21a-83	W－1 覆土	須恵器 高盤	①　－　②(4.0) ③　－	①細粒　②良好 ③灰　④脚基部	坏部、脚部は轆轤整形。。脚部は３か所に透かしを開け、平行する２条の沈線を施す。		
21a-84	W－1 覆土	須恵器 蓋	①[13.0] ②(11.2) ③　－	①細粒　②良好 ③褐灰　④破片	釣鐘形と推定される破片。天井部は轆轤整形で、口縁部に１条、体部に２条一対の沈線をほぼ等間隔に施す。		
21a-85	W－1 底部	須恵器 短頸壺	①　－　②(3.7) ③　5.4	①細粒　②良好 ③灰白　④底部	体部は轆轤整形。底部は回転篦削りで整形の後に高台を接着している。	53	
21a-86	W－1 覆土	須恵器 壺	①　－　②(4.3) ③[6.4]	①細粒　②良好 ③灰　④底部から体部	体部は轆轤整形。底部は回転糸切りの後に立ちあがりを篦削りで整形している。壺Ｇの底部付近か。		
21a-87	W－1 覆土	須恵器 双耳坏	①　－　②(3.4) ③　6.6	①細粒　②良好 ③灰白　④底部と体部	体部は轆轤整形。底部は回転糸切りの後に高台を接着している。底部からの立ち上がり付近に一対の取手を接着し、篦削りで整形する。		
21a-88	W－1 覆土	須恵器 円面硯	①　－　②(4.1) ③　－	①細粒　②良好 ③灰　④破片	脚部の破片。轆轤整形で透かしあり。平行刻みを施す。硯部との接着部に粘土の剝落痕あり。		
21a-89	W－1 覆土	擦痕を 持つ蓋	①[13.2] ②(1.8) ③　－	①細粒　②良好 ③灰　④1/5	須恵器蓋の内面に磨かれた痕跡をもつ。蓋の天井部は轆轤整形で中ほどは回転篦削りで整形し、下に折れ曲がりカエリをもたない。内面に擦痕があり、硯等に転用された蓋の破片か。		
21a-90	W－1 覆土	須恵器 大甕	①　－　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③灰　④破片	須恵器大甕の頸部付近の破片。甕の外面はタタキ、頸部内側篦削りで整形。内面に擦痕が認められる。	61	
21a-91	W－1 覆土	擦痕を持 つ須恵器	①　－　②(1.0) ③　－	①細粒　②良好 ③灰　④破片	須恵器蓋の口縁部の周囲を欠き、その一部に擦痕を残す。天井部は轆轤整形で中ほどは回転篦削りで整形。つまみは扁平で端部が立ちあがる。	66	
21a-92	グリッド 覆土	須恵器 高台椀	①　－　②(3.9) ③　7.1	①細粒　②良好 ③灰白　④底から体部	体部は轆轤轆轤整形。底部は回転糸切りの後に高台を接着している。内面に擦痕あり。高台の接地面が斜めに削られている。	1	出土Ｇ X290・ Y308
21a-93	トレンチ 覆土	土師器 坏	①　－　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	体部の破片。外面は篦削りで整形。内面は撫でによる整形の後に放射状の暗紋を施す。		
21a-94	トレンチ 覆土	土師器 坏	①[12.1] ②(2.8) ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	立ちあがりから口縁部にかけての破片。外面は篦削りで口縁部を横方向の撫でで整形。内面は撫でによる整形の後に放射状の暗紋を施す。		
21a-95	トレンチ 覆土	須恵器 瓶	①　－　②(9.9) ③　－	①細粒　②良好 ③灰白　④頸接合部	体部外面は縦方向の篦削りの後に頸部を中心に轆轤整形、同内面は篦撫でによる整形。		
21a-96	トレンチ 覆土	須恵器 甕	①[17.2] ②(5.2) ③　－	①細粒　②良好 ③灰　④破片	頸部から口縁部にかけての破片。甕は轆轤整形。頸部内面に漆が付着する。		
21a-97	トレンチ 覆土	須恵器 坏	①　－　②　0.3 ③[5.0]	①細粒　②良好 ③灰　④破片	須恵器坏底部の破片。底部は回転糸切り。内面に漆が付着する。		

21ｂトレンチ

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径　②器高 ③底径　④つまみ径	①胎土　②焼成 ③色調　④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
21b-1	トレンチ 覆土	土師器 坏	①　—　②　— ③　—	①細粒　②良好 ③橙　④体部破片	体部外面は篦削り、内面は撫でによる整形の後に放射状の暗紋を施す。		
21b-2	トレンチ 覆土	須恵器 蓋	①　—　②(1.8) ④　5.8	①細粒　②良好 ③灰白　④1/5	つまみは扁平で中央が窪む。天井部は轆轤整形で、外面中ほどを回転篦削り。内面は轆轤整形の後に撫でで整形し、中央部が擦耗している。		
21b-3	トレンチ 覆土	須恵器 蓋	①　—　②(4.3) ④ 4.4	①細粒　②良好 ③灰　④3/4	つまみは扁平で中央が窪み中ほどが膨らむ。天井部は轆轤整形で、外面中ほどを回転篦削り。		
21b-4	トレンチ 覆土	須恵器 長頸壺？	①　—　②(7.3) ③[10.6]	①細粒　②良好 ③灰　④底部	外面・内面ともに轆轤整形。底部は高台が付く。		
21b-5	トレンチ 覆土	須恵器 甕	①　—　②(4.4) ③[6.5]	①細粒　②良好 ③灰　④破片	底部から体部にかけての破片。体部外面は叩き、内面は篦撫でにより整形。内面に漆が付着するが、器体を横位にして漆を入れたかのように付着している。		
21b-6	トレンチ 覆土	須恵器 坏	①[12.4]　②　3.6 ③[8.2]	①細粒　②良好 ③灰　④破片	底部から口縁部にかけての破片。底部は回転篦削り、口縁部は轆轤で整形。器体内面および底部外面の一部に漆付着。		
21b-7	トレンチ 覆土	須恵器 瓶	①　—　②　— ③　—	①細粒　②良好 ③灰　④破片	体部から頸部にかけての破片。轆轤による整形。器頸内面・外面・欠け口に漆付着。破損後に付着か。		

22トレンチ

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径　②器高 ③底径　④つまみ径	①胎土　②焼成 ③色調　④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
22-1	H－1 床直	土師器 小型甕	①[10.4]　② 12.6 ③　5.6	①中粒含　②良好 ③明赤褐　④ほぼ完形	外面は胴部を斜めの篦削り、頸部から口縁部にかけてを横位の撫でで整形。内面は篦磨きにより調整。全体的に風化著しい。	2	
22-2	H－1 床直	土師器 小型甕	①(14.8)　②　— ③　5.7	①細粒　②良好 ③橙　④口から体部	外面は胴部を斜めの篦削り、頸部から口縁部にかけてを横位の撫でで整形。内面は篦磨きにより調整。全体的に風化著しい。	3	
22-3	H－1 床直	土師器 甕	① 19.9　② [12.0] ③　—	①細粒　②良好 ③橙　④胴部より上	外面は胴部を縦位の篦削り、口縁部を横位の撫でで整形。内面は胴部を横位の篦撫で、口縁部を横位の撫でで整形。	1	

23トレンチ

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径　②器高 ③底径　④つまみ径	①胎土　②焼成 ③色調　④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
23-1	H－1 床直	須恵器 坏	①[10.6]　②　3.7 ③　5.6	①細粒　②良好 ③褐灰　④1/5	内面・外面ともに轆轤による整形。底部は回転糸切り。胎土に５㎜程度の白色鉱物を含む。	1	
23-2	H－1 覆土	須恵器 坏	①[12.0]　②　3.2 ③[7.6]	①細粒　②良好 ③黄灰　④体部1/5	内面・外面ともに轆轤による整形。底部は回転糸切りか。胎土に５㎜程度の白色鉱物を含む。		
23-3	H－1 床直	土師質 羽釜	①[20.0]　②(10.2) ③　—	①細粒　②良好 ③明赤褐　④口縁部	内面・外面ともに篦による横方向の撫でで整形。口縁部は指撫で。羽はあまり発達していない。胎土はやや砂質。	2	
23-4	H－3 覆土	須恵器 坏	①　—　②(1.6) ③[6.0]	①細粒　②良好 ③にぶい黄橙　④底部	内面・外面ともに轆轤による整形。底部は回転糸切り。胎土はやや砂質。		酸化焔
23-5	H－3 覆土	須恵器 坏	①[13.6]　②(4.7) ③　—	①細粒　②良好 ③橙　④口縁から体部	内面・外面ともに轆轤による整形。胎土はやや砂質。		酸化焔
23-6	H－4 覆土	黒色土器 高台椀	①　—　②(3.1) ③[8.0]	①細粒　②良好 ③浅黄橙　④底部	外面は轆轤整形の後に高台部を接着し整形。内面は轆轤整形の後に磨きと黒色処理を施す。		
23-7	H－3 床直	砥石	粗流安山岩の亜円礫の３面を砥ぎ面として使用したもの。１面は溝状の使用痕多数。砥ぎ面ではない１面に凹みあり。完形。				1
23-8	W－2 覆土	土師質 鉢	①　—　②(7.7) ③[13.2]	①粗粒含　②良好 ③浅黄橙　④体部	外面は轆轤により整形し、底部からの立ち上がり部分は横方向の篦撫でで調整。内面は使用により磨耗している。胎土はやや砂質。	1	
23-9	W－4 覆土	土製品 土錘	長さ　3.4 幅　2.2	①細粒　②良好 ③浅黄橙　④3/4	中心部に孔あり。		

24ｂトレンチ

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径　②器高 ③底径　④つまみ径	①胎土　②焼成 ③色調　④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
24b-1	W－1 覆土	土師器 坏	①　—　②　— ③　—	①細粒　②良好 ③橙　④破片	口縁部の破片。外面は篦削り、内面は撫でによる整形の後に放射状の暗紋を施す。		
24b-2	W－1 覆土	須恵器 盤	①　—　②　— ③　—	①細粒　②良好 ③灰白　④底部破片	体部は轆轤整形。底部は回転篦削りの後に高台を接着している。	1	
24b-3	W－1 覆土	須恵器 高台椀	①　—　②(2.7) ③[6.8]	①細粒　②良好 ③灰白　④底部	体部は轆轤整形。底部は回転糸切りの後に高台を接着している。		
24b-4	W－1 覆土	常滑焼 甕	①　—　②　— ③　—	①細粒　②良好 ③にぶい褐　④破片	胴部の破片のみ。外面は斜め方向の篦状工具による撫での後に格子目の叩き目で整形。内面は横方向の撫でで整形。	3	
24b-5	表採	瓦 平瓦	長(6.6) 厚　2.0	①細粒　②良好 ③灰白　④破片	凹面に布目と篦書きによる文字あり。文字は欠損により不明。凸面に縄目文圧痕あり。		

25トレンチ

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径　②器高 ③底径　④つまみ径	①胎土　②焼成 ③色調　④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
25-1	W－1 覆土	土師器 坏	①[12.2]　②(3.2) ③[8.4]	①細粒　②良好 ③橙　④破片	立ちあがりから口縁部までの破片。内外面ともに横方向の撫でによる整形。	12	
25-2	W－1 覆土	土師器 甕	①[17.5]　②(5.1) ③　—	①細粒　②良好 ③橙　④破片	頸部付近から口縁部までの破片。胴部外面は横方向の篦削り。頸部から口縁部にかけては横方向の篦削りおよび撫でによる整形。	4	
25-3	W－1 覆土	須恵器 坏	① 13.1　②　4.0 ③　6.2	①細粒　②良好 ③浅黄橙　④ほぼ完形	体部は轆轤整形。底部は回転糸切り。	16	
25-4	W－1 覆土	須恵器 坏	①[12.9]　②　3.8 ③　6.4	①細粒　②良好 ③灰白　④3/4	体部は轆轤整形。底部は回転糸切り。口縁端部にタール状の付着物。	8	
25-5	W－1 覆土	須恵器 皿	①[12.4]　②　2.3 ③[7.0]	①細粒　②良好 ③灰　④1/4	体部は轆轤整形。底部は回転糸切りの後に、高台を接着している。	14	
25-6	W－1 覆土	黒色土器 高台椀	①[16.1]　②　5.3 ③　8.3	①細粒　②良好 ③にぶい橙　④2/3	外面は轆轤整形。内面は轆轤整形の後に磨きと黒色処理を施す。底部は回転糸切りの後に高台を接着している。	1	
25-7	W－1 覆土	須恵器 高台椀	①[14.2]　②　5.0 ③　6.8	①細粒　②良好 ③黄灰　④2/3	外面は轆轤整形。底部は回転糸切りの後に高台を接着している。	2・3	
25-8	W－1 覆土	須恵器 高台椀	①[14.5]　②　4.8 ③　5.3	①細粒　②良好 ③灰白　④口縁1/4欠	外面は轆轤整形。底部は回転糸切りの後に高台を接着している。	6	

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径　②器高 ③底径　④つまみ径	①胎土　②焼成 ③色調　④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録 番号	備考
25-9	W―1 覆土	須恵器 高台椀	①　―　②(1.1) ③　―	①細粒　②良好 ③灰白　④破片	外面は轆轤整形。底部は回転糸切りの後に高台を接着している。底部内面に五芒星の刻書あり。		
25-10	W―1 覆土	須恵器 高台椀	①[14.6] ②　5.7 ③　7.2	①細粒　②良好 ③灰白　④1/3	外面は轆轤整形。底部は回転糸切りの後に高台を接着している。体部外面に墨書あり。「本」か？。	15	
25-11	W―1 覆土	須恵器 高台椀	①　―　②(2.2) ③　7.8	①細粒　②良好 ③褐灰　④底部のみ	内面・外面ともに轆轤整形。底部は回転糸切りの後に高台部を接着。外面底部に墨書あり。「木」か？。	17	
25-12	W―1 覆土	須恵器 甕	①　―　②(4.4) ③ 16.4	①細粒　②良好 ③灰白　④底部	体部は篦撫で、立ちあがりは篦削りで整形。底部の内面は巻き状のカキ目。外面削りで整形。	16	
25-13	グリッド 覆土	土師器 坏	①[12.6] ②(2.9) ③　―	①細粒　②良好 ③橙　④破片	底部は篦削り、口縁部は横方向の撫でで整形。内面は横方向の撫でで整形。		出土G X291・ Y400
25-14	グリッド 覆土	土師器 坏	①[12.0] ②(3.0) ③[7.4]	①細粒　②良好 ③にぶい橙　④破片	底部から立ちあがりまで篦削り、口縁端部付近を横方向の撫でで整形。内面は横方向の撫でで整形。		出土G X290・ Y400
25-15	グリッド 覆土	土師器 坏	①[12.4] ②(3.4) ③[8.6]	①細粒　②良好 ③橙　④破片	底部から立ちあがりまで篦削り、口縁端部付近を横方向の撫でで整形。内面は横方向の撫でで整形。		出土G X291・ Y400
25-16	グリッド 覆土	土師器 台付甕	①　―　②(2.6) ③　―	①細粒　②良好 ③橙　④破片	脚基部付近の破片。体部・脚部は轆轤整形。内面は篦撫でによる整形。		出土G X290・ Y400
25-17	グリッド 覆土	土師器 甕	①[17.2] ②(4.6) ③　―	①細粒　②良好 ③橙　④破片	頸部付近から口縁部までの破片。胴部外面は横方向の篦削り、。頸部から口縁部にかけては横方向の篦削りおよび撫でによる整形。		出土G X290・ Y400
25-18	グリッド 覆土	須恵器 皿	①[12.9] ②　3.2 ③[6.0]	①細粒　②良好 ③灰黄　④1/2	体部は轆轤整形。底部は回転糸切りの後に、高台を接着している。		出土G X291・ Y400
25-19	グリッド 覆土	土師器 坏	①　―　②(2.6) ③　―	①細粒　②良好 ③橙　④破片	口縁部の破片。外面は篦削りで口縁部を横撫で整形。内面は撫でによる整形の後に放射状の暗紋を施す。		出土G X290・ Y400
25-20	グリッド 覆土	土師器 坏	①　―　②(2.9) ③　―	①細粒　②良好 ③橙　④破片	口縁部の破片。外面は篦削りで口縁部を横撫で整形。内面は撫でによる整形の後に放射状の暗紋を施す。		出土G X290・ Y400
25-21	グリッド 覆土	土師器 坏	①　―　②(3.0) ③　―	①細粒　②良好 ③橙　④破片	口縁部の破片。外面は篦削りで口縁部を横方向の撫でで整形。内面は撫でによる整形の後に放射状の暗紋を施す。		出土G X290・ Y400
25-22	グリッド 覆土	土師器 坏	①[12.7] ②(3.2) ③　―	①細粒　②良好 ③明赤褐　④破片	口縁部の破片。外面は篦削りで口縁部を横方向の撫でで整形。内面は撫でによる整形の後に放射状の暗紋を施す。		出土G X290・ Y400
25-23	グリッド 覆土	土師器 坏	①　―　②(1.2) ③[10.2]	①細粒　②良好 ③橙　④破片	底部から立ちあがりにかけての破片。底面は篦削りで整形。内面は撫でによる整形の後に放射状の暗紋を施す。		出土G X290・ Y401
25-24	グリッド 覆土	須恵器 短頸壺？	①[5.8] ②(2.6) ③　―	①細粒　②良好 ③灰　④破片	内面・外面ともに轆轤整形。		出土G X290・ Y400
25-25	トレンチ 覆土	須恵器 瓶	①　―　②(3.9) ③[8.5]	①細粒　②良好 ③灰　④破片	体部は轆轤整形。底部は回転糸切りの後に立ちあがり部分を横方向の篦撫で整形。		
25-26	グリッド 覆土	須恵器 壺	①　―　②(4.3) ③　―	①細粒　②良好 ③灰　④破片	頸部付近の破片。轆轤整形。		出土G X291・ Y401
25-27	グリッド 覆土	須恵器 壺	①　―　②(6.6) ③　9.6	①細粒　②良好 ③灰　④底部	体部は轆轤整形。底部は篦削りと撫での後に高台を接着している。	14	
25-28	グリッド 覆土	須恵器 壺	①　―　②(4.6) ③ 12.0	①細粒　②良好 ③灰　④底部	体部は轆轤整形。底部は篦削りと撫での後に高台を接着している。	12	
25-29	グリッド 覆土	須恵器 坏	①[12.2] ②(2.4) ③　―	①細粒　②良好 ③灰　④破片	口縁部のみの破片。轆轤整形。口縁端部内面は擦痕状。外面に焼成前に施したと思われる２条１対の細い沈線あり。		出土G X290・ Y400
25-30	トレンチ 覆土	土師器 甕	①　―　②(2.6) ③　―	①細粒　②良好 ③橙　④破片	胴部の破片のみ。外面は篦状工具での縦方向の削りで整形する。内面は横方向の撫でにより整形。内面に漆付着。		
25-31	グリッド 覆土	土師器 甕	①　―　②(2.8) ③　―	①細粒　②良好 ③にぶい褐　④破片	底部に近い胴部の破片。外面は削りで整形。内面は撫でにより整形。内面に漆付着。		出土G X290・ Y401
25-32	グリッド 覆土	須恵器 蓋	①[13.0] ②(2.2) ③　―	①細粒　②良好 ③灰白　④破片	灰釉陶器か。天井部は轆轤整形で外面中ほどは回転篦削りで整形。口縁部は下に折り曲がりカエリをもたない。		出土G X291・ Y399
25-33	グリッド 覆土	灰釉陶器 皿	①　―　②(1.6) ③[7.3]	①細粒　②良好 ③灰黄　④破片	口縁部は轆轤整形。底部は高台を接着しながら轆轤整形。釉は刷毛塗り。		出土G X290・ Y400

26トレンチ

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径　②器高 ③底径　④つまみ径	①胎土　②焼成 ③色調　④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録 番号	備考
26-1	H―1 床直	土師器 坏	①[12.8] ②(3.4) ③　―	①細粒　②良好 ③橙　④破片	立ちあがりから口縁部の破片。外面は篦削りで口縁部を横方向の撫でで整形。内面は撫でによる整形の後に放射状の暗紋を施す。	1	
26-2	H―1 床直	土師器 坏	①[12.4] ②(4.2) ③　―	①細粒　②良好 ③にぶい橙　④破片	立ちあがりから口縁部の破片。外面は篦削りで口縁部を横方向の撫でで整形。内面は撫でによる整形の後に放射状の暗紋を施す。	4	
26-3	H―1 覆土	土師質 坏	①　―　②(1.8) ③[6.8]	①細粒　②良好 ③浅黄橙　④底部のみ	口縁部は轆轤整形。底部は回転糸切り。		
26-4	H―1 覆土	須恵器 坏	①[12.7] ②　3.9 ③[6.8]	①細粒　②良好 ③灰白　④1/3	口縁部は轆轤整形。底部は回転糸切り。		
26-5	H―2 覆土	土師質 高台椀	①　―　②(1.8) ③[6.2]	①細粒　②良好 ③橙　④破片	口縁部は轆轤整形。底部は回転糸切りの後に高台を接着している。	1	
26-6	W―1 覆土	土師器 坏	①[17.2] ②[3.7] ③[10.0]	①細粒　②良好 ③橙　④破片	立ちあがりから口縁部の破片。外面は篦削りで口縁部を横方向の撫でで整形。内面は撫でによる整形の後に螺旋状・放射状の暗紋を施す。		
26-7	W―1 覆土	土師器 坏	①　―　②(1.0) ③[12.0]	①細粒　②良好 ③橙　④破片	底部から立ちあがりからの破片。外面は篦削りで整形。内面は撫でによる整形の後に螺旋状の暗紋を施す。		

番号	出土遺構 層位	器種名	①口径　②器高 ③底径　④つまみ径	①胎土　②焼成 ③色調　④遺存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録 番号	備考
26-8	W－1 覆土	土師器 坏	①　－　②(1.4) ③[8.0]	①細粒　②良好 ③橙　④破片	底部から立ちあがりからの破片。外面は篦削りで整形。内面は撫でによる整形の後に放射状の暗紋を施す。		
26-9	W－1 覆土	須恵器 長頸壺？	①　－　②(2.6) ③[9.4]	①細粒　②良好 ③灰　④底部のみ	体部は轆轤整形。底部は回転糸切りの後に高台を接着している。内面がややすべすべしている。	1	
26-10	W－1 覆土	須恵器 長頸壺？	①　－　②(3.1) ③[7.8]	①細粒　②良好 ③灰　④破片	体部は轆轤整形。底部は静止糸切りの後に高台を接着している。		
26-11	W－1 覆土	黒色土器 坏	①　－　②(1.3) ③[9.0]	①細粒　②良好 ③橙　④底部1/8	器体表面が全面的に磨き。内面に黒色処理を施す。		
26-12	W－1 覆土	須恵器 瓶	①　－　②(4.3) ③　－	①細粒　②良好 ③灰　④破片	体部は轆轤整形。頸部は欠損しているが、欠け口に漆付着。		
26-13	W－1 覆土	羽口	羽口の先端部の破片。				
26-14	D－2 覆土	土師器 坏	①[10.0] ②(3.0) ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④1/4	口縁部は篦削りにより整形し、口縁端部を横方向の撫でで整形。内面は横方向の撫でで整形している。	2	
26-15	D－2 覆土	土師器 坏	①[12.0] ②(3.1) ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④1/5	口縁部は篦削りにより整形し、口縁端部を横方向の撫でで整形。内面は横方向の撫でで整形している。	1	
26-16	A－2 上面	灰釉陶器 皿	①[11.6] ②　2.2 ③[7.0]	①細粒　②良好 ③灰白　④1/6	口縁部は轆轤整形。底部は高台を接着しながら轆轤整形。釉は漬け塗り。器体内面および口縁部外面に煤が付着。		
26-17	O－1 覆土	土師器 坏	①　－　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	口縁部の破片。外面は篦削りで整形。内面は撫でによる整形の後に放射状の暗紋を施す。		
26-18	O－1 覆土	土師器 坏	①　－　②(4.6) ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	口縁部の破片。外面は篦削りで整形。内面は撫でによる整形の後に放射状の暗紋を施す。		
26-19	O－1 覆土	土師器 甕	①　－　②　－ ③　－	①細粒　②良好 ③にぶい橙　④破片	胴部の破片。外面は篦削り、内面は撫でで整形。内面に漆付着。		
26-20	O－1 覆土	須恵器 蓋	①　－　②(2.4) ④　3.7	①細粒(粗含)②良好 ③灰白　④口縁部欠	つまみは扁平で、周縁部がやや外反し中央が窪み中ほどで膨らむ。天井部は轆轤整形の後に中ほどを回転篦削り。		
26-21	O－1 覆土	須恵器 高台椀	①　－　②(2.9) ③[7.0]	①細粒　②良好 ③灰白　④1/4	口縁部は轆轤整形。底部は回転糸切りの後に高台を接着している。	5	
26-22	O－1 覆土	灰釉陶器 壺？	①　－　②(5.4) ③[8.8]	①細粒　②良好 ③灰白　④破片	体部は轆轤整形。底部は回転篦削りで整形か。。	6	
26-23	トレンチ 覆土	土師器 坏	①　－　②(2.9) ③　－	①細粒　②良好 ③橙　④破片	口縁部の破片。外面は篦削りで整形。内面は撫でによる整形の後に放射状の暗紋を施す。		
26-24	トレンチ 覆土	土師質 坏	①[9.2] ②　2.1 ③[5.6]	①細粒　②良好 ③浅黄橙　④1/2弱	轆轤整形。底部は回転糸切り。		
26-25	トレンチ 覆土	須恵器 盤	①　－　②(2.2) ③[14.2]	①細粒　②良好 ③灰白　④底部	体部は轆轤整形。底部整形の後に高台を接着している。		
26-26	表採	緑釉陶器 皿	①　－　②(1.7) ③[7.2]	①細粒　②良好 ③オリーブ灰　④底部	体部は轆轤整形で、底部は蛇の目高台。		

Ⅵ　ま と め

1　成果について

⑴　総社神社および元総社小学校周辺について

総社神社境内において国府関連施設の遺構を検出することはできなかった。総社神社の境内は表土を剝いだ時点で総社砂層に達したことから、神社境内はかなりの土取りが行われたことが推定される。

現在、参道の東側には神楽殿が建っているが、元々神楽殿よりも東は牛池川に沿った低地であり、社殿の東側に建つ社務所は、東半分がその低地に向かってせり出すような状態であったことが総社神社関係者や牛池川の河川改修前の現況図から判明している。なお、社務所北西に設定した19トレンチでは、北東方向に向かう谷の傾斜面が検出された。この傾斜面は牛池川に沿った低地の斜面と考えられるが、この低地は榛名二ッ岳の噴火にともなう泥流によって埋没していた。この状況は元総社明神遺跡Ｙトレンチで確認された牛池川の埋没状況と一致する。なお、この泥流により埋没した後の覆土から円面硯の破片や、脚部の断面が多角形となる土師器高坏などの官衙関連遺物も出土している。これらの遺物は、やや下流の元総社明神遺跡Ⅷや元総社寺田遺跡で出土した官衙関連遺物の一群の一部と捉えることができるだろう。

元総社小学校の校庭における調査では、撹乱の影響が随所に見られたために検出された遺構は少なかったものの、住居跡１軒と古代の溝が検出されている。検出された住居跡の時期は出土遺物から７世紀後半頃と推定され、溝はこの住居を破壊して造られていることから、８世紀代には掘削されていたと考えられる。

なお、この溝からは遺物が多く出土している。遺物は４世紀代や６世紀代の土師器も少量ながら含まれるが、８・９世紀の遺物を主体としている。土師器では坏、甕の破片が多いが、螺旋状暗紋を有する坏形土器や脚断面が多角形となる高坏も出土している。須恵器では蓋、坏、椀、盤、高盤、甕、瓶が出土している。土器としてはその他に黒色土器が出土しているが、器種は蓋と盤のみで点数自体も少ない。これら土器類の特徴としては接合して完形になるものは非常に少なく、意図的に周辺を破損させたと考えられるものも見られた。また、「本」・「大家」の墨書土器が２点出土していることも特筆される。土器以外の遺物としては、漆付着土器、羽口片、転用坩堝片、鉄滓が出土している。

溝の性格については、溝と関連した遺構の検出に至っていないため詳細は不明であるが、溝が遺構確認面で幅約２ｍというある程度の規模をもつことや、南北方向に走行を持つことからある程度の規則性をもって造られたことが想定できること。さらに出土遺物に螺旋状暗紋を有する土器、須恵器や黒色土器の盤や蓋、「本」「大家」の墨書土器など官衙に関連した遺物が多く出土したことや、東側に元総社小校庭遺跡で検出された掘立柱建物が存在することから、国府に関連した施設の区画溝の可能性が高い。また、溝から出土した遺物については、溝が機能しなくなり埋没していく過程で廃棄されたものと推定される。また、遺物は溝の底部からも出土していることから、機能しなくなってから早々に土器などの廃棄が始まったと考えられる。

元総社小学校付近では、元総社小校庭遺跡をはじめとして、元総社明神遺跡Ｘ・Ⅻ・ⅩⅢ、元総社寺田遺跡の調査が実施されているが、これらの遺跡の概要について述べると、元総社小校庭遺跡は、元総社小学校の校庭中央からやや北西寄りの地点で掘立柱建物跡が２棟検出されていることで著名な遺跡である。元総社明神遺跡Ｘの31トレンチ、同遺跡Ⅻの33トレンチ、同遺跡ⅩⅢの34トレンチの３地点は元総社小学校の北側に位置し、ここでは国府との関連が考えられる遺構の検出はないが、螺旋状暗紋を有する土器、須恵器蓋・盤、円面硯、墨書土器が住居跡から出土している。小学校南側では元総社明神遺跡Ｘの30トレンチ、同遺跡Ⅻの32トレンチの調査が行われているが、ここでは国府との関連が考えられる遺構や遺物の出土は見られない。小学校の東側では、牛池川の河川改修にともない元総社寺田遺跡の調査が広範囲に渡って実施されているほか、元総社明神遺跡Ⅷの27トレンチ

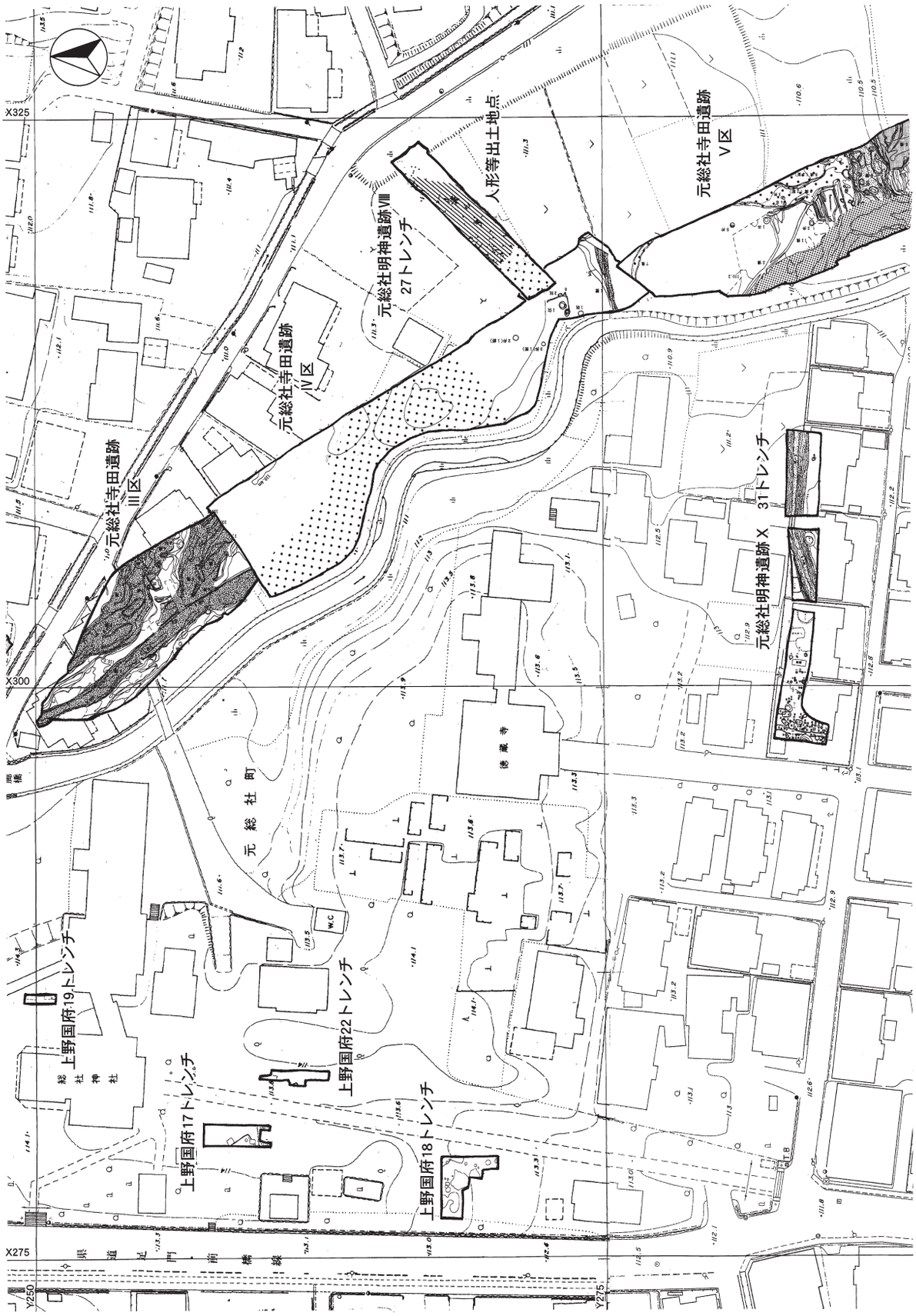
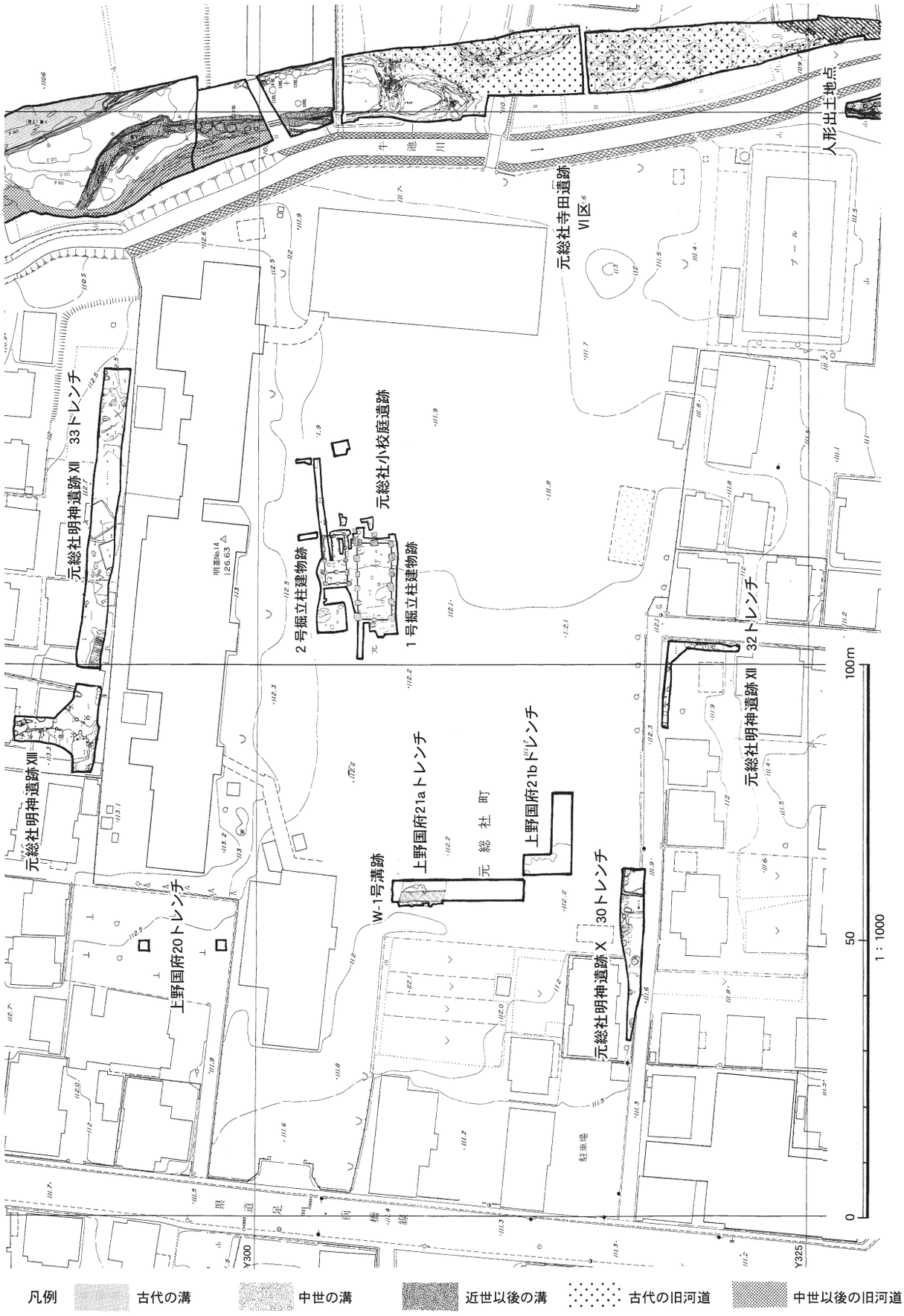
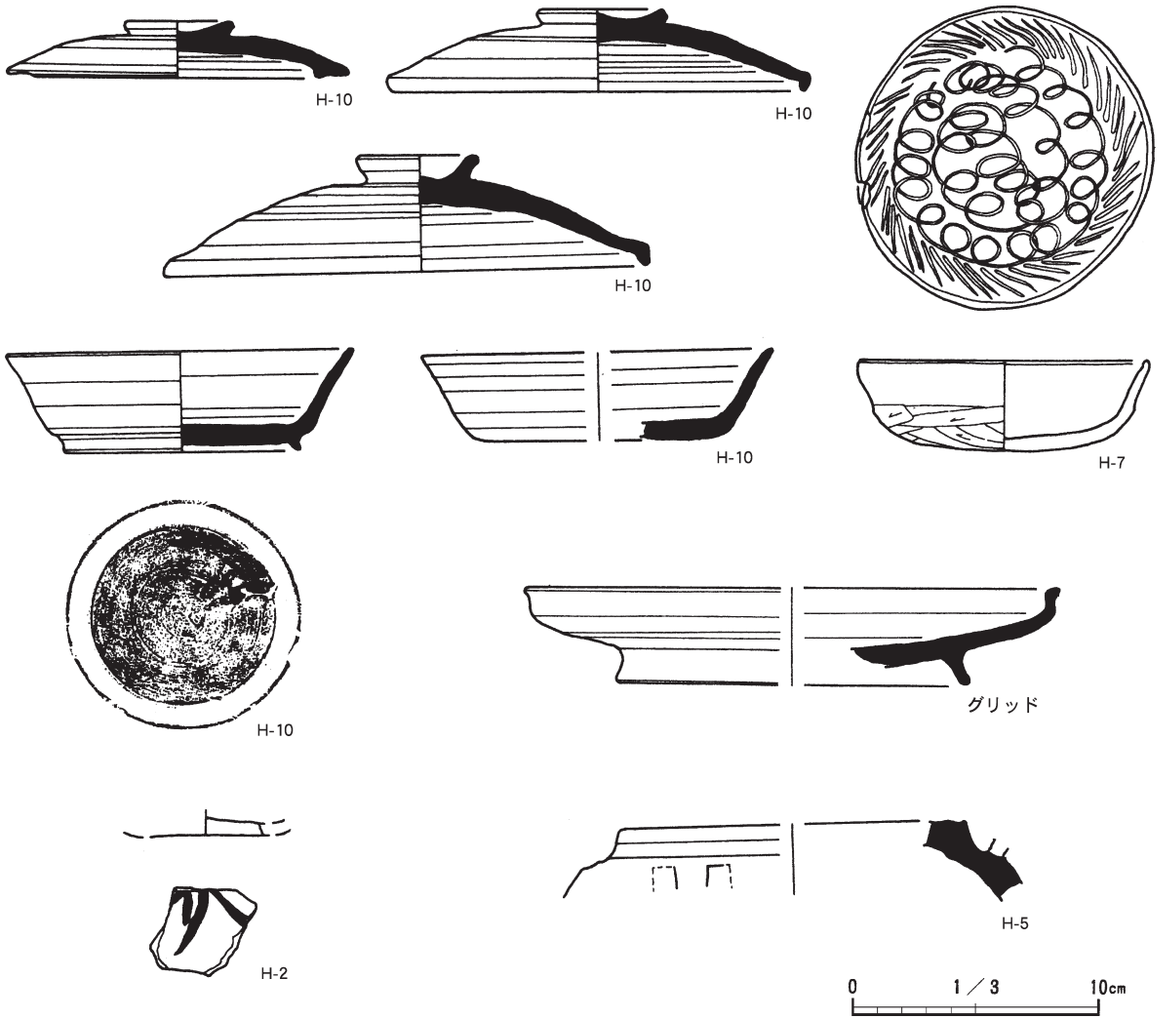


Fig.30　総社神社、元総社小学校周辺の状況



凡例　古代の溝　中世の溝　近世以後の溝　古代の旧河道　中世以後の旧河道

元総社明神遺跡XIII　34トレンチ



元総社明神遺跡XII　33トレンチ

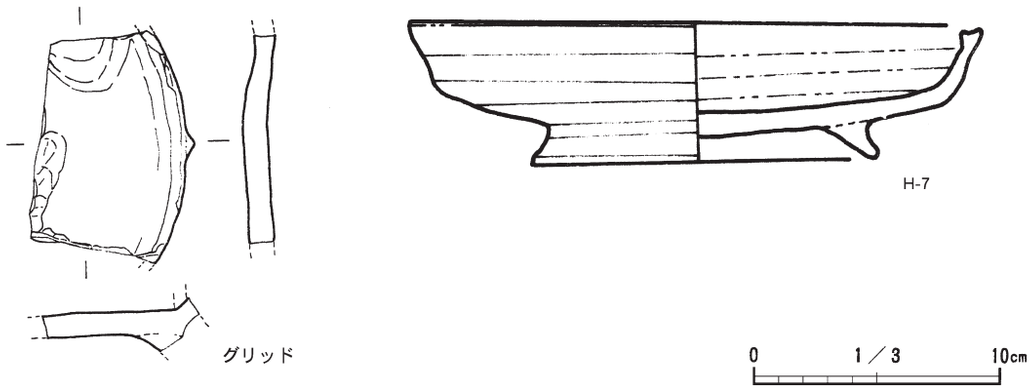
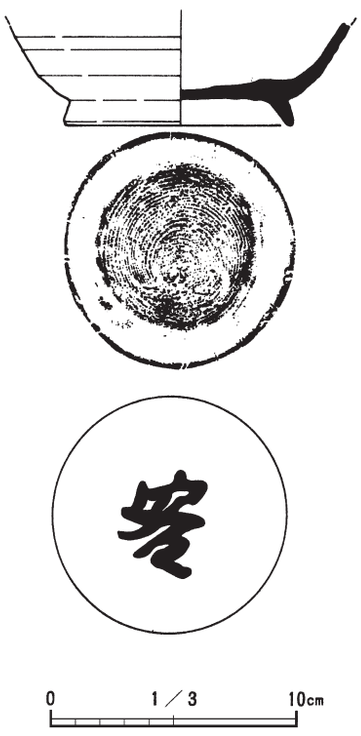
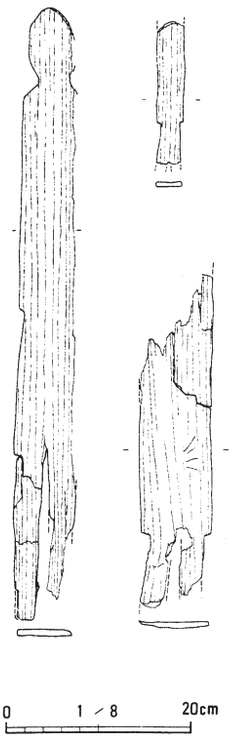


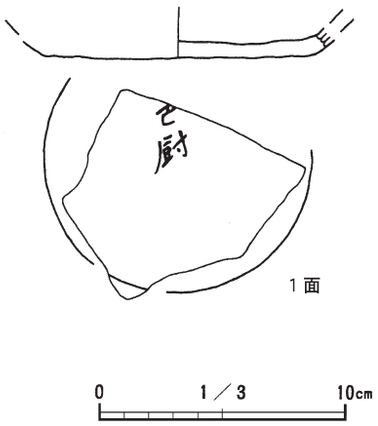
Fig.31　元総社小学校周辺の主な出土遺物(1)

元総社明神遺跡Ⅶ　27トレンチ

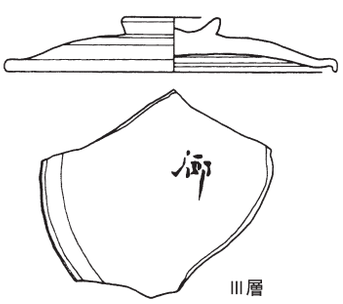


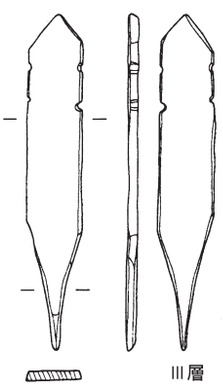


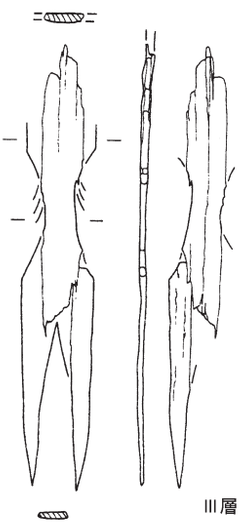
元総社寺田遺跡　Ⅴ区

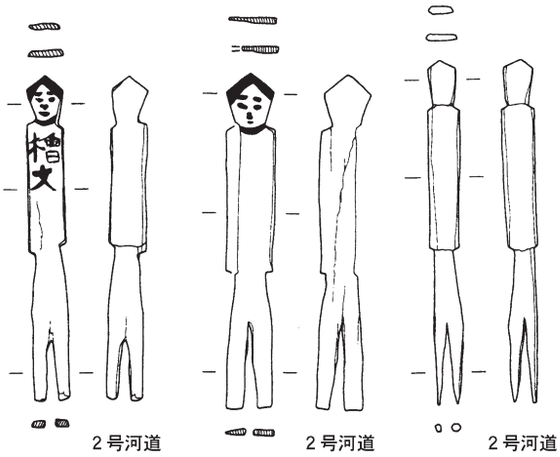


元総社寺田遺跡　Ⅵ区









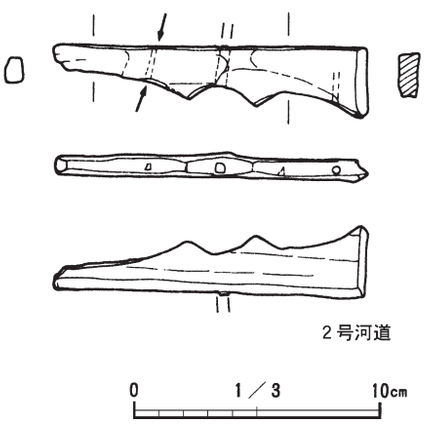


Fig.32　元総社小学校周辺の主な出土遺物(2)

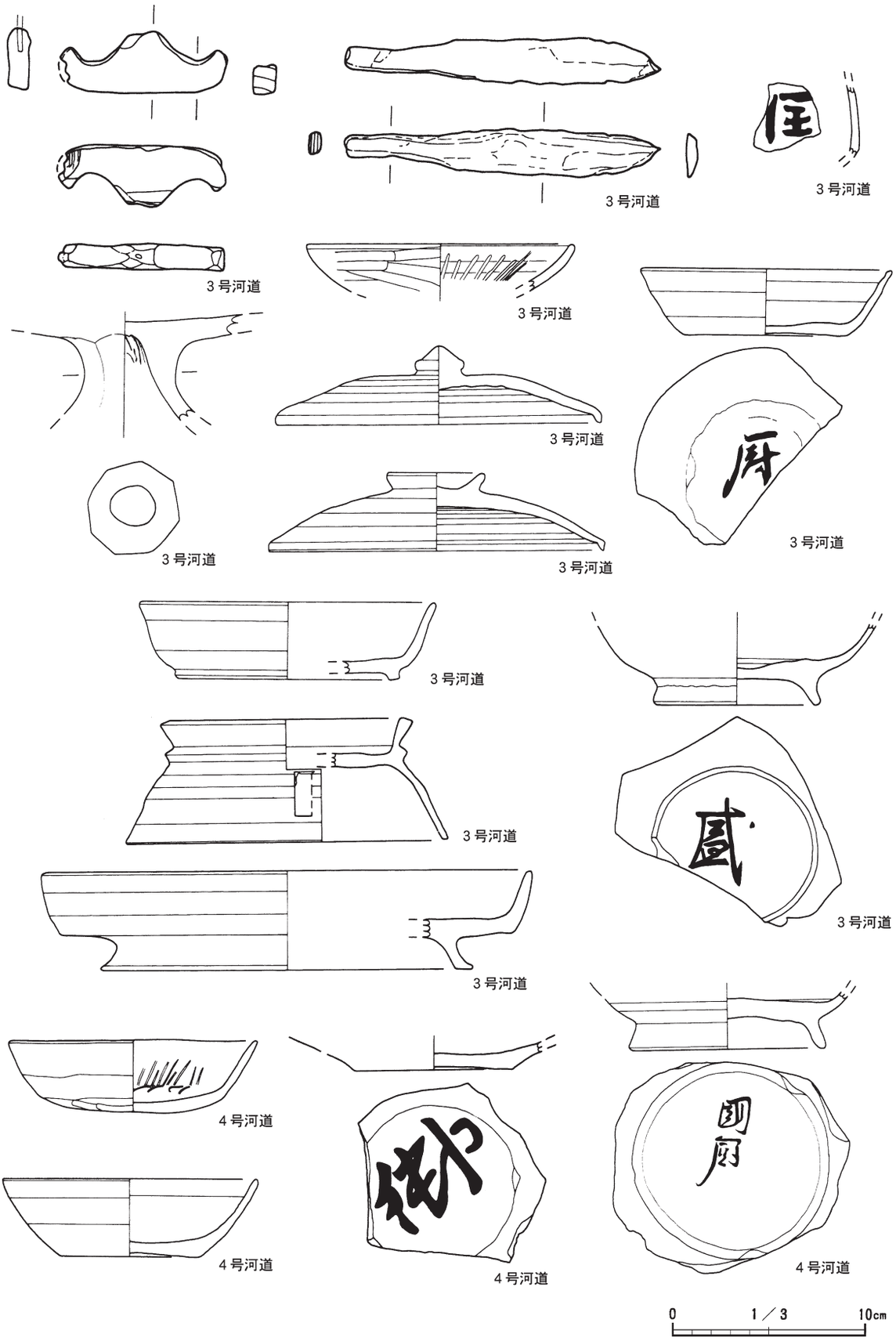


Fig.33　元総社小学校周辺の主な出土遺物(3)

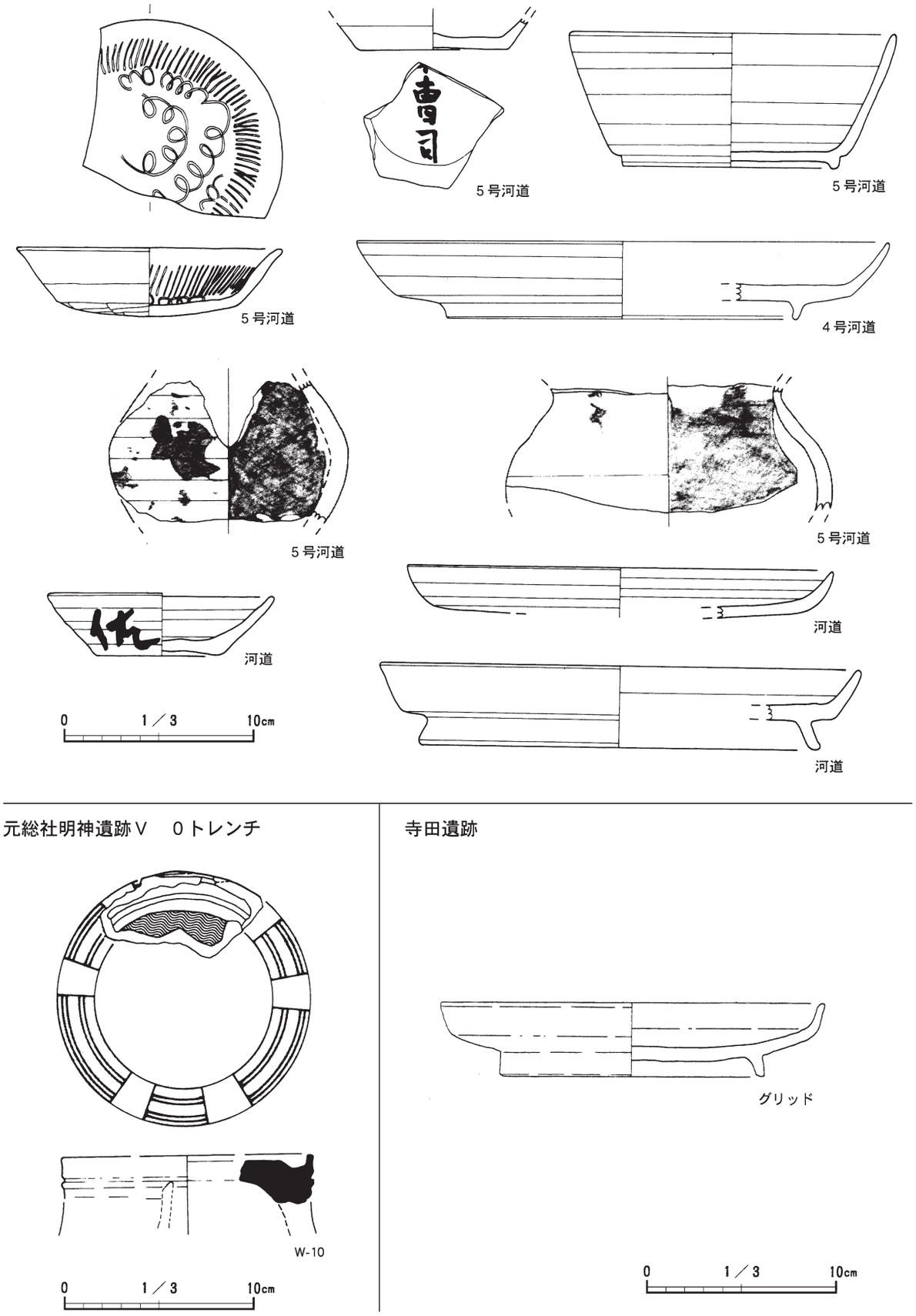


Fig.34　元総社小学校周辺の主な出土遺物(4)

の調査も行われている。この２つの遺跡からは上野国府に関連すると考えられる遺物が多く出土しているが、まず、元総社明神遺跡Ⅷ27トレンチでは人形が出土している。さらに、元総社寺田遺跡では河道跡や奈良・平安時代の遺物包含層から多くの遺物が出土しており、八稜鏡・人形・斎串・木製品など祭祀に関係する遺物や、円面硯、土師器高坏、螺旋状暗紋をもつ坏形土器、須恵器盤などの官衙関連遺物のほか、「国」・「国厨」・「厨」・「曹司」の墨書土器も出土している。その他に漆付着土器、顔料付着土器、羽口などの工房に関連した遺物も出土している。

上野国府21ａトレンチW―１号溝跡から出土した遺物は、前述のとおり８・９世紀頃の遺物を主体としている。土師器では螺旋状暗紋を有する坏形土器や脚断面が多角形となる高坏が出土し、須恵器では蓋、坏、椀、盤、高盤、甕、瓶が出土している。土器としてはその他に黒色土器の蓋と盤が出土している。土器以外の遺物としては、漆付着土器、羽口片、転用坩堝片、鉄滓が出土している。こうした出土遺物のレパートリーは元総社寺田遺跡の出土遺物と似ている。元総社寺田遺跡は八稜鏡や人形の祭祀的な遺物以外は河道に廃棄されたものと考えられることから、21ａトレンチW―１号溝跡の出土遺物についても溝が埋没する過程で廃棄されたものと推定される。

なお、W―１号溝の性格については、前述のとおり断面形状が逆台形で南北方向の走行を持つことや、溝の中や周辺の遺跡で国府において使用された遺物が多く出土していること、さらに東約50mに掘立柱建物が存在すること（元総社小校庭遺跡）が想定されることなどから、掘立柱建物との有機的な関係は不明であるにせよ国府関連施設の区画溝であると考えられる。また、溝が存在した時期については、７世紀後半の住居を壊して溝が造られている点や、出土した遺物の年代から８世紀から９世紀にかけて存在したと推定される。なお、21ａトレンチの全体覆土や、攪乱のため遺構が検出できなかった21ｂトレンチについても、須恵器の蓋や盤、螺旋状暗紋を有する土器、鉄滓等のW―１号溝跡の出土遺物に共通する内容の遺物が出土している点から、W―１号溝がそのまま続いて存在したことが推定される。

⑵　元総社地内で検出される大溝（区画溝）について

元総社町周辺では閑泉樋遺跡の発掘調査以来、覆土中に浅間Ｂ軽石の堆積が認められる古代の大溝の検出が相次いでおり、その可能性のある溝も含めて、検出例は平成25年度末段階で21地点に及んでいる（Fig.35、Tab. 5）。これらの大溝は、覆土上部に浅間Ｂ軽石純層もしくは包含層が堆積するという点から12世紀初めにはかなり埋没していたことが推定されることや、大規模であること、さらには検出地点が直線的に並んでいることなどから国府域の区画に関連したものであるとの評価は以前からなされている（木津　1988他）。これまで検出されている区画溝21地点のうち、検出された地点の連続性や、検出状態から同一の区画溝と推定されるものが存在することは既に述べたが、そうした点も踏まえて区画溝を分類したところ、現段階で区画溝は９条存在したことが推定される。各検出地点における区画溝の寸法や走行等については Tab. 5 のとおりである。

①区画溝の走行について

南北方向のものは、区画溝Ｃ・Ｄ・Ｆ・Ｉ、若干角度が傾くがほぼ南北方向のものは、区画溝Ｂ、東西方向のものは、区画溝Ａ・Ｅでり、若干の振れている区画溝も含めると９条中７条の区画溝が東西南北を意識した走行を持つことが考えられる。区画溝ＧはＮ―49°―Ｅ、区画溝ＨはＮ―75°―Ｅをそれぞれ持っているが、検出されている地点は１ヶ所ずつであり、他に類似した走行の区画溝は現在のところ検出されていない。ただし、２条とも東へ傾く点で共通し、検出された地点も蒼海城本丸の南西方向に位置し、２地点とも比較的近い位置に存在する。

②区画溝の断面形状と硬化面について

区画溝の断面形状についても幾つかパターンが存在することが考えられる。まず、断面が逆台形のものが挙げられるが、区画溝Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｇ・Ｈ・Ｉが該当する。また、断面が浅いＵ字形を呈するものがあるが、区画溝Ｃ・Ｅが該当する。区画溝Ｆについては検出地点により断面形状に若干の差が見られ、基本的には元総社小見Ⅶ

遺跡（№15）のように逆台形のようではあるが、形状が崩れたためか、元総社小見Ⅱ遺跡（№16）では浅いU字形に近い形となっている。また、底面が畝状を呈していることも特徴的である。区画溝Ｆの内容についてもう少し触れると、元総社小見Ⅶ遺跡W―１号溝（№15）では覆土中に硬化した層が２面、元総社遺跡群（2）９トレンチW―３号溝（№17）では覆土中に硬化した層が３面それぞれ存在し、元総社小見Ⅱ遺跡W―４号溝（№16）の覆土は薄い硬化層がいくつも堆積したような状態で、轍状に細長く窪んだ部分に砂層が確認されている。これらの要素から、区画溝Ｆについては道路状遺構としての性格が指摘されている（前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2005）が、この区画溝が当初から道路として造られたのか、溝として掘削された後に埋没していく過程で道路として使用されたのかは不明とされている（前橋市埋蔵文化財発掘調査団　2006）。覆土中に硬化した層が存在する例は他にも見られ、推定上野国府６トレンチW―２号溝でも１面確認されている。

③区画溝の幅について

区画溝の幅については、区画溝の深さに対する遺構確認面の高さが遺跡により異なることから、当時の状況を厳密に把握することは非常に困難であるが、おおむね上幅で５m前後の規模であったことが窺える。断面形状が逆台形のものについては下幅で３～４m程度となっている。ここでも区画溝Ｆについて触れておきたいが、元総社小見Ⅶ遺跡W―１号溝（№15）、元総社小見Ⅱ遺跡W―４号溝（№16）、元総社遺跡群（2）９トレンチW―３号溝（№17）では、遺構の重複による検出状態の差はあるにせよ、ある程度近似した規模となっているが、さらに南の元総社蒼海遺跡群（13）５区W―３号溝では、規模が縮小している。

上記３つの観点から区画溝の様相をまとめてみたが、これらの区画溝が有機的にはどのような関連性をもつという点については、まだ材料も不足しており、言及は難しい。しかしながら、区画溝Ａ・Ｂ・Ｃについては溝の走る位置を推定していくと、それぞれ交点で繋がることが想定される。区画溝Ａ・Ｂについては、その規模や断面形状も共通していることから、一連の溝である可能性が高い。区画溝Ｃについては、区画溝Ａと規模が近似しているものの断面形状に差がある。なお、牛池川左岸の南北方向の区画溝については、寺田遺跡W―１号溝（№12。区画溝Ｄ）にも存在し、区画溝Ｄが区画溝Ｃよりも区画溝Ａに近似した印象を受ける。なお、寺田遺跡W―１号溝については、木津氏から国府の東辺の溝と評価され、クランク状に折れ曲がることで元総社明神遺跡の各トレンチで検出された溝（本文中の区画溝Ａ）と連続するものとして評価されている（木津　1988）。現段階では寺田遺跡W―１号溝と直線的に連続する溝も検出されていないため、直線的に北上し区画溝Ａと繋がるかどうかも現状では不明である。

なお、区画溝Ｉとした元総社寺田遺跡Ⅶ区４号溝については、南北方向の走行を持ち西へ直角に曲がることなどの検出状態から、何かしらの施設の区画溝の北東隅部分と推定される。この付近で発掘調査された事例はほぼなく、この区画溝がどのような施設に関連するものであるのかは不明であるが、この地点は国府域でも推定東山道国府ルートに近いことから興味深い遺構といえよう。

また、これら区画溝の機能を考える上では、これらが同時に存在したかどうかについても考えていかねばならない。これらの区画溝が存在した大まかな時期については、溝の覆土の上位に浅間Ｂ軽石の純層や包含層が堆積していることから、浅間Ｂ軽石の降下以前に掘削されたものであることについては問題ないと考えられる。しかしながら掘削の時期などのこまかな時期にまで迫ることは現状としては資料に乏しく難しいと思われる。ただし、覆土上位に浅間Ｂ軽石の純層や包含層が堆積していることや、元総社蒼海遺跡群（58）W―１号溝では、底面の出土遺物から10世紀もしくは11世紀には溝としての機能を停止していると考えられている（前橋市教育委員会 2014）ことなどから、この時期には廃絶していたことが予想される。

なお、元総社明神遺跡17トレンチW―33号溝・Ｋトレンチ検出の溝（区画溝Ｅ）については、区画溝Ａの線から３町南に位置しているとされ、国府の地割を考える上では参考になり得るが、覆土から中世の溝である可能性が高いとされている（前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1986）。

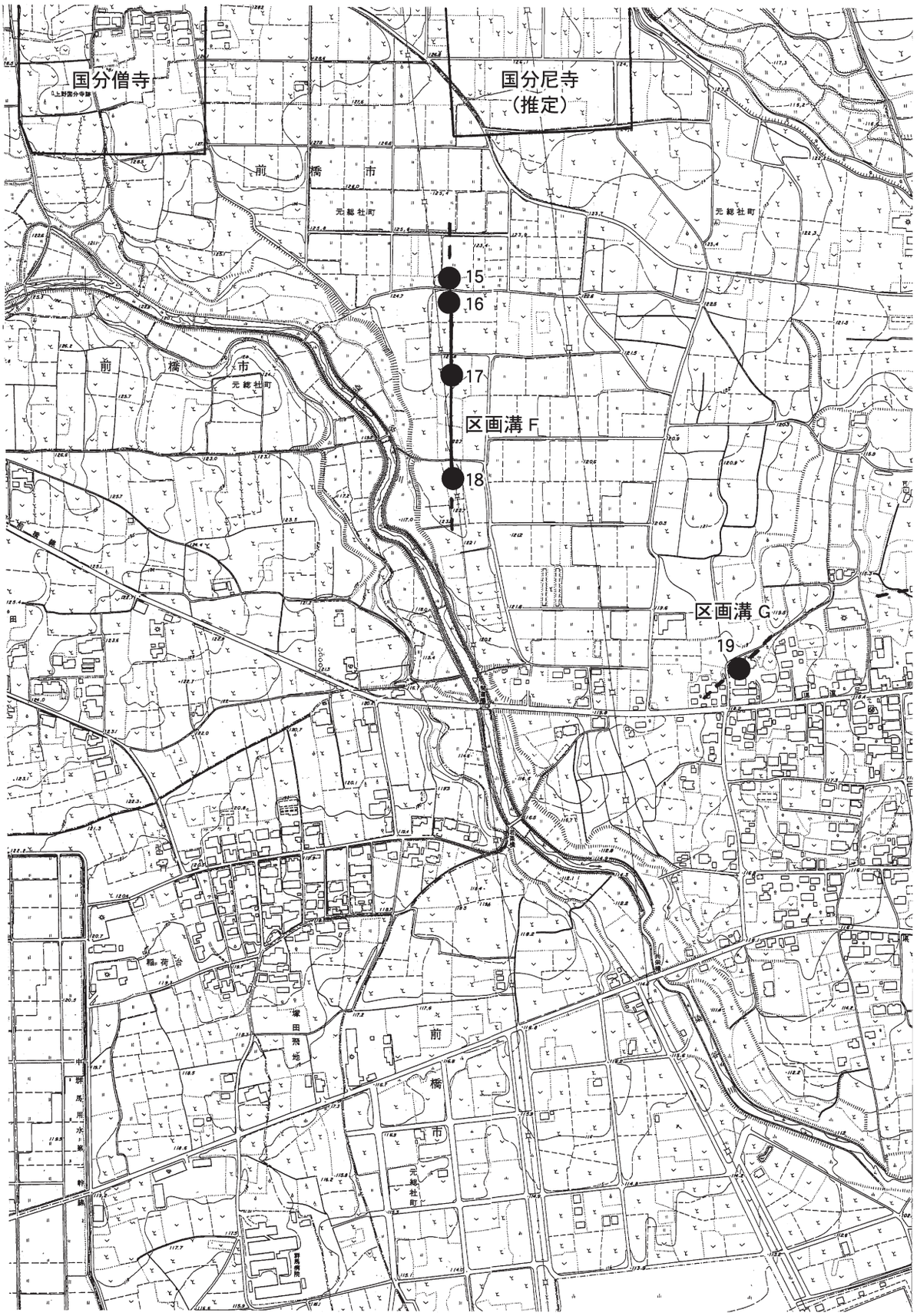
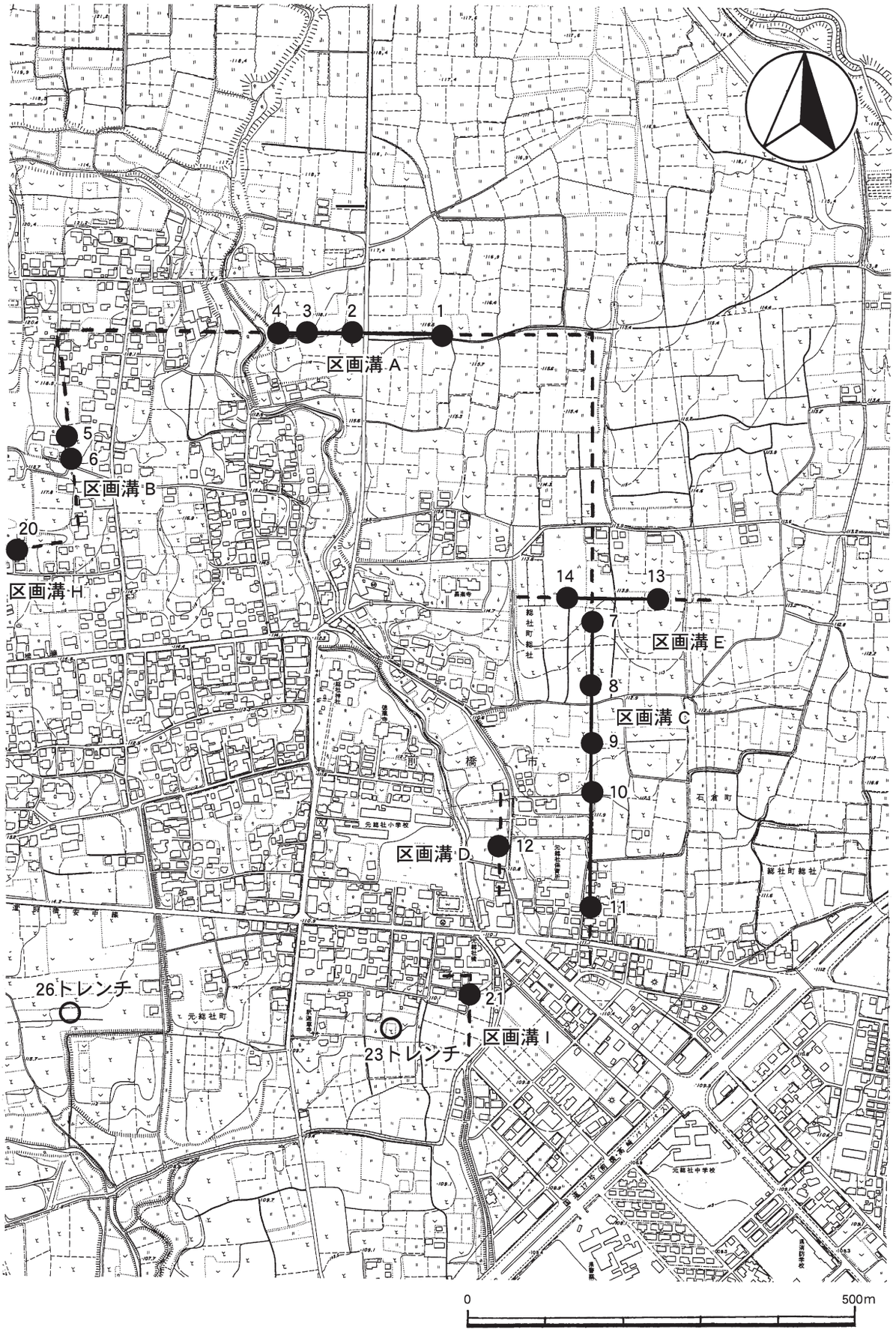


Fig.35　元総社地内の大溝（区画溝）


4
3
2
1
区画溝 A
5
6
区画溝 B
20
区画溝 H
14
13
7
区画溝 E
8
区画溝 C
9
10
12
区画溝 D
11
26トレンチ
21
区画溝 I
23トレンチ
0
500m

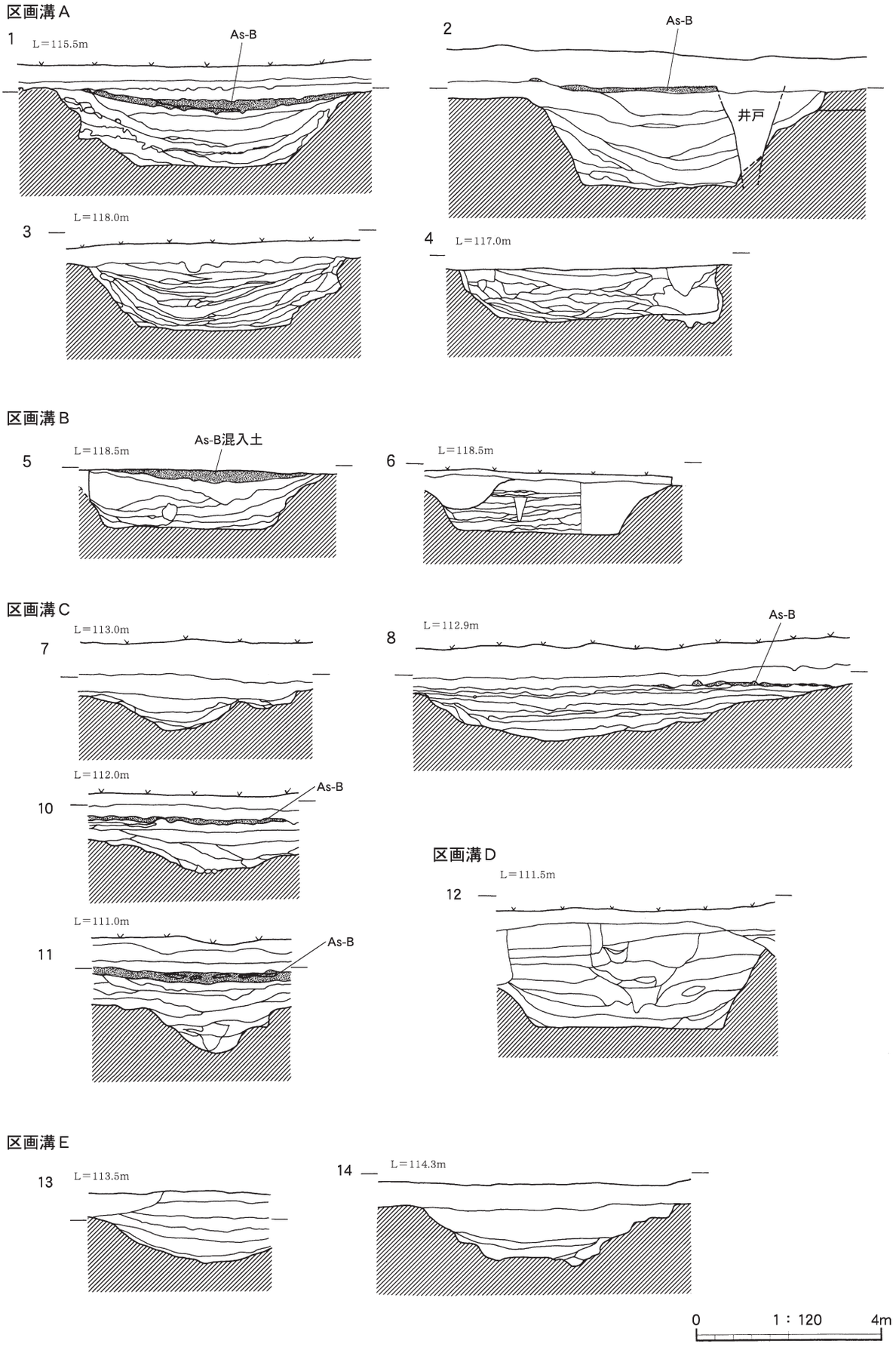
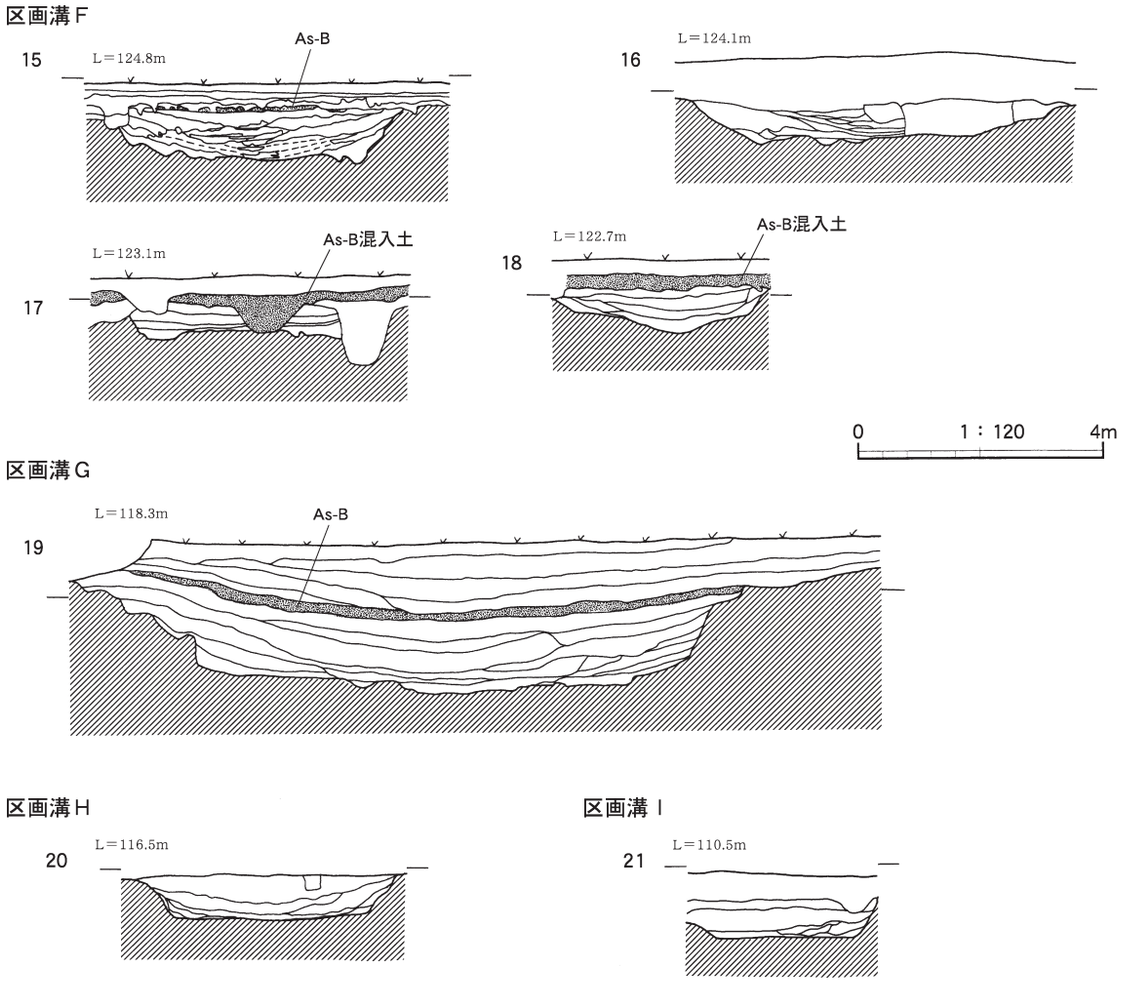


Fig.36　各区画溝の断面



Tab. 5　元総社周辺で検出された区画溝

No.	遺跡名・調査区名	遺構名	方向	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)	断面形	溝別	備考
1	閑泉樋遺跡	1号溝	N―89°―W	6.2	4	1.2	逆台形	A	覆土上部に As-B が堆積
2	閑泉明神北遺跡	W-1号溝	N―89°―W	6.4	3.2	2.2	逆台形	A	覆土上部に As-B が堆積
3	元総社蒼海遺跡群(7)	W-1号溝	N―86°―E	7.60	4.54	2.06	逆台形	A	
4	元総社蒼海遺跡群(9)	W-1号溝	N―87°―W	5.3	2.8	1.2	逆台形	A	
5	元総社蒼海遺跡群(14) 5トレンチ	W-32号溝	N―10°―W	(5.0)	3.5	1.17	逆台形	B	覆土上部に As-B 包含層あり
6	推定上野国府6トレンチ	W-2号溝	N―10°―W	5.1	3.4	1.37	逆台形	B	硬化面あり
7	元総社明神遺跡11トレンチ	11W-1号溝	N―8°―W	―	―	―	浅いU字形	C	
8	元総社明神遺跡8トレンチ	8W-1号溝	N―10.4°―E	7.2	―	1.2	浅いU字形	C	覆土上部に As-B が堆積
9	元総社明神遺跡6トレンチ	6W-1号溝	N―4°―W	7.5	―	1	浅いU字形	C	覆土上部に As-B が堆積
10	元総社明神遺跡3トレンチ	W-29号溝	N―4°―W	3.50	0.40	1.70	浅いU字形	C	覆土上部に As-B が堆積
11	元総社明神遺跡14トレンチ	W-23号溝	N―1°―W	―	―	―	U字形	C	覆土上部に As-B が堆積
12	寺田遺跡2区	W-1号溝	N―1°―W	5.29	4.08	1.42	逆台形	D	
13	元総社明神遺跡17トレンチ	W-33号溝	ほぼ東西	約5	約2	約1	逆台形	E	溝Aから南へ3町。中世か
14	元総社明神遺跡Kトレンチ		東西	約5.6	約2.5	約1.1	浅いU字形	E	溝Aから南へ3町。中世か
15	元総社小見Ⅶ遺跡	W-1号溝	N―1°―W	6.25	3.20	0.82	ほぼ逆台形	F	底面が畝状。硬化面あり
16	元総社小見Ⅱ遺跡	W-4号溝	N―2°―W	4.43	3.48	0.70	浅いu字形	F	底面が畝状。硬化面あり
17	元総社蒼海遺跡群(2) 9トレンチ	W-3号溝	N―2°―W	3.28	3.04	0.24	ほぼ逆台形？	F	覆土上部に As-B 包含層あり
18	元総社蒼海遺跡群(13) 5区	W-3号溝	N―30―E	2.34	1.76	0.18	ほぼ逆台形	F	覆土上部に As-B 包含層あり
19	元総社蒼海遺跡群(36) 4区	W-1号溝	N―49°―E	7.45	4.90	1.65	逆台形	G	覆土上部に As-B が堆積
20	元総社蒼海遺跡群(58)	W-1号溝	N―75°―E	4.26	3.12	0.71	逆台形	H	
21	元総社寺田遺跡Ⅲ区	4号溝跡	ほぼ南北	―	約3	―	逆台形	I	西へ直角に曲がる

※各溝の走行・規模については、基本的に報告書記載の数値に順じた。ただし、走行については必要に応じて再計測を行った。
※推定上野国府6トレンチW―2号溝の規模については、報告書の記載に誤りがあったため、この表の数値を正しい数値としたい。

以上のとおり、元総社地区内おいて検出された区画溝について概観を述べてきたが、このような国府に関連する区画溝の例については、上野国周辺の国では、下野国府、常陸国府で検出されている。

常陸国府では、北区とされる常陸国衙北側の区域の調査で、東西方向（SD ２）１条、南北方向（SD １）１条の合計２条が検出されている。SD １の規模は上面幅約3.5m、底面幅2.85m、深さ80㎝で断面形状が逆台形となっている。SD ２の規模は、確認面での幅約2.7mから約４m、トレンチ調査の結果、上面幅約3.65m、底面幅約3.1m、深さ約75㎝で断面形状が逆台形となっており、北側約５mをより小規模の溝 SD ４・８が東西方向に並走するように存在する。この大溝は国庁北辺溝とも考えられるが、官衙ブロックを区画した溝の可能性が高いという（山中　2001）。

下野国府では古代の溝が多く検出されている中で、国庁南側の SD-089•103、国庁東側の SD-146が規模や形状的に近似している。SD-089は正殿の約130m南、SD-103は同じく約230m南で検出されている。ともに東西方向に走行をもち、SD-089は幅約４m、深さ約0.4mの規模をもつ。また SD-103は遺構検出面で幅約5.6m、深さ約1.0mで、断面形状は逆台形となっている。SD-146は正殿の約270m東の地点で検出され、南北方向の走行を持ち、断面形状が逆台形となっている。溝は改修されており、前期（Ａ期）は幅約4.0m、復元した深さ約1.1mで、後期（Ｂ期）は幅約5.8m、深さ約0.5mの規模となっている。本大溝の位置づけとしては、報告書中で下野国府の東限を区画するものとしている。

なお、武蔵国府では、国衙西辺の南北方向の溝（溝ＧとされるM68-SD ３・６・15、M78-SD14）の規模が、M78-SD14で幅約4.00m、深さ約2.10mを測り古代の溝としては最大規模を計るという。

今年度調査した23・26トレンチは、これらの区画溝が国府域を区画するものであるとの位置づけに則り、これまでの発掘調査で検出されてきた区画溝（特にここでは区画溝Ａ・Ｂ・Ｃ）の想定線や地割を元にして設定された国府域を四周する想定区画溝の線上に位置しているものである。残念ながら23・26トレンチともに、区画溝の検出には至らなかった。

元総社町周辺で検出された大溝のうち東西南北の方向に乗らない斜め方向の溝が数条存在することは既に述べたが、特に元総社蒼海遺跡群（58）Ｗ―１号溝（№20。区画溝Ｈ）については、検出された規模で上幅約４m、下幅約３m、深さ0.7m、断面が逆台形となっており、規模•形状ともに元総社地区で検出される区画溝の典型的なものである。しかしながら、Ｎ―75°―Ｅの走行をもち、平成25年度調査に先立ち想定された国府域の区画溝では、区画溝Ｂとした溝を西辺の溝と想定しており、それよりも西での区画溝の検出は意外であり、なおかつ検出された位置も区画溝Ｂに近く、このまま溝を延長すると、蒼海城本丸の南東付近で繋がる可能性がある。

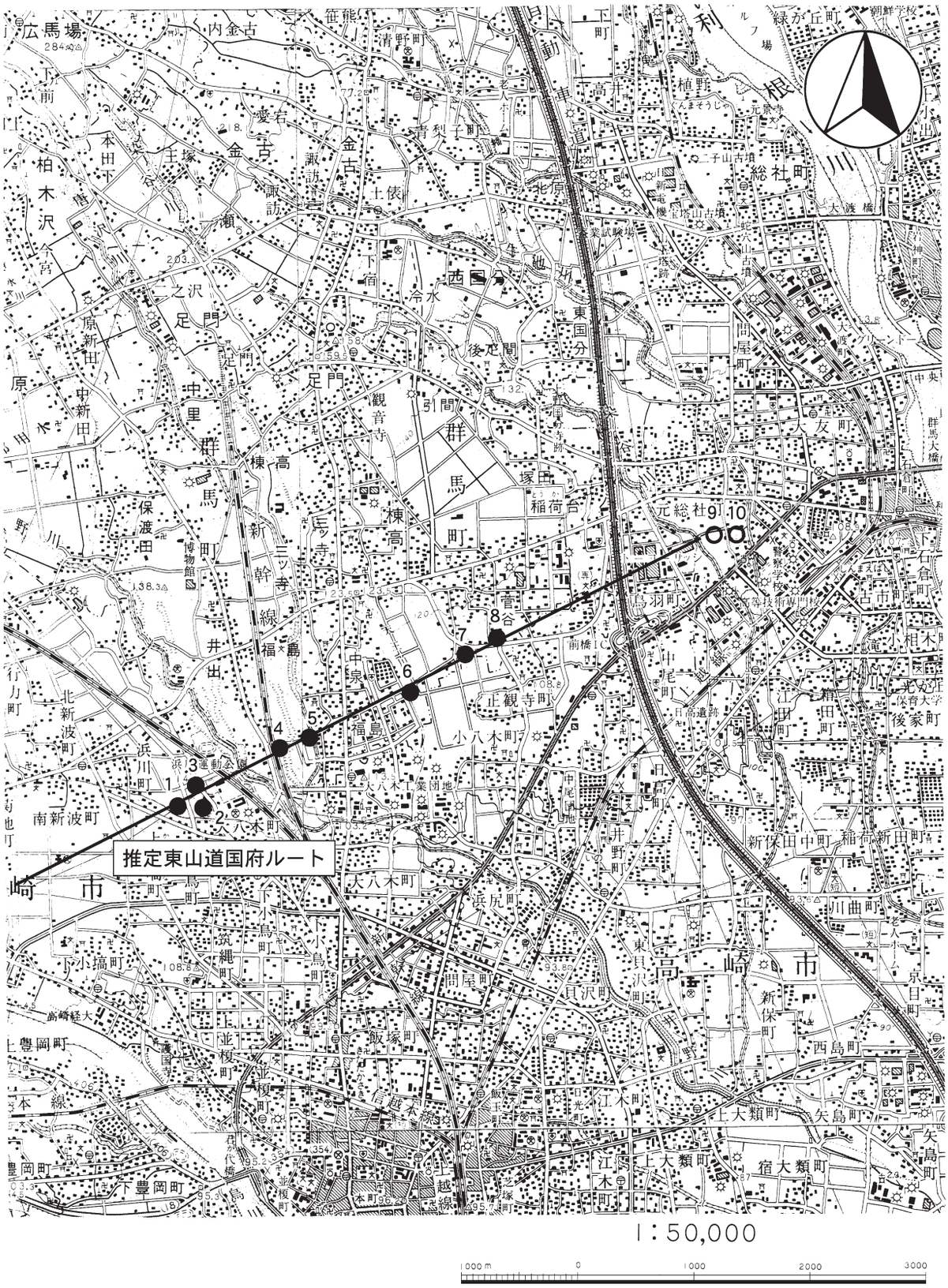
今後、これら区画溝と考えられる大溝について、その時期差や連続性を解明することが、その性格を考える上で重要であると考えられるため、引き続き調査を続ける必要がある。

⑶　東山道駅路国府ルートについて

今回範囲内容確認調査を実施した地点で、東山道駅路国府ルートの解明を目的として24ａ・24ｂ・25トレンチの発掘調査を実施したが、道路状遺構の検出や、それに関連した遺構は確認できなかった。この調査結果だけでは東山道駅路は推定ルート上を通らないこととなる。

ただし、今回調査を実施した地点は、推定ルート直上ではなく、推定ルートに沿った地点で調査を実施した。25トレンチは土の堆積状況は比較的良好であったが、24ａ・24ｂトレンチは土の堆積状況が良好ではなかった。特に24ａトレンチは地山の総社砂層を掘り込む作業が行われており、攪乱に近い状態を呈していた。

東山道国府ルートの推定ルートは、染谷川を南栄橋で渡河し、通称「しんぼりっかわ（新堀川）」と呼ばれる用水路「芦田堰」に沿うように概ねＮ―65°―Ｅの方角へ進んでいる。丁度、釈迦尊寺の南付近で、芦田堰はほぼ東西方向に走行を変えるが、その先で芦田堰自体は直角に曲がり牛池川からの取水口に突き当たる。芦田堰は小河



1．寺ノ内遺跡　2．御布呂遺跡　3．浜川芦田貝戸遺跡　4．熊野堂遺跡　5．西浦南遺跡
6．推定東山道（福島飛地・高貝戸）　7．菅谷石塚遺跡　8．正観寺遺跡
9．推定上野国府24a・24b トレンチ　10．推定上野国府25トレンチ

Fig.37　推定東山道国府ルートと関連遺跡

Fig.38　推定東山国府ルートとその周辺

小
河
原
堰
石倉町
総社町総社
前橋警察署
石倉町
地割
元総社保育所
元総社中学校
県消防学校
県警察学校
関東地建
前橋出張所
元総社水源地
古市町
前橋家畜市場
0
100
200
300
400
500m
1：5,000

原堰の分水堰で、小河原堰が元総社小学校付近で牛池川に合流したその下流で牛池川から取水し、釈迦尊寺の南側付近を西へと流れて染谷川の左岸に到達し、現在ではサイフォンで川の右岸へと渡った後に鳥羽町方面へと流れている。地形的には、牛池川からの取水直後は台地を横切るように流れ、釈迦尊寺の南付近で北東方向から続く谷に出て、その谷の南の端を染谷川に向かって西へと進む。なお、この谷は蒼海城の縄張の南端とされ、大きな堀の役割を果たしている（Fig.38）。推定ルートと考えられている道路は現状幅３m程度の道路で芦田堰の南側を沿うように続いているが、24ａトレンチの北端で近世以後と考えられる溝跡（W―１号溝跡）が検出されていることから、この道路の通る位置自体が、かつて芦田堰の水路部分であった可能性がある。また、この道路自体が染谷川に近づくにつれて用水路の掘削に際して作られたと考えられる堤状の土盛りの上を通っており、少なくとも、この道が現状のまま古代まで遡るとは考えにくい。また25トレンチ付近では、用水路が流れている部分は前述のとおり台地上と考えられる。谷自体は釈迦尊寺の南を北東方向へと続き牛池川へと至ると考えられる。現状でも釈迦尊寺の南に墓地が存在するが墓地の南側は低地となり田として利用されている。この低地は北東へ続き、その地形をなぞるように土地も田として利用されている状況が見て取れる。現状では谷の一番東にあたる部分は住宅地となり土地の利用状況が変化しているが、かつて田として利用されていたことが地図により理解できる。東山道駅路国府ルートの推定ルートについては地割に基づいて推定されていることはすでに述べたが、地割を観察した場合、高崎市方面から直線的に続く地割が染谷川の東付近から不連続な状態となり、現在の前橋安中線を横断した付近から再度直線的に続きながら石倉方面へ至る地割がかつて存在したことが地図から読み取れる（Fig.38）。釈迦尊寺の南から前橋安中線までの区間が不連続になっている理由として芦田堰の開削の影響が考えられるとするならば、谷地形に沿ったラインがこの不連続の区間を直線的に繋ぐことから、この谷沿いが推定ルートとして有望ではないかと考えられる。

東山道駅路国府ルートについては、金坂氏の想定するルート（金坂　1978）上において高崎市内では道路状遺構が検出されていることについては冒頭で述べたが、高崎市正観寺町の正観寺遺跡以東では、推定ルート上で明瞭な道路遺構が確認されていないため、未だ推定の域を脱しきれない状況となっている（Fig.37）。しかしながら、元総社町付近での国府ルートの推定にあたっては、高崎市内から連続して検出されている道路状遺構の位置を元にして引かれた直線の延長上に地割が存在すること、地割がなくてもルートの延長が沿うような地形が存在している。これらの状況を根拠としてルートを推定するならば、やはり従来から言われている想定ルートが有望と考えられる。

⑷　国府関連遺物の分布について

上野国府の調査については、範囲内容確認調査と並行して、国府に関連する既出資料の集成作業を実施してきた。大まかな傾向としては、鳥羽遺跡や上野国分僧寺・尼寺中間などの発掘調査が実施されている関越自動車道沿いや、元総社明神遺跡や元総社寺田遺跡の発掘調査が実施された総社神社・元総社小学校周辺で国府関連の遺物が多く出土している。

平成25年度の発掘調査でも放射状・螺旋状暗紋を有する土器や、須恵器盤等が多く出土している。

総社神社境内に位置する19トレンチや、元総社小学校校庭に位置する21ａ・21ｂトレンチの出土遺物については、これまでも元総社明神遺跡や元総社寺田遺跡で国府関連遺物が多く出土しており、元総社小校庭遺跡の掘立柱建物とあわせて「官衙エリア」及び「祭祀エリア」の遺物群の一部として考えることができるだろう。

今回、区画溝の有無の確認のため23・26トレンチ、東山道駅路国府ルートの有無の確認のため24ａ・24ｂ・25トレンチの調査をそれぞれ実施したが、まず天神地区に位置する26トレンチの調査では、螺旋状暗紋を有する坏形土器や須恵器盤のほか、鉄滓、羽口片、漆付着土器片も溝や落ち込み等から出土している。このトレンチの北には、八稜鏡、銅椀、銅製鉈尾、円面硯、白磁、緑釉陶器が多く出土している平安時代の集落である天神遺跡が

存在している。谷を隔てた南側の落合地区に位置する24ｂトレンチにおいても放射状の暗紋を有する坏形土器と須恵器盤の破片が僅かながら出土している。ここでは表土の下層が地山への漸位層となっており、目立った遺構も検出されていない。また、さらに東で、釈迦尊寺と谷を挟んだ南側（落合地区）に位置する25トレンチにおいても暗紋を有する坏形土器が破片ではあるが出土している。このトレンチではその他に墨書土器のほか、須恵器、灰釉陶器、漆の付着した土器の破片が出土しており、検出された遺構は溝と土坑程度であるが出土した遺物量は多い。

過去に実施されてきた発掘調査により、天神地区は平安時代の集落とあわせて、八稜鏡などの特殊な遺物のほかに緑釉陶器の破片が多く出土し、国府域推定範囲の中でも高級陶磁器などが多く出土するエリアとして位置づけされてきたが、今回の調査で、暗紋を有する坏形土器や須恵器盤などの官衙関連遺物の出土も確認できた。さらに、釈迦尊寺の谷を挟んだ南側の25トレンチにおいても暗紋を有する坏形土器が出土したことにより、国府に関連する遺物のうち暗紋を有する土器や盤の分布は、これまで遺物の出土がほぼなかった天神地区や落合地区でも比較的多く出土したことから、今後、国府域を考える上で見逃せない事象になると考えられる。

なお、釈迦尊寺の東に位置する23トレンチにおいては、国府に関連する遺物は出土しなかった。検出された集落も10世紀代の住居と考えられ､国府周辺では比較的新しく住居が営まれた集落エリアだった地域と考えられる。

2　今後の課題

平成25年度の範囲内容確認調査では、国庁推定地４案以外の調査として、総社神社境内・元総社小学校校庭の内容確認調査、大溝（区画溝）の有無の確認調査、東山道駅路国府ルートの解明を目的とした調査を実施した。結果として元総社小学校校庭では、古代の溝が検出され、そこから「本」･「大家」の墨書土器のほか、国府関連施設で使用したと考えられる土器が出土した。この溝は国府関連施設の区画溝と考えられることや、元総社小校庭遺跡ですでに検出されている２棟の掘立柱建物との関連性も含めて、この溝が付随する施設の検証、さらには元総社小学校周辺に存在が推定される国府関連施設の内容を解明していくことが必要である。

大溝（区画溝）については、平成25年度の調査に先んじて想定したライン上では大溝が確認できなかった上に、想定していなかった地点で大溝が検出されたことから、これら区画溝を総合的に捉え直して、想定のラインを再考し調査する必要がある。

東山道駅路国府ルートについては、平成25年度の調査では道路遺構が確認できなかったが、調査した地点は推定ルートに隣接する地点における調査であったので、今後は推定ルート付近でさらに拡大した調査が必要と思われる。

【主要参考文献】

石岡市教育委員会　2001『常陸国衙跡―石岡小学校温水プール建設事業に伴う調査―』
石岡市教育委員会　2009『常陸国衙跡―国庁・曹司の調査―』
金坂清則　1978「上野国」『古代日本の交通路』Ⅱ　藤岡謙二郎編
木津博明　1988『上野国分僧寺・尼寺中間地域』３　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
群馬県　1991『群馬県史』通史編２
群馬県教育委員会　1983『東山道』群馬県歴史の道調査報告書第16集
群馬県立歴史博物館　2001『古代のみち―たんけん！東山道駅路―』第70回企画展図録
㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1993『元総社寺田遺跡Ⅰ』
㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1994『元総社寺田遺跡Ⅱ』
㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1996『元総社寺田遺跡Ⅲ』
小宮俊久　2013「上野国の東山道駅路の現状と課題―群馬県東部を中心として―」『白門考古論叢』Ⅲ　中央考古会・中央大学考古学研究会
栃木県教育委員会　1981『下野国府跡Ⅲ』
栃木県教育委員会　1982『下野国府跡Ⅳ』

栃木県文化振興事業団　1983『下野国府跡Ⅴ』
奈良文化財研究所　2004『古代の官衙遺跡　Ⅱ遺物・遺跡編』
新田町教育委員会　1994『境ヶ谷戸・原宿・上野井Ⅱ遺跡』
府中市教育委員会・同遺跡調査会　2009『武蔵国衙跡１　本篇』
府中市教育委員会・同遺跡調査会　2009『武蔵国衙跡１　資料篇』
府中市郷土の森博物館　2005『古代武蔵国府』府中市郷土の森博物館ブックレット６
前橋市　1971『前橋市史』第１巻
前橋市教育委員会　1982『元総社明神遺跡Ⅰ』
前橋市教育委員会　1983「閑泉樋遺跡」『昭和57年度文化財調査報告書』13
前橋市教育委員会　1984『元総社明神遺跡Ⅱ』
前橋市教育委員会　2008『天神Ⅲ遺跡』
前橋市教育委員会　2011『元総社蒼海遺跡群（36）』
前橋市教育委員会　2013『推定上野国府～平成23年度調査報告～』上野国府等範囲内容確認調査報告書Ⅰ
前橋市教育委員会　2013『推定上野国府～平成24年度調査報告～』上野国府等範囲内容確認調査報告書Ⅱ
前橋市教育委員会　2014『元総社蒼海遺跡群（57）、元総社蒼海遺跡群（58）、元総社蒼海遺跡群（59）』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1986『寺田遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1986『元総社明神遺跡Ⅲ・Ⅳ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1987『天神遺跡発掘調査報告書』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1989『天神Ⅱ遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1990『元総社明神遺跡Ⅷ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1990「閑泉明神北遺跡確認調査」『元総社明神遺跡Ⅷ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1992『元総社明神遺跡Ⅹ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1994『元総社明神遺跡Ⅻ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1997『元総社明神遺跡XIII』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　2002『元総社蒼海遺跡群　元総社小見Ⅱ遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　2005『元総社蒼海遺跡群（3）　元総社小見Ⅶ遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　2006『元総社蒼海遺跡群（2）』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　2006『元総社蒼海遺跡群（7）』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　2007『元総社蒼海遺跡群（9）・元総社蒼海遺跡群（10）』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団　2008『元総社蒼海遺跡群（14）、元総社蒼海遺跡群（19）』
松島榮治　1986「元総社小校庭遺跡」『群馬県史』資料編２　群馬県
箕輪健一　2013「常陸国府跡―国府の成立と展開―」『東国の古代官衙』古代東国の考古学１　須田勉・阿久津久編
山崎　一　1971『群馬県古城墨址の研究』上巻　群馬県文化事業振興会
山中敏史　2001「常陸国衙跡の調査成果と検出遺構の検討」『常陸国衙跡』石岡市教育委員会

Ⅶ 寄　稿

1　元総社小学校校庭出土の黒色土器について

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　神　谷　佳　明

はじめに

元総社小学校校庭における発掘調査では墨書土器杯蓋及び盤が出土している。この黒色土器杯蓋及び盤はロクロによる整形、酸化焔焼成で内面に吸炭させたものである。この土器ついて若干のコメントを求められたのでここに記述するものである。

今回の発掘調査は小規模なトレンチ調査ではあるが、出土した土器には土師器や須恵器の杯、盤、高盤などの供膳具が比較的多く出土している。この中には畿内藤原宮期でみられる口唇部に特徴のある大型の須恵器盤や平城宮でみられる脚部を多角形に面取りした土師器高杯など宮都的な要素をもつ土器も出土している。また、隣接する元総社寺田遺跡[1]からは「国厨」・「厨」・「曹司」などの墨書土器が出土し、直接国府の存在を裏付ける資料が初めてみつかっている。元総社寺田遺跡からは墨書土器の他に円面硯や風字硯、土師器杯や須恵器杯・盤・高盤等の大量の供膳具土器、人形等の木製品などから館や厨等の官衙が存在していたと想定される地域である。

今回、コメントを記述する黒色土器杯蓋、有台盤も群馬県内の同時期の出土例は少ない土器である。まずは、この土器について事実記載の項目で記述されていることと重複するが再度記する。

第22図21ａ―27の杯蓋は口径19.7㎝と大型の器種である。器形は摘みが擬宝珠状を呈し、内面にカエリを有しない。整形はロクロ整形で天井部の中ほどは回転ヘラ削りが施されている。内面は丁寧なヘラ磨きが施されている。焼成は酸化焔焼成で外面の色調は橙色を呈し、内面は黒色処理を施されている。

第22図21ａ―28の盤は口径19.4㎝と大型の器種である。器形は高台が底部端部ではなく内側に貼付されている。整形はロクロ整形で底部は回転ヘラ削りが施されている。内面は全面に丁寧なヘラ磨きが施されている。焼成は酸化焔焼成で外面の色調はにぶい橙色を呈し、内面は黒色処理を施されている。

ともに製作技法はロクロ整形によるが、内面にヘラ磨きが施され、須恵器と土師器の両方の技法が取り入れられている。しかし、ロクロ整形であることと器形は県内の須恵器のなかに同様のものを見ることができることから須恵器工人によるものと考えられ、焼成は橙色と還元は行われていないが、胎土が硬質な状態に仕上がっていることなど窯を使用しての焼成が行われた可能性が高い。こうした、整形技法や焼成技法などの特徴は群馬県内でみられる黒色土器と同様のものである。また、この２つの黒色土器は出土がトレンチからのため共伴する土器から年代を求めることはできないが、その器形的特徴から８世紀中頃の年代観を与えられる。

研究史

まず、黒色土器であるが、群馬県内では内面または内外面を黒色処理した土器は６世紀から７世紀前半代の古墳時代土師器杯の内面に施したものと奈良時代から平安時代の杯・椀、一部壺などの貯蔵具に施したものが存在する。

黒色土器の定義については森隆氏による全国を対象とした研究[2]の中で「『いぶし焼きにより器面表面に炭素を吸着させて黒色処理を施した土器』のうち、『奈良時代に畿内の都城で出現し、定型化した土器』を始源とし、さらに『都城の黒色土器の影響下に平安時代以降の各地で生産された同種の土器』と定義されている。さらに補足的な定義として『器表面の緻密なヘラミガキ手法といぶし焼き手法とのセット関係』を挙げておく」とされている。この定義にしたがうと関東および東北地方から出土している古墳時代の土師器杯の内面に黒色処理を施したものは、ここで取り上げる黒色土器とは一線を画すことになる。森氏の定義ある奈良時代に畿内の都城で出現

したところに関しては巽淳三郎氏が平城宮内裏の調査報告書である「平城宮発掘調査報告書Ⅲ」の考察[3]で「黒色土器は水もれを防ぐために土器の表面に炭素を吸着させた焼き物で、一種の改良型土器とも言うべきものである。畿内では、8世紀以前には黒色処理の技法の伝統はなく、東日本の影響を受けて8世紀の初め頃に成立する。……省略……奈良時代を通じて生産されているが、極めて出土例は少ない。土師器工人の手によるため、土師器の器形と共通するものが多い。」とされている。この中で成立を8世紀の初め頃としているが、その事例は示されていない。

平城宮及び平城京発掘調査のなかでの黒色土器の出現に関する記載を見ると平城京内裏の発掘調査報告である「平城宮発掘調査報告書Ⅱ」[4]に内裏内の塵芥処理を目的とした土坑SK219からの出土がみられる。この土坑からは黒色土器2点と「天平宝字二年」(758年)と記載された木簡が出土しており。平城宮土器Ⅳに属すると言える。当時としてはこの年代が最も古い時期のものとみられていた。その後、資料の蓄積とともに黒色土器の初出も遡っている。長屋王邸・藤原麻呂邸の発掘調査報告書である「平城左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告書」[5]に掲載されている「東二坊々間路側出土土器『西側溝SD4699出土土器』」の記述に「……ここでは上層の黒色土器杯を紹介する。……省略……畿内における黒色土器は、平城宮土器Ⅱに属する薬師寺SE037出土土器、平城宮土器Ⅲに属する左京四条四坊九坪出土土器の例があるが、平城宮土器Ⅳ以降に普遍化する。……」とあることから平城宮土器Ⅱ期の段階、730年を前後する時期には量的には少ないが存在しているのは明らかである。

群馬県の黒色土器出土例は平安時代前期に多くみられる。この研究についても桜岡正信氏[6]や三浦京子氏[7]による論考がある。

桜岡氏は「内黒土師器の終焉と黒色土器の出現の間に、未だに半世紀近い時間差が考えられ、成整形技術・主体的分布に違いが認められることは、本件にあって黒色土器が内黒土師器をベースとしたものでないことを示唆するものである。また、黒色土器が終始同時期の須恵器・施釉陶器の原形を模倣し、オリジナルな器形をもたなかったことは、黒色土器が独立した生産体制のなかで生産された可能性が低いことを示すと考えられる。」としている。

三浦氏は「黒色土器も含めてロクロ使用・酸化焔焼成の土器は、須恵器生産工人の手になるものと想定しているが、……」と桜岡氏の論考に同調している。また、群馬県での黒色土器の出現については太田市成塚石橋遺跡86号住居跡から出土した椀が底部を全面回転ヘラ削りであることと、共伴する須恵器が8世紀第3四半期の年代観が与えられる。高崎市熊野堂遺跡105号住居跡から出土した口径24cmの大型の椀が成塚石橋遺跡出土のものと形態が同様でることと、共伴して出土している土器が8世紀後半代の年代観が与えられる例を挙げている。出土例が少ないため明言を避けているが、記述から黒色土器の出現は8世紀第3四半期ととらえられる。

8世紀前半代の黒色土器

元総社小学校校庭から出土した黒色土器は前述のように8世紀中頃の年代観が与えられることから、8世紀中頃及びそれ以前の黒色土器について検討を行うことにする。研究史の項で記述したように畿内平城宮や平城京で黒色土器が使用され始めたのは平城宮土器Ⅱ期の西暦730年を前後する時期である。群馬県内では1990年に三浦氏が論考を発表した段階では8世紀第3四半期が出現期と考えられていた。今日、黒色土器の出土例も増加し、8世紀前半代とみられるものも存在する。しかし、黒色土器の大部分は9世紀以降のものが主体で8世紀代のものはわずかである。そうした中、近年太田市北東部に所在する山田郡衙関連とみられる遺跡群から数点であるが、8世紀代前半代から中頃の黒色土器の出土例がみられる。

太田市東部は古代では山田郡域であったと想定される地域である。その山田郡衙については新田郡衙のように郡庁や正倉等の遺構が検出されてはいないが、「古氷」など郡衙の存在する地名が残ることや太田市楽前遺跡や鹿島浦遺跡からはやや大型の掘方をもつ掘立柱建物の検出や獣足付円面硯など陶硯の出土により官衙付随施設の存在が窺われている。また、楽前遺跡の西側に位置する太田市大道東遺跡は出土遺物に多量の須恵器が存在してい

るが、その多くが歪んだり、焼成時に窯内部で他の個体が付着したものなど製品とは言えない不良品が多くみられることから、近隣に存在する太田金山古窯跡群の生産または流通に係わる遺跡と推定される。

楽前遺跡[8]からは掘立柱建物が50棟近く検出されているが、遺構から郡衙及び付随する施設を想定することは難しいとされている。しかし、遺物には郡名を記した墨書土器やクルル鍵、円面硯などが出土している。８世紀代の黒色土器は４区17号竪穴建物跡から杯、４区１号溝から杯蓋、258号竪穴建物跡から椀、294号竪穴建物跡から鉢、1054号土坑から椀が出土している。４区17号竪穴建物跡から出土した黒色土器杯は内外面ヘラ磨きが施されている。年代はその形態や共伴する土器から８世紀第２四半期に比定できる。４区１号溝から出土した黒色土器杯蓋は一見すると土師器と見違える様相を呈している。その形状は一般に出土する形態とやや異なり、摘みは角柱状ともいえる周囲を細かく面取りした状態で、天井部は端部が緩い弧を描いてそのまま口唇部に移行する。整形はロクロ整形で外面にやや雑なヘラ磨きが施されている。年代は出土遺構が溝であるためか共伴する土器には８世紀前半代から９世紀にかけて幅広く見られるが、形態的特徴から８世紀前半代に比定できる。258号・294号竪穴建物跡から出土した黒色土器は共伴する土器から８世紀後半代、1054号土坑から出土した黒色土器椀は内外面ともヘラ削りが施されることや共伴する土器群から８世紀第２四半期に比定できる。

鹿島浦遺跡[9]から８世紀代の黒色土器は１・２区３号住居跡から杯蓋、10号住居跡から椀２点、15号住居跡から椀、16号住居跡から椀２点、32号住居跡から椀、50号住居跡から杯蓋２点と椀、41号土坑から椀の10点が出土している。これらの黒色土器はロクロ整形により、内面のみ黒色処理が施されている。この他に１・２区（以下、区は省略）36号住居跡からは県内では出土例が見られない土師器杯の内面に黒色処理を施したものが出土している。

このうち、８世紀前半代に比定できる黒色土器は10号住居と16号住居跡から出土した３点があげられる。10号住居跡からは椀２点が出土しているが、１点は底部から体部までで口縁部が欠損しているため詳細は不明である。ともに内外面とも丁寧にヘラ磨きが施されている。口縁部まで残るものは外面の口唇部下に凹線が巡る。10号住居跡からは多くの土器が出土している。この住居跡に共伴するものには胴部の整形が縦方向だけのヘラ削りの土師器甕や口縁部が内湾する形態の土師器杯、小型の須恵器杯に伴う内面にカエリを有する蓋など７世紀第４四半期に比定されるものも存在するが、土師器杯の大部分は８世紀第１四半期から第２四半期に比定できる。黒色土器は埋没土からの出土であるが、丁寧なヘラ削りが施されている点などからこの住居跡に伴うものと考えられ、８世紀前半代の年代が比定できる。

16号住居跡から出土した椀は10号住居跡とから出土したものと同様に内外面とも丁寧なヘラ削りが施され、口唇部下に凹線が巡る。この住居跡から出土した土器は床面から20cmほどの高さで住居廃絶後の窪地に廃棄されたものであるため、住居自体の年代は比定できないが、形態や整形の特徴から10号住居跡の黒色土器椀と同様な年代が与えられる。

鹿島浦遺跡からは８世紀前半代に比定できる黒色土器については上記のとおりであるが、いずれも内外面に丁寧なヘラ削りが施され、口唇部下に沈線が巡などの特徴がみられる。

なお、36号住居跡からは土師器杯の内面に黒色処理が施されたものが出土している。この杯は内面の体部から口縁部に２段から３段螺旋状暗文が施されており、畿内産土師器の影響を受けたものである。

大道東遺跡[10]からは11点の黒色土器椀が出土している黒色土器椀は内外面とも丁寧なヘラ磨きが施されたものや内面のみにヘラ磨きが施されたもの、底部に糸切り痕が残るものなどがみられる。出土した遺構はすべて竪穴住居跡では１点を除きすべて８世紀代の住居跡９軒からである。この８世紀代の住居跡のうち１軒を除き８世紀第３四半期に比定される。残り、１軒は８世紀第１四半期に比定される住居跡であるが、出土した黒色土器は底部に回転糸切り後回転ヘラ削りが施されており、土器自体は８世紀第３四半期以降に比定されるものである。８世紀第３四半期の住居跡から出土した黒色土器には内外の全面にヘラ磨きが施されたものがみられ、住居跡の

年代よりやや遡る可能性をもつものもみられるが、四半世紀を遡る要素は見られない。

次に元総社小学校校庭遺跡が所在する推定国府域について見てみる。推定国府や推定国府周辺からも黒色土器は出土しているが、その大部分は9世紀平安時代以降のものである。その中で、三浦氏が取り上げた中尾遺跡の黒色土器の他に下東西清水上遺跡と元総社西川遺跡・塚田中原遺跡からの出土をみることができる。特に元総社西川遺跡・塚田中原遺跡から出土したものは元総社小学校校庭遺跡と同様な形態を呈する個体である。

下東西清水上遺跡(11)は前橋市の西部、国府域や山王廃寺の北側に位置する。隣接する下東西遺跡では7世紀末から8世紀初頭にかけての豪族居宅が検出されている。黒色土器は258号竪穴建物跡から出土している。この黒色土器は内面の底部から体部下半にかけてヘラ磨きが施されている。外面底部は糸切り後周囲に回転ヘラ削りを施している。共伴する土器は8世紀第4四半期に比定される。

元総社西川遺跡・塚田中原遺跡(12)は前橋市と高崎市の市境に位置し、国府域の西、上野国分寺の南、染谷川を挟んだ対岸に位置する遺跡である。発掘調査では竪穴住居が主体であったが、獣脚付円面硯や緑釉陶器唾壺など一般集落では出土しない遺物が出土しており、国府、国分寺との関連が窺える。黒色土器は6号住居から出土しており、その器形は元総社小学校校庭から出土している盤と同様である。口径は21.0cmと大型で整形も内面は全面的にヘラ磨きが施されている。出土した住居跡からは黒色土器盤の他に土師器甕、須恵器長頸壺などが出土している。土師器甕は8世紀第4四半期の年代が比定されるが、出土位置が覆土中のため共伴するかは明確ではない。黒色土器についてはその形態や整形などから8世紀中頃の年代が比定される。

県内から出土した8世紀代前半から第3四半期の黒色土器を概観した。黒色土器の出現については楽前遺跡や鹿島浦遺跡の例から8世紀第2四半期には少なからず共伴していることが明らかにできた。しかし、その出土例は少なく限られたものである状態の土器であった。

また、県内の黒色土器は鹿島浦遺跡32号住居跡から出土した土師器杯の内面を黒色処理したものを除き、その整形技法や形態が須恵器と同様であることも先学の研究からも明らかである。では黒色土器が導入された背景はどのようなものか次項で検討することにする。

黒色土器導入の背景

黒色土器は前述のようにヘラ磨きや酸化焔による焼成など土師器的な要素をもっているが、ロクロ整形などの整形的特徴などから須恵器工人による制作によるものである。その器形も基本的に蓋を伴う有台杯や須恵器にみられる器形である。畿内平城宮や平城京など宮都での黒色土器は土師器に黒色処理を行ったものである。また、宮都での土師器杯は古代上野国地域や東国でみられる蓋が伴わない無台の形態と蓋付き有台杯の両形態が存在し、須恵器との互換性がみられる。これに対して古代上野国地域では土師器に蓋を有する有台杯の形態が導入されることなく欠落している。黒色土器では蓋の摘み形状が上野国の特徴的な環状摘みと呼称される円盤状の粘土板を貼り付け周囲を抓み上げた形状のものではなく、宮都などで一般に見ることのできる擬宝珠状ものに近い。こうした点から黒色土器では古代上野国地域の土師器に欠落した蓋を伴う有台杯の補完のためや宮都的な形態を強く意識した形状は宮都の土器に対する憧れ的な象徴とみることができる。

また、8世紀代の黒色土器が出土した遺跡は国府域や国府周辺、郡衙や有力豪族の存在やそれに近い人物が存在したことが窺え、このことは当然、当人なり周囲の人物が宮都へ出向いており、宮都で使用されていた土器に触れていた可能性があり、宮都的な土器に強く影響を受けたことが窺える。こうした宮都的な土器は8世紀代のロクロ整形による暗文土器(13)や酸化焔焼成による須恵器(14)の要素と同様である。黒色土器を古代上野国で使用するとみられる階層においては宮都での食膳具形態に近づけようとして在地の土師器の器形に欠落した蓋を伴う有台杯や暗文を施した有台杯の生産を須恵器工人に託したとみることができる。しかし、現在出土している数量を見ると決して多いものではない。この限定的ともいえる出土状況から広い階層での使用を目的としたとは考えられず、ごく一部での使用に限定されていたとみられる。このことは出土している遺跡が元総社小学校校庭遺跡、

元総社西川・塚田中原遺跡などの国府に関連する遺跡、鹿島浦遺跡や楽前遺跡などの山田郡衙に関わる遺跡、下東西清水上遺跡など富豪層に関わる遺跡からの出土からも裏付けることができる。

注

⑴　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1996 「元総社寺田遺跡Ⅲ―一級河川牛池川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第３集―」

⑵　森　　隆　1995 「黒色土器」『概説中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会編、氏はこの中で田中琢氏等の研究をもとに全国の黒色土器についてと、その変遷について論考している。

⑶　巽淳三郎　1991 「第Ⅳ章考察、２土器、Ｃ平城宮土器の大別、vi黒色土器」『平城宮発掘調査報告書Ⅲ―内裏の調査Ⅱ―』奈良国立文化財研究所

⑷　奈良国立文化財研究所　1962 「平城宮発掘調査報告書Ⅱ」、黒色土器の出現は出土した SK219土坑が天平宝字七（763）年の木簡を伴うことから平城宮Ⅳ段階と考えられていた。

⑸　奈良国立文化財研究所　1995 「平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告書―長屋王邸・藤原麻呂邸の調査―」p.261

⑹　桜岡正信　1988 「群馬県における内面黒色処理を施す土器の一側面―ロクロ使用酸化焔焼成時を中心として―」『玉口時雄先生古稀記念考古学論文集　古代集落の諸問題』玉口時雄先生古稀記念事業会、氏は群馬県内の古墳時代から平安時代にかけての黒色処理された土師器、黒色土器についての考察を行っている。

⑺　三浦京子　1990 「群馬県における８～11世紀の黒色土器について」『東国土器研究』第３号東国土器研究会、氏は群馬県内から出土した黒色土器についてその出現と変遷及び生産工人について考察を行っている。

⑻　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　2009 「楽前遺跡（1）」、2010 「楽前遺跡（2）」による。黒色土器は「楽前遺跡（1）」の図134-２・図147―34に掲載されているものである。

⑼　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　2010 「鹿島浦遺跡」による。10号住居跡から出土した黒色土器は第61図６・７、16号住居跡は第73図―２、36号住居跡から出土した内面黒色処理の土師器杯は第128図―１に掲載されているものである。

⑽　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　2010 「大道東遺跡（3）―弥生時代以降編２―」による。黒色土器は第408図―4965、第409図―4972に掲載されているものである。

⑾　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　1998 「下東西清水上遺跡」による。黒色土器は第221図―４に掲載されているものである。

⑿　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団　2003 「元総社西川・塚田中原遺跡」による。黒色土器は第287図―0040に掲載されているものである。

⒀　桜岡正信　1998 「轆轤成形の暗文土器について」『下東西清水上遺跡』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団の考察で「搬入品では充足されなかった宮都的土器セットに執着する階層の存在を窺うことができるもの」と指摘されている。

⒁　神谷佳明　2012 「天良七堂・笠松遺跡出土の酸化焔焼成による須恵器について」『笠松遺跡・天良七堂遺跡・上根遺跡』㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団の考察で、今回の黒色土器や轆轤成形の暗文土器と同様に宮都的な土器様相を指摘した。

2　元総社小学校校庭新出土の墨書土器について

群馬県教育委員会文化財保護課　高　島　英　之

はじめに

前橋市立元総社小学校の敷地は、従来から想定されてきた上野国府の中枢部からはやや南東に外れるものの、昭和36年11月、同37年８月、同38年８月、同39年８月、同41年９～10月と断続的に群馬大学教育学部の尾崎喜左雄教授によって発掘調査が行われ、２×５間及び２×４間の東西棟の大型掘立柱建物跡が検出され、上野国府に関わる何らかの大型の施設が存在していた可能性が指摘され、注目されてきた。

また、同校地の南東に隣接する元総社寺田遺跡からは、平成３年度に行われた発掘調査において「邑厨」（邑楽郡家の厨家という意味）、「厨」、「国」、「国厨」、「冖曹司」と記された土器や人名が記された人形などが出土しており、この一帯に上野国府が存在したことを示す確実な資料が得られたことで注目されている。

今回出土した二点の墨書土器についても、記された文字及び出土地点の重要性と相俟って、上野国府の存在を決定づける資料の一つと位置づけることが出来よう。

１．平成25年度発掘調査において出土した墨書土器

平成25年８月に元総社小学校庭の３カ所、計180㎡を発掘調査し、そのうちの１カ所の溝跡から、墨書土器２点、内側に炭素を吸着させて焼成した黒色土器などが出土したという。

墨書はいずれも須恵器高台付椀の底部外面の高台の内側に記されており、記された文字は極めて薄く、整理作業中に撮影した赤外線写真で判明した。墨書土器は８世紀後半のものとみられるということで、一点は「本」の一文字、もう一点は二文字で「大家」と記されている。

２．「本」の墨書土器

「本」は一文字であるが、あたかも「大」と「十」が組み合わさったような字形で記されている。この字形は、現在では違和感を感じる向きも少なくないかもしれないが、むしろ奈良時代には写経や正倉院文書などにも良く見られる字形であり、古代の字形としてはむしろ極めてオーソドックスなものである。古代の木簡や墨書土器の類例も全国に数多い。

なお、本資料は一文字のみの記載であるため、その意味については如何様にも解釈が可能であり、それ以上の言及は難しいところであるが、「本」は「奉」という文字の省画として、その異体字として使用されることもあり、ここでは「本」という文字本来の意味を意識して記されたのか、あるいは「奉」と言う文字として、その異体として記されたのか、判断が付きがたいところである。

３．「大家」の墨書土器

今回の元総社小学校校庭における調査において「大家」と記された墨書土器が出土しているが、当時、「大家」は「オホヤケ」と訓まれたものと考えられる。

古代の史料において、「家」「宅」という文字は「イへ」でなく、「ヤケ」と訓まれる場合が多い。例えば奈良時代貴族の人名として著名な「大伴家持」、「石上宅嗣」などの例でも「家」「宅」は「ヤカ」と訓まれている。

「ヤケ」は、建物である「ヤ」と、場所を示す「ケ」（「カ」）＝「屋処」の合成語であり、この「ヤケ」という言葉に、敬意を表す尊称・美称の接頭語である「オホ」（大）及び「ミ」（御）が付けられたのが「オホヤケ」（大家）、「ミヤケ」（御家）の語であり、「ミヤケ」はヤマト王権の直轄地を示す「屯倉」を指す言葉にも、また朝廷そのものを示す意味にさえ使用されるようになった。一般的に、古代社会において農業経営の核であった経営体こそが「ヤケ」の本質であり、耕地は「ヤケ」を中心に開発され、ヤケに付属するものであり、財として相伝される単位でもあった（吉田孝「イへとヤケ」『律令国家と古代の社会』　岩波書店　1983）。

また、「公」という文字に「オホヤケ」の訓があてられるように、「大家」=「オホヤケ」とは「公」であり、公的な機関、その施設そのものを示す意味も考えられる。

文字通りに解釈すれば、「大家」とは元来、大きな「ヤケ」の意味であり、「公」=「オホヤケ」の施設・建物は一般家屋に比べて大きいと言う意味に繋がるが、まさにこの文字が記された墨書土器が出土した元総社小学校校庭からは東西棟の大型掘立柱建物跡が検出されており、記された文字通り状況があったわけである。

「大家」という文字が記された墨書・刻書土器を全国的に集成してみると、現在のところ44例が認められる（明治大学古代学研究所墨書・刻書土器データベース）。『和名類聚抄』国郡郷名項によれば「大家郷」、「大宅郷」という郷名は全国にあり、また古代氏族名にも「大家」があるので、44例ある「大家」と記された墨書・刻書土器が必ずしも官衙や公的機関の存在を示しているとは限らないが、当該資料の出土地点や周辺の状況を勘案するならば、本資料に記された「大家」の文字は、国府、あるいはその近辺に存在したことが推測出来る国府所在郡である群馬郡家、群馬馬家などの官衙施設に由来する文字と考えるのが自然である。

当該資料が出土した元総社小学校地に近接した元総社寺田遺跡から「国厨」、「国」、「冖曹司」、「邑厨」などの墨書土器が出土しているところから見れば、当然、群馬郡家や群馬馬家ではなく、上野国府との関連をより想定させるところであろう。

おわりに

今回の元総社小学校校庭から出土した「大家」と記された墨書土器は、元総社寺田遺跡から出土した「国厨」、「国」、「冖曹司」、「邑厨」、「厨」などの墨書土器や、元総社蒼海地区から出土した「大館」、「囮」などの墨書土器と同様、国府の所在を直接的に示す文字資料として、それらが出土した意義は高いものと言えよう。

元総社寺田遺跡から古代の河道が検出され、人形や斎串が出土しているところからみれば、祓えの儀式が行われた場所に近いと考えるのが自然であるが、宮都では、祓えが行われたのは宮中枢部その場所ではなく、その宮城四隅など、言わば中枢部の縁辺である。

墨書・刻書土器が地方官衙、集落を問わず、それらが祭祀や儀礼等の行為の中で用いられたことから考えるならば、墨書・刻書土器が出土するのはそうした祭祀が執り行われた場所、あるいはその近辺であり、元総社寺田遺跡出土の資料を含めたこれらの国府関連墨書土器が、必ずしも想定されている国府中枢部から若干離れた位置から出土しているのは、ある意味、当然のことなのである。

3　上野国府域出土の陶硯について

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　田　中　広　明

はじめに

上野国府域[1]から出土した陶硯は、96点にのぼる。これは、上野国内出土の陶硯(224点)のおよそ半数である。国府に官人や僧侶などが、いかに集住していたか。それを如実に物語る数字である。この陶硯について本節では、生産窯ごとの型式学的検討と出土遺跡の傾向について述べたい。そして、技法的な型式間の連携や型式の変遷を明らかにし、特殊生産品における生産者と発注者（使用者）の関係を明らかにしてみたい。

⑴　陶硯の分類

陶硯には、須恵器の坏や蓋を利用した転用硯と、当初から硯として製作された定形硯がある。定型硯には、圏脚円面硯、蹄脚円面硯、獣脚円面硯、把手付き中空円面硯、風字硯などがある。なかでも圏脚円面硯（26点）が最も多く、風字硯（９点）がそれに次ぐ。ほかは、２～５点である。そこで、圏脚円面硯と風字硯について、生産窯ごとに型式学的検討を行いたい。

圏脚円面硯　須恵器の高台付き椀や坏、鉢を母形とした基形を逆転させ、底部外面を陸とする。脚部には、円形・長方形などの透かしや平行刻みなどの意匠を施す。安中市秋間窯（地尻遺跡・二反田窯）・高崎市吉井窯・藤岡市藤岡窯（竹沼切通し窯）・みなかみ町月夜野窯（洞Ⅲ窯）・太田市金山窯などで７世紀後葉から10世紀にかけて生産された（括弧内は生産遺跡。他は消費遺跡から推定）。

分類上の留意点（着目点）は、陸（墨をする部分）と内堤、外堤の関係、上位凸帯と下位凸帯の形状、裾部の形、脚部の意匠（透かし、刻み、貼付）などがある。上野国内出土の陶硯には、円形・長方形・方形の透かしがみられるが、東海地方や北陸地方でみられる十字、人字形の透かしはみられない。型式変化の方向は、精緻な意匠から簡易で質素な意匠へ、大型品から小型品へ、高脚化、または短脚化などである。

［Ⅰ類］　秋間窯系の圏脚円面硯。①大形の円面硯で全体の断面が「ハ」の字形。外堤が低く陸部が凸字状。外堤と上位凸帯の区別がなく、外方へ突出する。下位凸帯は、突線状。上野国府域は下東西遺跡、鳥羽遺跡、大屋敷遺跡、生産窯は秋間窯(地尻遺跡)、国内消費地は高崎市保渡田東遺跡、前橋市二宮洗橋遺跡、藤岡市上栗須寺前遺跡、安中市愛宕山遺跡などにみられる。７世紀末から８世紀前葉。

②大形で厚手の円面硯。外堤が「コ」の字状に高く突出する。陸部は外堤より低く、外堤に埋没する。透かし穴は長方形で連子窓状。上野国府域では鳥羽遺跡、国内消費地は安中市人見中の條遺跡、藤岡市上栗須寺前遺跡にみられる。８世紀中葉から後半。

③陸部がさらに沈み込み、外堤が斜め上方に伸びる。上位凸帯は緩い突線状。上野国府域からは、大屋敷遺跡、元総社蒼海（41）遺跡、元総社小見遺跡、生産窯は藤岡窯（緑埜地区遺跡）、消費遺跡は渋川市御幸田畑中遺跡などにみられる。９世紀前半。

④陸部が窪み、上位凸帯は突線状。脚部に長方形の透かしが、四方または連子窓状に開く。下位凸帯はない。上野国府域では、元総社寺田遺跡、大屋敷遺跡、天神Ⅲ遺跡など、生産窯は秋間窯(二反田窯)、消費遺跡から出土はない。８世紀前半。なお、大屋敷遺跡の陶硯は、上位凸帯の下に円形珠文がめぐる。簡略化した蹄脚円面硯である。同様の例が、静岡県藤枝市御子ヶ谷遺跡（駿河国志太郡家跡）にみられる。

⑤外堤が高く斜めに立つ。下位凸帯は無く、脚端にカエリがある。人見中の條遺跡にみられる。９世紀前半。

［Ⅱ類］　吉井・藤岡窯系の円面硯。①全体に厚手で中型。陸部から外堤は水平、外堤は直立、上位凸帯と下位凸帯は高い突線状。脚部は、長方形の透かしと縦の平行刻み、または「×」がある。上野国府域では、鳥羽遺跡、上野国分寺中間地域（３点)、生産窯は秋間窯（二反田窯)、消費遺跡は玉村町上之手石塚遺跡（２点)、高崎

市黒熊八幡遺跡、日高遺跡、伊勢崎市下淵名高田遺跡などがある。８世紀末から９世紀前半。

②上部が小さい。「ハ」の字状に大きく開く。裾部には、須恵器の椀蓋のようなカエリがある。陸部から外堤は水平、または緩く湾曲する。内堤と外堤は「コ」の字状。上位凸帯は、二条線か消滅。下位凸帯はない。脚部に縦の平行刻み、または、網代状の文様がある。生産窯は藤岡窯(竹沼切通し窯)、消費遺跡は玉村町上之手石塚遺跡、安中市五料平遺跡などがある。９世紀前半。

③内堤と外堤が「コ」の字状で天井部に付く。下位凸帯はない。脚端にはカエリがある。縦の平行刻み、長方形透かしがある。上野国府域では、上野国分寺中間地域、その他の消費遺跡では、富岡市上田篠古墳群、富岡小舟遺跡、高崎市黒熊八幡遺跡、安中市北原遺跡、玉村町上之手石塚遺跡などである。８世紀末から９世紀前半。

［Ⅲ類］　月夜野窯系の円面硯。①器高が低く、脚部の裾が広がりカエリがある。脚部には円孔の透かし、二条の平行線がある。沼田市大釜遺跡の出土のみである。新潟県に近似例が多い。８世紀第Ⅳ四半期。

②椀を逆転した形状。下位凸帯は無く、上位凸帯も緩い沈線状。透かし穴は、長方形か隅丸長方形。上野国府域では、元総社寺田遺跡、推定上野国府周辺遺跡（３点）から出土した。生産窯は月夜野窯（洞Ⅲ遺跡)、消費遺跡は玉村町稲荷山遺跡群である。新潟県上越地方や福島県会津若松市大戸窯の円面硯と近い。９世紀後半。

［Ⅳ類］　金山窯系の円面硯。椀を伏せた形。外堤が高く内堤は凸線状。脚部に平行刻み、円孔が施される。東長岡戸井口遺跡、鳥山下遺跡、成塚住宅団地遺跡（３点）など東毛、新田郡の消費遺跡から出土する。上野国府域から出土はない。

つぎに、上野国内諸窯に型式学的系譜を追えない上野国府域の事例を述べたい。まず、下東西遺跡の円面硯である。外堤と上位凸帯が耳状の断面となる。下位凸帯は、突線状で脚端が大きく外反し、脚部に長方形二段透かしを施す。同様の意匠は、三重県明和町斎宮跡70次、奈良県明日香村桧前上山遺跡、兵庫県加西市繁昌廃寺、山梨県敷島町天狗沢窯跡、新潟県新井市栗原遺跡、滋賀県大津市湖西線関連遺跡など７世紀後葉（第Ⅲ四半期）の主要古代寺院や拠点的な官衙遺跡に出土がみられる。

つぎは、元総社寺田遺跡の筆立て付き円面硯である。藤岡市上栗須寺前遺跡の例とともに、上位凸帯と外堤の間に円筒状の筆立てが付く。脚部には、長方形、または正方形の透かしが施される。筆立ては面取りされ、上部から小孔を穿つ。この孔の大きさを筆の太さ（径）とすると、約６～８㎜の中細の筆となる。筆立ての事例は、日本国内に30例弱ある。筆立てには、寺田遺跡のように①外堤の外側に筒状の粘土を貼り付ける、②外堤の内側（海部）に円孔を穿つ、③脚部に円孔を穿つ三種類がある。寺田遺跡は、８世紀前半である。

風字硯　「風」字形をした水平硯。墨を擦る陸の周囲に外堤をめぐらす。内堤には、高崎市下五反田１号窯のように「筆置き」の機能がある。脚は２～４脚、丁寧に面取りされ獣脚となることもある。

［Ⅰ類］　風冠状。①外堤両端が小さく開き、手前の外堤はない。前橋市中島遺跡・高崎市熊野堂遺跡にみられる。10世紀前半。②外堤両端の開きが小さく直線的、または外反する。上野国府域の鳥羽遺跡(２例)、元総社寺田遺跡、西川遺跡にみられる。10世紀後半。

［Ⅱ類］　「∩」字状。①細長い「∩」字形をした風字硯。下五反田１号窯は、手前にも外堤がめぐる。上野国府域の鳥羽遺跡、生産窯の下五反田窯、消費遺跡の榛東町別府八幡下遺跡などがある。下五反田遺跡のみ古く９世紀後半、他は10世紀。②頭部が丸みを持ち全体に幅広。高崎市多比良遺跡、甘楽町白倉下原遺跡、前橋市清里南部遺跡、吉岡町大久保Ａ遺跡など上野国府域以外の消費遺跡から出土。９世紀後半。

［Ⅲ類］　三角形で箕形の風字硯。手前に中堤を設ける。上野国府域では下東西遺跡、生産窯は下五反田遺跡、消費遺跡では高崎市黒熊八幡遺跡、渋川市諏訪ノ木遺跡、有馬条里遺跡、半田中原遺跡、安中市人見中の條遺跡（２点）など西毛地方に分布する。９世紀前半から９世紀末。なお、下五反田１号窯では、Ⅱ類とⅢ類を同一の窯で焼成した。なお、黒熊八幡遺跡と下五反田１号窯の風字硯は同巧品である。

［Ⅳ類］　歪な楕円形。猿面硯の模倣である。粗雑な作りで外堤がめぐる。生産窯は藤岡市竹沼切通し窯、み

なかみ町洞窯、消費遺跡は安中市松井田工業団地遺跡、高崎市川内遺跡などがある。10世紀から11世紀。

つぎに、上野国外に生産窯や系譜のある風字硯をあげたい。まず、下東西遺跡では、外堤外面に円形の竹管状文を連続して施文し、水鳥を意匠とする形象硯である。７世紀末から８世紀前半。つぎに、元総社小見内Ⅲ遺跡は、小型の三角形状の風字硯である。11世紀に下る。東京都八王子市南多摩窯で同形状の風字硯がみられる。

また、元総社蒼海（33）遺跡の風字硯は、細かなヘラミガキで器面を丁寧に整えた後、黒色処理を施す。全体に丸みがあり、厚手で隅丸方形である。国内に類例が無く、石硯の模倣である。11世紀から12世紀。なお、前橋市中島遺跡からも黒色土器の風字硯が出土した。中島遺跡は、さらに細かくヘラミガキを施し、緩く湾曲する。同様の例が、岩手県奥州市胆沢城跡、山梨県山梨市大原遺跡、京都府京都市仁和寺境内遺跡などにみられる。

このほかに上野国府域からは、把手付き中空円面硯（上野国分寺中間地域、元総社蒼海（12）遺跡）、蹄脚円面硯（元総社西川遺跡、総社小見Ⅲ遺跡）、無脚円面硯（上野国分寺中間地域）などがある。把手付き中空円面硯は、ほかに渋川市半田中原・南原遺跡、吉岡町金竹西Ⅴ遺跡、高崎市保渡田東遺跡、西三社免遺跡、熊野堂遺跡、堤上遺跡など古代の群馬郡に集中する。

また、獣脚円面硯は、上野国府域のみの出土である。上位凸帯の下に珠文状の貼付と脚を施す。７世紀後半から８世紀前半。獣脚円面硯は、尾張国猿投窯、美濃国美濃須衛窯、和泉国陶邑窯などで生産され、官人が集住する平城京や各国の国府、拠点的な官衙から出土する。都城と地方を往反した人物の文房具である。

このほか、無脚円面硯が、伊勢崎市上淵名明神遺跡、富岡市本宿郷土遺跡などにみられる。

２、陶硯の変遷と需要層

７世紀後葉　陶硯は、国府や郡家（評家）などの地方官衙の成立に先がけて各地で生産され、使用されていた。たとえば、東京都の八王子市小山窯で７世紀後葉に生産され、館（たち）と考えられる群馬県の下東西遺跡などで用いられていたことが証拠である。たとえば、屯倉に使わされた田領や評造たちが、戸籍（670年の庚午年籍）や貢納物の京進にあたり木簡や文書を作成したが、そのときに陶硯が用いられたと考えられる(2)。つまり、役所が無くとも行政は行われていたのである。この間の事情を初期の陶硯は、物語っている。評造の居宅や屯倉の「御宅」、または居留施設である「館」が、陶硯を用いた人物がいた場と考えたい。

７世紀末～８世紀前半　多彩な陶硯が登場する。一般的な圏脚円面硯に加え、獣脚円面硯、把手付中空円面硯、形象硯などである。圏脚円面硯は、Ⅰ―④類がみえる。把手付中空円面硯は、榛名山東麓の国府所在郡である群馬郡の集落遺跡や上野国府域から出土する。この陶硯は、官人が携行した陶硯といわれる。官人たちの集住の傾向をうかがうことができる。また、獣脚円面硯は、都城から下向した官人たちを推定させる。

８世紀後半　Ⅰ―②類やⅢ―①類などがみられる。秋間窯系の陶硯ばかりではなく、上野国内諸窯で生産がみられる。しかし、上野国府域の陶硯は、秋間窯系の製品が多い。この段階、須恵器生産は、飛躍的な発展を遂げるが、上野国府域の陶硯の需要者は、西毛地区の諸窯に発注していたようである。

９世紀前半　円面硯のⅠ―③･⑤類、Ⅱ―①～③類、Ⅲ―②類、Ⅳ類などがみられる。さらに風字硯のⅠ―①類、Ⅲ―③類などがみられる。上野国内諸窯でそれぞれ特色のある円面硯が生産された。それは、生産量（受注数）が少なく、反復生産を行わないため、個性の際だった製品が生産されたと考えられる。そこでは、ベースとなる器種、たとえば須恵器坏や長頸瓶、甕などの口縁部の特徴や高台の特色が、そのまま陶硯の凸帯や脚端部に映されることとなる。

このころになると、上野国内の諸窯でも陶硯が生産され、郡家ばかりか集落遺跡でも陶硯がみられるようになる。集落に住む人物が、文字をあつかう実務にかかわっていたためであろう。陶硯を入手するため彼らは、日常雑器を入手する流通ルートを活用して生産窯に発注していたと考えられる。集落に住む彼らは、郡家の出先機関や郷家など文書事務にかかわっていたため、陶硯が必要だったと考えたい。また、西毛系諸窯以外の陶硯が、上野国府域にも登場する。それは、より広域に文書実務に耐える人々が集められたのか、国府の官人たちが、国内

諸窯に陶硯を発注するようになったためと考えたい。

9世紀後半　円面硯はⅢ―②・③類、Ⅳ類など、風字硯はⅠ―②類、Ⅱ―①・②類、Ⅲ類などがみられる。円面硯は小型化し、代わって風字硯が主体となり、種類も多い。複数の地域の窯で生産され、上野国府域、および郡家・集落などで用いられた。

10世紀　円面硯は、Ⅲ―③類、Ⅳ類、風字硯はⅣ類がみられる。円面硯は簡略化し、小型化がさらに進む。風字硯も小型化し、猿面硯と似た形状となる。猿面硯は、須恵器大甕の胴部破片を巧みに整形し、楕円形や卵形とした転用硯である。猿面硯と同じ形状に彫った木型に嵌め込んで使用した。木型は、黒漆が塗られた。

11世紀以降　全国的にも出土量が乏しくなる。平安京や美濃、尾張、遠江、三河、播磨国などで生産された。中国の石硯を模倣した小型の風字硯や方形硯、長方形硯などが、平安京や各地の国府、寺社などでみられる。

まとめ

古代の文書行政に欠かせない陶硯は、官人や官衙の集中する国府で最も多く使用された。上野国府も例外ではない。上野国府域では、国内に展開した諸窯で生産され、とくに秋間窯をはじめとする西毛諸窯の製品が用いられた。9世紀以降、それ以外の上野国内諸窯の製品も上野国府域で用いられるようになる。西毛地区が、上野国府に出仕する官人を卓越して排出したか、上野国の各地から国府に集った官人が、西毛地区の諸窯へ陶硯の生産を発注したためであろう。

また、上野国内で陶硯の出土遺跡は、圧倒的に榛名山麓が多い。これは、榛名山麓の遺跡が、国府所在郡である群馬郡に属し、文字をあつかう人々を多く輩出していたためと考えられる。文字は国府所在郡に住む人々の負担のひとつだったのである。このように国府所在郡が、当該国内で最も多くの陶硯を出土する郡である令制国は、武蔵国（多摩郡）、下野国（都賀郡）、常陸国（茨城郡）、信濃国（筑摩郡）などである。

以上のように、上野国府域から出土した陶硯の大半は、国内の諸窯に発注して生産されていた。このほかに都城から訪れた国司や勅使などが携えたと考えられる陶硯もあった。今後、陶硯の出土した遺構や分布域の検討が進み、国府域の諸機能の実態、陶硯所有者の人物像などがさらに明らかとなることを期待したい。

註

(1)　本章では、下東西遺跡や山王廃寺、大屋敷遺跡付近までを含めて便宜的に「上野国府域」とする。

(2)　陶硯は、役所が整え、管理したのか、官人たちが自備したのかについては、後者と考える。なぜならば、官衙が準備したならば、交替実録帳や寺院資財帳などに備品として掲載されたり、購入記録が残るはずである。造東大寺司が、平城京の市で硯を購入している事例があるが、これは「坏蓋研」、いわゆる転用硯であり、定型硯を購入したわけではない。

　また、官衙が、陶硯の生産や消費を管理していたならば、共通した同巧品の陶硯が、多量に出土するはずである。陶硯の著しい偏差は、生産者に官人たちが、個別発注した証し表れと理解したい。

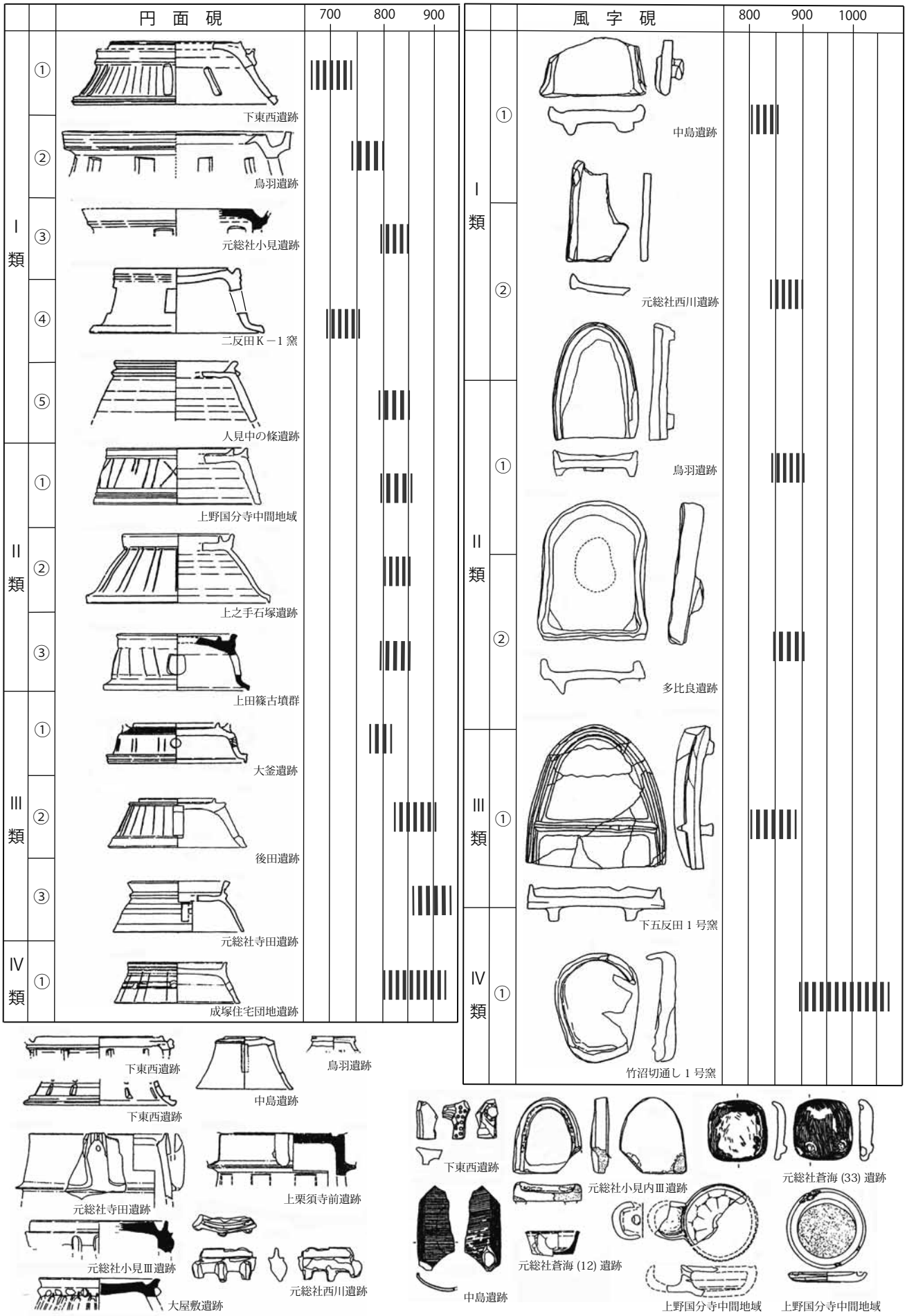
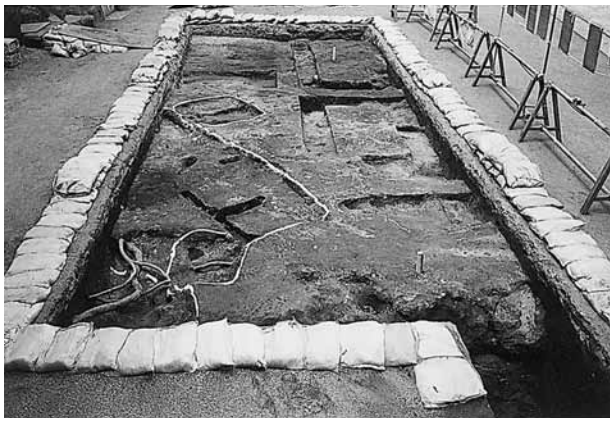


Fig.39　陶硯の分類と存続期間、特殊な陶硯

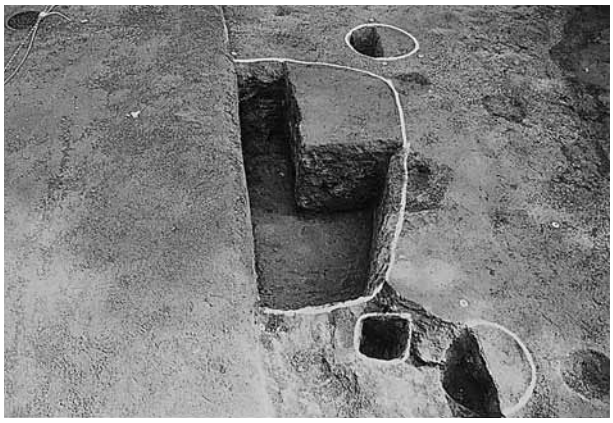
写　真　図　版



1　17トレンチ全景（南から）

2　17トレンチW―1号溝跡全景（東から）

3　18トレンチ全景（北東から）

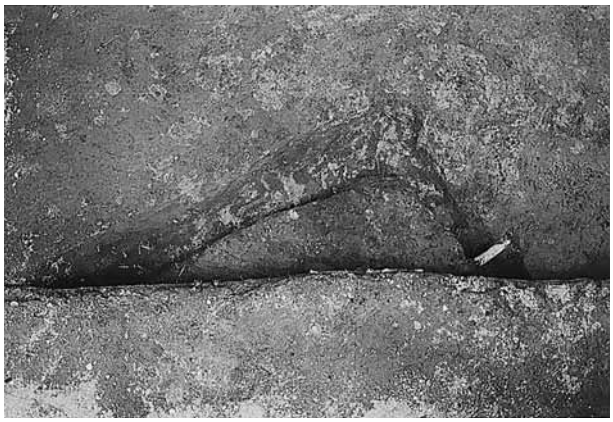


4　18トレンチD―2号土坑全景（北から）

5　19トレンチ全景（北から）

6　19トレンチTP2土層堆積状況（北から）

１　22トレンチ全景（南から）

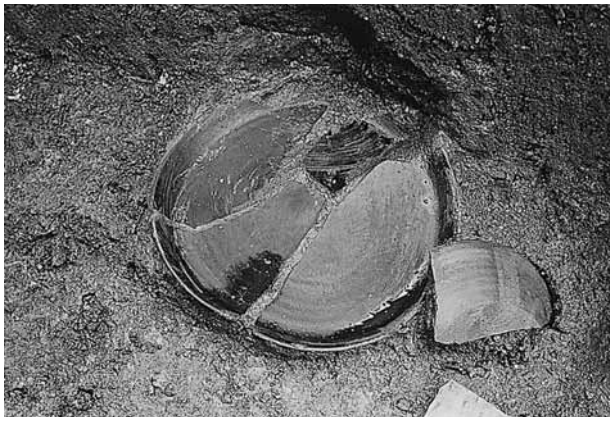


２　22トレンチＨ―１号住居跡全景（西から）

３　22トレンチＨ―１号住居跡遺物出土状態（北から）

４　21ａトレンチ全景（南から）

５　21ａトレンチＷ―１号遺物出土状態（東から）



６　21ａトレンチＷ―１号黒色土器盤出土状態（南から）

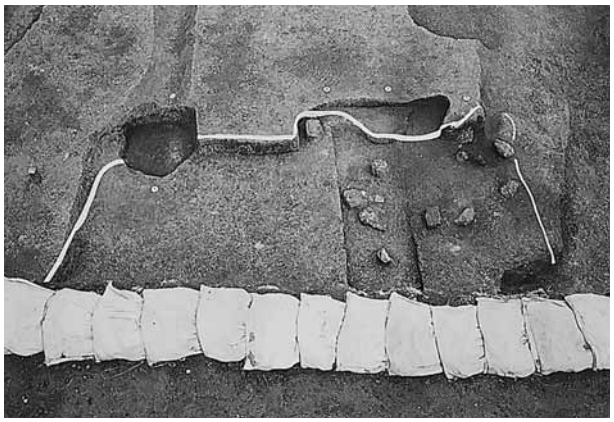
1　21ａトレンチW―１号須恵器高盤出土状態（南から）

2　21ａトレンチH―１号住居跡全景（南西から）

3　21ａトレンチ土坑・ピット検出状態（南から）

4　21ｂトレンチ全景（西から）

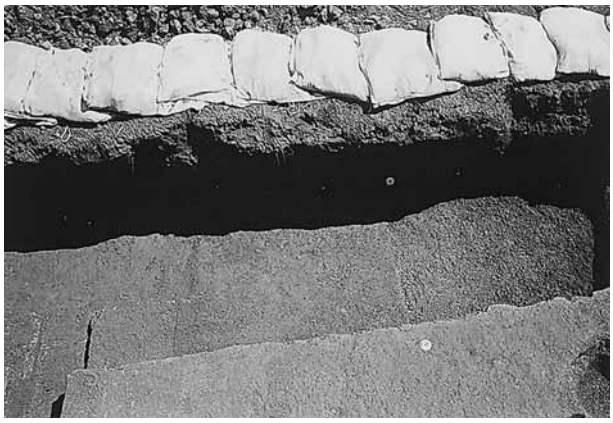
5　23トレンチ全景（南から）



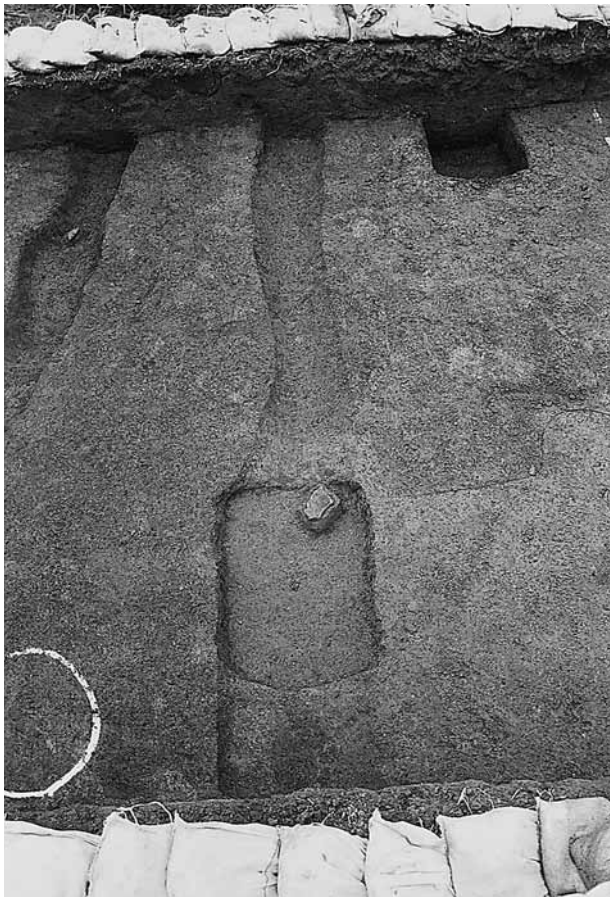
１　23トレンチＨ―１号住居跡全景（西から）

２　23トレンチＨ―２号住居跡全景（東から）

３　23トレンチＨ―３号住居跡全景（西から）

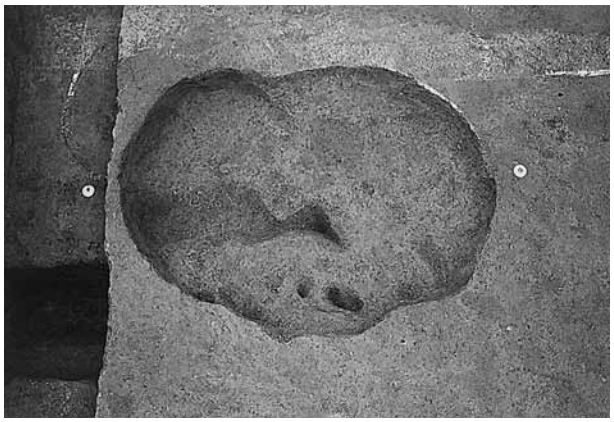


４　23トレンチＨ―４号住居跡全景（西から）



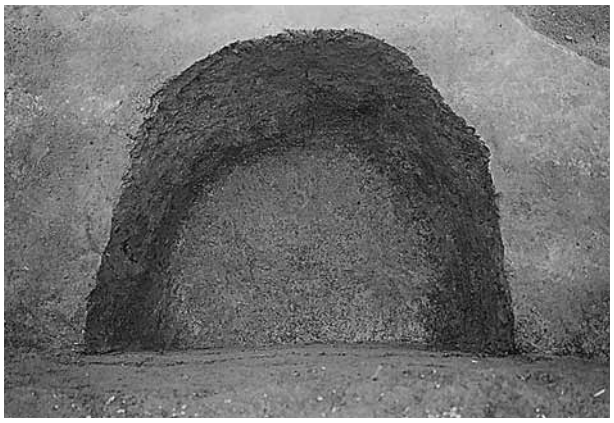
５　23トレンチＷ―２・Ｄ―１号土坑全景（西から）

６　23トレンチＷ―３号溝跡全景（西から）



1　23トレンチD―2号土坑全景(北から)

2　23トレンチD―3号土坑全景(北から)



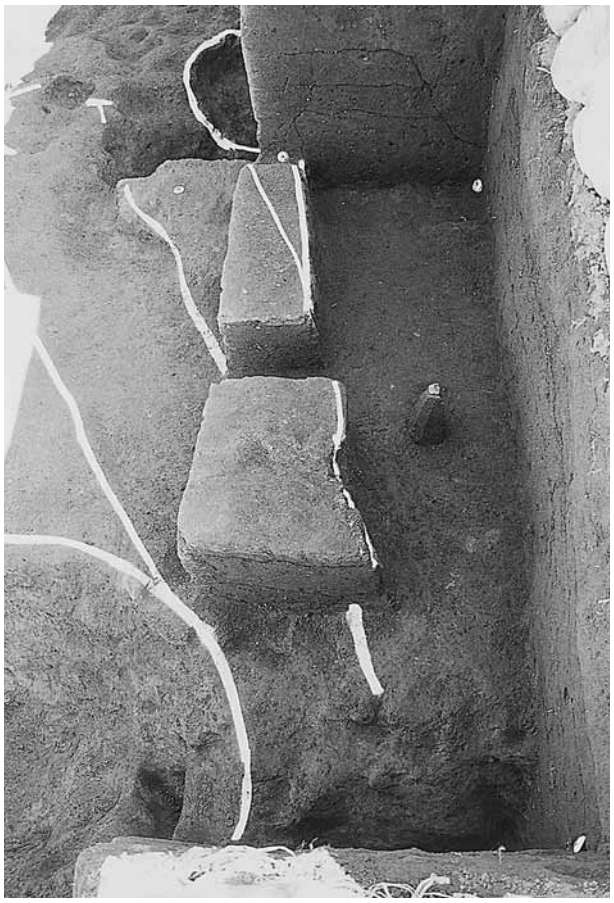
3　23トレンチD―4号土坑全景(南から)

4　23トレンチD―5号土坑全景(西から)

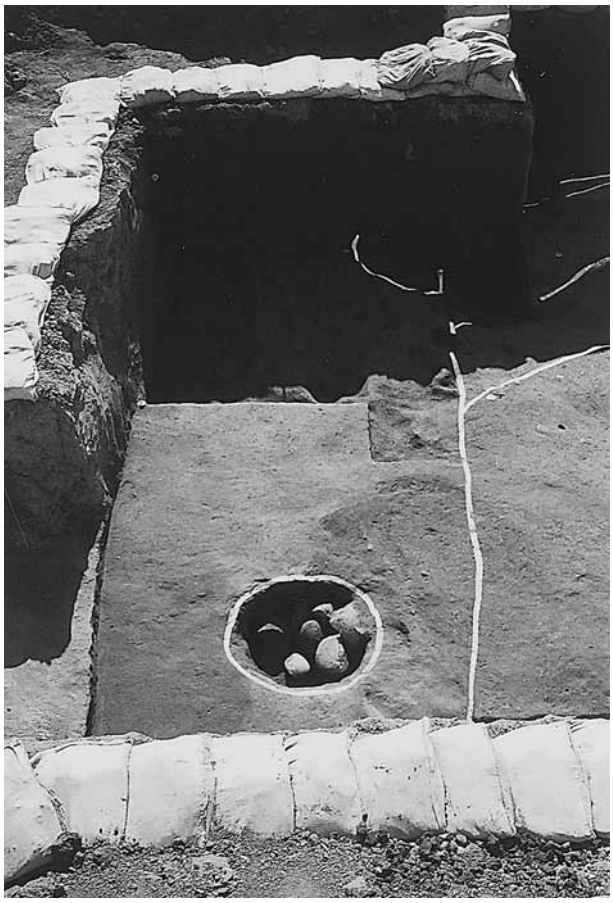
5　26トレンチ全景(東から)

6　26トレンチH―1号住居跡・W―3号溝跡全景(西から)

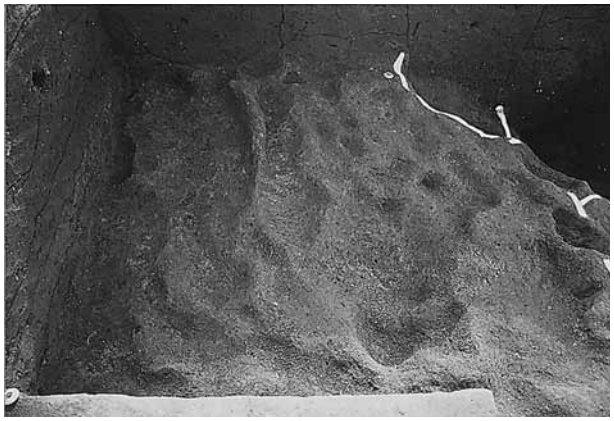
7　26トレンチW―1号溝跡全景(北から)



1　26トレンチW―2号溝跡・H―2号住居跡全景(西から)



2　26トレンチA―1号道路状遺構全景(北から)



3　26トレンチA―1号道路状遺構掘り方(北から)

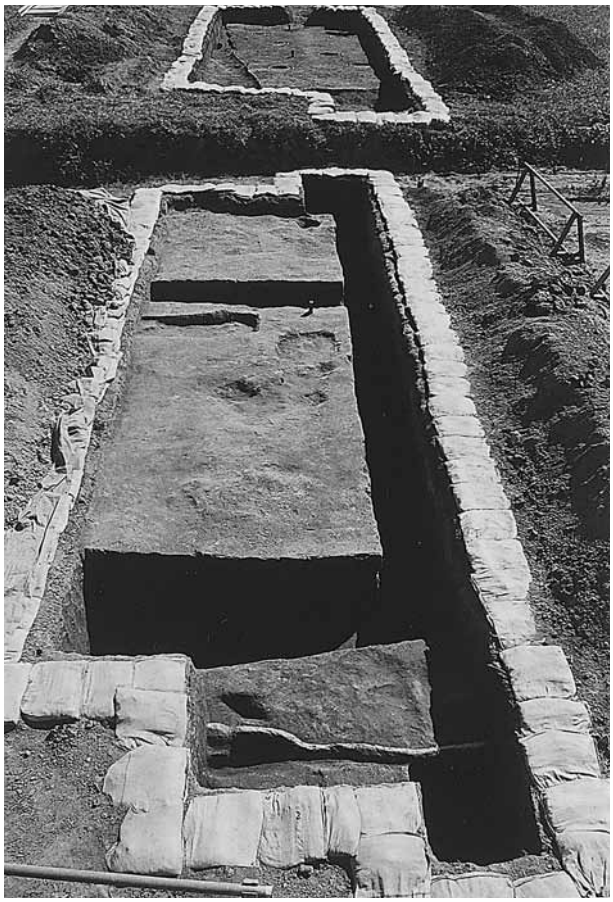
4　26トレンチA―2号道路状遺構検出状況(26トレンチ南壁)

5　26トレンチA―2号道路状遺構検出状況(東から)

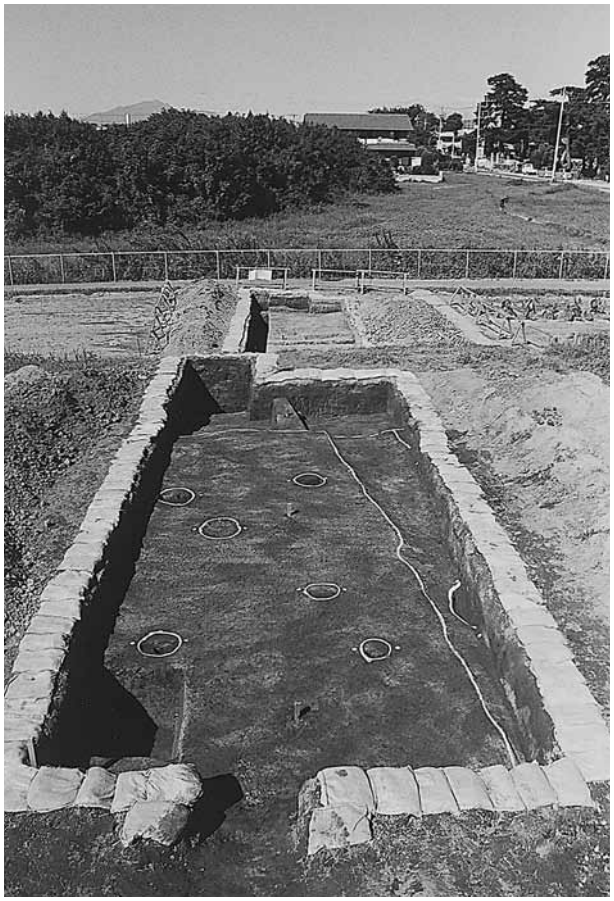
1　26トレンチO―1号落ち込み遺物出土状態(北から)

2　26トレンチD―5号土坑全景(北から)

3　24a・bトレンチ付近から北東を望む



4　24aトレンチ全景(北から)



5　24bトレンチ全景(南から)

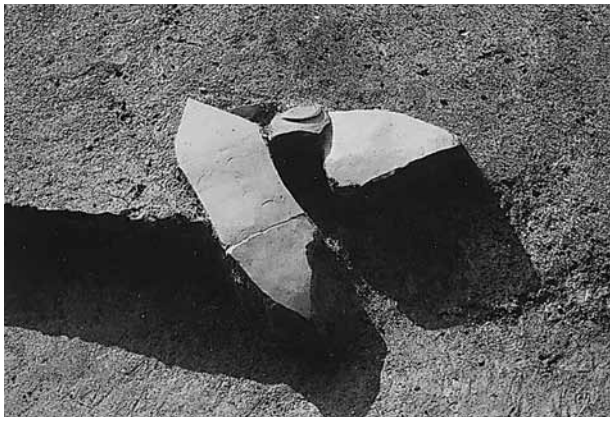
6　24aトレンチW―1号溝跡全景(西から)

１　24ａトレンチ掘り込み状態（南東から）

２　24ｂトレンチＷ―２号溝跡全景（西から）

３　25トレンチ全景（南から）

４　25トレンチＷ―１号溝跡遺物出土状態（南から）



５　25トレンチ遺物出土状態（包含層）（東から）

６　25トレンチＤ―１号土坑全景（北から）

７　調査風景（26トレンチ）

22-1

22-3

19-3

21a-88

21a-27

21a-28

21a-84

21a-30

21a-31

21a-34

21a-37

21a-50

21a-47

21a-51

21a-62

各トレンチ出土遺物(1)

21a-63

21a-64

21a-67

21a-81

21a-68

21a-77

21a-87

21a-26

21a-59

21a-60

25-3

25-8

25-6

25-10

25-11

各トレンチ出土遺物(2)

抄　録

フリガナ	スイテイコウヅケコクフ
書名	推定上野国府
副書名	平成25年度発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	上野国府等範囲内容確認調査報告書
シリーズ番号	III
編著者名	阿久澤智和・寺内勝彦
編集機関	前橋市教育委員会
編集機関所在地	〒371-0853　群馬県前橋市総社町三丁目11-4
発行年月日	西暦2015年３月13日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
スイテイコウヅケコク フ 推定上野国府	マエバシ シ モトソウジャ 前橋市元総社 マチイッチョウメ 町一丁目31-45ほか	10201	25A147	36°23′18″	139°02′19″	20130701 ～ 20131127	574㎡	範囲内容調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な検出遺構	主な出土遺物	特記事項
推定上野国府	集落跡 官衙 城館跡	古墳時代 古代 中世・近世 不明	住居跡３軒 住居跡６軒、溝跡３条、土坑１基 溝跡７条、道路２ヶ所、ピット群 溝跡３条、土坑11基、ピット群	墨書土器、黒色土器、暗紋土器	国府関連施設の区画溝を検出

上野国府等範囲内容確認調査報告書III

推定上野国府　平成25年度調査報告

2015年３月10日　印刷
2015年３月13日　発行

編集・発行／前橋市教育委員会文化財保護課
印刷／松本印刷工業株式会社